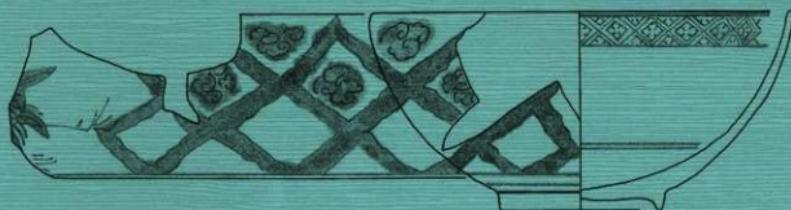


# 高知城跡

— 西堀地区試掘確認調査報告書 —

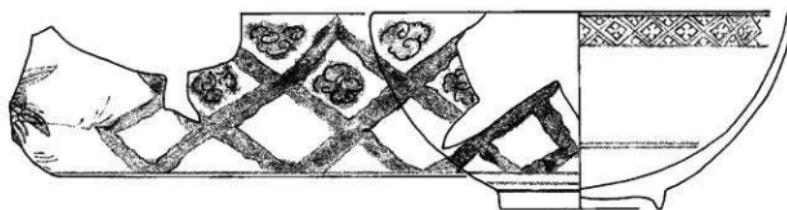


2009. 3

高知市教育委員会

# 高知城跡

— 西堀地区試掘確認調査報告書 —



2009. 3

高知市教育委員会



調査区遠景（西より）



堀西岸検出状況（東より）



瓦溜4遺物出土状況



SX1と焼土層（東より）



景德鎮窯系色絵皿（54）



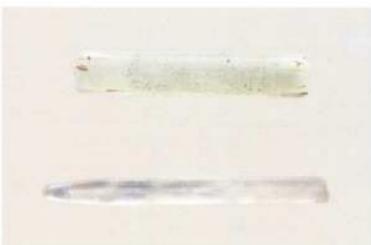
同



初期伊万里皿（333）



肥前窯染付壺（351）



ガラス製簪（326）



尾戸窯焼蓋物（240）



鉄釉漫瓶（252）



焼塩壺（288）

## 序

国史跡高知城跡は、山内一豊による慶長6（1601）年からの大高坂山上への築城に端を発し、その後、享保12（1727）年の焼失を経ながらも、宝暦3（1753）年までには復興を遂げました。そして往時の姿を伝えた天守を初めとする本丸及び追手門は星霜を重ね、国の重要文化財にも指定され、その偉容を南国の大空に誇っています。

現在の城跡は周囲の建物が取り壊されたが、高知公園として多くの県民や観光客が訪れています。一方、防御機能を失った内堀の多くは埋められ、また堀内にも市街化の波が押し寄せ、本来の近世城郭の姿は大きく変貌を遂げています。

この事態に臨み、高知県では、かつての城跡の姿を取り戻すべく、平成16（2004）年に「史跡・高知城跡整備計画」を策定し今後の整備の方向性を示しています。

今回の試掘確認調査は、古絵図等に描かれた城西側の内堀跡及び屋敷跡等の確認を目的として実施されました。その結果、内堀西岸のほか上級武士の屋敷跡等に関わる遺構や遺物など多くの成果を得ることができました。

この報告書が、高知城及び城下町の歴史を理解するために新たな役割を果し、地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、財務省高知事務所をはじめ、調査に御協力いただきました多くの皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月

高知市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成19年度に実施した高知城跡西堀地区試掘確認調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市丸ノ内1丁目24-2に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成19年度から20年度にかけて行なった。

平成19年6月20日～7月4日、対象地面積3,500.93m<sup>2</sup>、調査面積185.4m<sup>2</sup>

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 同 生涯学習課主任 高石敏子

調査担当 同 生涯学習課指導主事 梶原瑞司、浜田恵子

5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
6. 調査にあたっては、財務省高知事務所、高知県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7. 発掘調査にあたっては松田直則、池澤俊幸をはじめとする諸氏から助力を得た。また、絵図・文献調査に関して内川清輔、吉松靖峯、筒井秀一、陶磁器の資料調査について赤松和佳、日下正剛、鈴木裕子、はじめ諸氏のご教示を賜った。(敬称略)
8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。  
三谷哲彦 松木富子 島村加奈 恒石陽子 邊辺可奈子
9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10. 遺構の略号は、土坑：SK、柱穴及び小型の穴：P、性格不明遺構：SXとした。
11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「07-KC」である。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法	9
第Ⅳ章 調査の成果	
1. TP1	11
2. TP2	11
3. TP3	12
4. TP4・5	14
5. TP6・7	14
6. TP8	21
7. TP9	52
第Ⅴ章 考 察	
第1節 史料にみる高知城跡西堀地区の性格と変遷	72
第2節 高知城跡西堀地区、検出遺構の性格	84

# 挿図目次

Fig. 1 高知城跡西堀地区 2007 年度調査調査区位置図	1
Fig. 2 宽文己酉高知松園(抜粋)	6
Fig. 3 享和元年高知郭家中等飯園(抜粋)	7
Fig. 4 高知郭中図(抜粋)	7
Fig. 5 高知城跡及び周辺の遺跡	8
Fig. 6 調査区位置図及び試掘坑配置図	9
Fig. 7 検出遺構全体図	10
Fig. 8 TP2セクション図	12
Fig. 9 TP3平面図・セクション図、TP1・4・5柱状図	13
Fig. 10 TP6・7平面図・セクション図	15
Fig. 11 SK1～3平面図・セクション図、SK1出土遺物実測図	17
Fig. 12 瓦溜1出土遺物実測図(1)	18
Fig. 13 瓦溜1出土遺物実測図(2)	19
Fig. 14 瓦溜1出土遺物実測図(3)	20
Fig. 15 瓦溜2出土遺物実測図(1)	21
Fig. 16 瓦溜2出土遺物実測図(2)	22

Fig. 17	瓦溜2出土遺物実測図(3) .....	23
Fig. 18	TP8平面図・セクション図 .....	24
Fig. 19	SK3～6・P1・2平面図・セクション図 .....	25
Fig. 20	SK6・SX2出土遺物実測図 .....	26
Fig. 21	瓦溜3出土遺物実測図(1) .....	27
Fig. 22	瓦溜3出土遺物実測図(2) .....	28
Fig. 23	瓦溜3出土遺物実測図(3) .....	29
Fig. 24	瓦溜3出土遺物実測図(4) .....	30
Fig. 25	瓦溜3出土遺物実測図(5) .....	31
Fig. 26	瓦溜3出土遺物実測図(6) .....	32
Fig. 27	瓦溜3出土遺物実測図(7) .....	33
Fig. 28	瓦溜3出土遺物実測図(8) .....	34
Fig. 29	瓦溜4出土遺物実測図(1) .....	36
Fig. 30	瓦溜4出土遺物実測図(2) .....	37
Fig. 31	瓦溜4出土遺物実測図(3) .....	38
Fig. 32	瓦溜4出土遺物実測図(4) .....	39
Fig. 33	瓦溜4出土遺物実測図(5) .....	41
Fig. 34	瓦溜4出土遺物実測図(6) .....	42
Fig. 35	瓦溜4出土遺物実測図(7) .....	43
Fig. 36	瓦溜4出土遺物実測図(8) .....	44
Fig. 37	瓦溜4出土遺物実測図(9) .....	45
Fig. 38	瓦溜4出土遺物実測図(10) .....	47
Fig. 39	瓦溜4出土遺物実測図(11) .....	48
Fig. 40	瓦溜4出土遺物実測図(12) .....	49
Fig. 41	瓦溜4出土遺物実測図(13) .....	50
Fig. 42	瓦溜4出土遺物実測図(14) .....	51
Fig. 43	TP8包含層II層出土遺物実測図 .....	52
Fig. 44	TP9セクション図 .....	53
Fig. 45	SX1・TP9包含層II層出土遺物実測図 .....	55
Fig. 46	SX1出土遺物実測図 .....	56
Fig. 47	絵図にみる堀西側の変遷(1) .....	81
Fig. 48	絵図にみる堀内側の変遷(2) .....	82
Fig. 49	高知城内堀跡推定位置図 .....	85
Fig. 50	昭和20年戦災図(抜粋) .....	85

## 写真図版目次

卷頭図版1 調査区遠景（西より）、堀西岸検出状況（東より）	
卷頭図版2 瓦窯4遺物出土状況、SX1と焼土層（東より）	
卷頭図版3 景徳鎮窯系色絵皿（54）、同、初期伊万里皿（333）、肥前産染付壺（351）、ガラス製簪（326）、尾戸焼蓋物（240）、鉄輪漫瓶（252）、焼塙壺（288）	
PL. 1 調査区遠景（西より）、TP2瓦窯出土状況（南より）	95
PL. 2 TP3堀西岸検出状況（東より）、同 石垣出土状況（東より）	96
PL. 3 TP3石垣出土状況（南より）、TP6完掘状況（南より）	97
PL. 4 TP6 SK1・2検出状況（西より）、同 SK1遺物出土状況（南より）	98
PL. 5 TP8瓦窯4遺物出土状況（北より）、同	99
PL. 6 TP8瓦窯4遺物出土状況（326）、同	100
PL. 7 TP8南壁、同 SX2セクション	101
PL. 8 TP8 SX2検出状況（北より）、同 P1櫛出土状況	102
PL. 9 TP9焼土層（SX1-1層）検出状況（北西より）、同 南壁セクションと焼土層	103
PL. 10 TP9 SX1遺物出土状況（336）、同セクション（南より）	104
PL. 11 TP9 SX1セクション（南西より）、同（南東より）	105
PL. 12 SK1遺物出土状況（6）、瓦窯4遺物出土状況（286）、同、同漆製品、同、同、 SX2遺物出土状況（56）、TP8作業風景	106
PL. 13 SK1・瓦窯1出土遺物	107
PL. 14 瓦窯1～3・SX2出土遺物	108
PL. 15 瓦窯3出土遺物	109
PL. 16 瓦窯3・4出土遺物	110
PL. 17 瓦窯4出土遺物	111
PL. 18 瓦窯4出土遺物	112
PL. 19 瓦窯4出土遺物	113
PL. 20 瓦窯4出土遺物	114
PL. 21 瓦窯4出土遺物	115
PL. 22 瓦窯4出土遺物	116
PL. 23 瓦窯4出土遺物	117
PL. 24 包含層II層・SX1出土遺物	118

## 表目次

Tab. 1～13 遺物観察表（陶磁器・土器）	57～69
Tab. 14 遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品）	70
Tab. 15・16 遺物観察表（瓦）	70・71
Tab. 17 統計・史料にみる高知城跡西側の変遷	80
Tab. 18 瓦窯4陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比	90
Tab. 19 瓦窯4陶磁器の生産地別出土点数と組成比	91

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

高知城跡西堀地区は、国指定史跡高知城跡の西側及び南側に接している。また調査地の北側は、平成17年に旧营林局跡地の調査が行われた地点であり、高知城内堀の西岸の位置が確認されたことにより、平成19年7月に国指定史跡に追加されている。こうした経緯や立地環境から、該当地においても内堀の範囲を確認し、高知城西側部分の整備保存を進める必要性が高まっていた。また、対象地はもとの高知地方・家庭・簡易裁判所の敷地内であり、南側では平成13年に県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、近世の屋敷地に関連する遺構、遺物が多数検出されている。

高知地方・家庭・簡易裁判所が新庁舎に移った後は、当地点は空き地となっていたが、その後、検察庁の仮庁舎建設が予定されることとなった。工事は旧庁舎の基礎を利用し、遺跡への影響はない判断されたが、学術目的の確認調査を行うことが望ましいとの指摘が高知県教育委員会文化財課よりなされた。その後、財務省高知事務所、高知県教育委員会、高知市教育委員会が協議を行い、高知城の内堀の範囲と近世遺跡の広がりを確認するための学術調査を実施することに決定した。

これを受け高知市教育委員会が試掘確認調査を平成19年6月20日から7月4日にかけて実施した。調査にあたっては、管理者である財務省高知事務所の協力を得た。なお、対象地はこれまで「高知城伝下屋敷跡」としてきたものであるが、高知城内堀跡の確認を受けて、遺跡名称を「高知城跡」に修正した。



Fig.1 高知城跡西堀地区 2007年度調査調査区位置図

— 国指定史跡高知城跡 (S = 1/5,000)  
--- 高知城跡  
(※空堀・包廻塗の範囲は2009年3月現在のもの)

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野が広がり、市域の西部及び北部は東西に山地が連なる。河川は、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、国分川が南国市北部及び香美市西部域から西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは古くは内海であったが、その後鏡川などの堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

高知城跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返されてきた地域でもある。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江の口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

### 2. 歴史的環境

#### 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽鳥下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や砾石錐、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大簇式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するからと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区的長崎より、県下唯一の有柄式石劍と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、尾戸遺跡からも弥生前期の大型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀中葉の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡がある。この他にも、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡等がある。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地

するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城である。大高坂氏が暦応2年～3年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退<sup>(注1)</sup>した後は、天正16年（1588）に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年（1591）までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。天正16年『長宗我部地検帳』の「大高坂之村地検帳」には「弓場ヤシキ」「大テンヌノ下」「御土居」などの記載がみられ、城下町形成の様子が窺われる。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡では、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などが確認されている。高知城跡は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ビット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩閥連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級～中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡、能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応2年（1653）に開かれた藩の陶器窯で、文政5年（1822）に窯場が能茶山に移転する。文政3年（1820）には、城下の西方に位置する能茶山に能茶山磁器窯と陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年（1866）に土佐藩が創立した勧業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「貿易館」と改まり、明治4年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

### 築城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年（1603）には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年（1611）に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の『正保城絵図』<sup>(注2)</sup>、及び慶安5年（1652）の『慶安五年高知郭中絵図』<sup>(注3)</sup>によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』<sup>(注4)</sup>（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御米蔵」「御作事場」などの藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江の口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられ

た。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江の口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

#### 高知城西側の景観と変遷

高知城の西側内堀に接する一帯には、西大門から西に向かう「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる筋があり、これに面して侍屋敷が並んだ。寛文9年(1669)の『寛文己酉高知絵図』(Fig.2)には、堀南西角に藩閥連とみられる屋敷の絵が描かれており、そこから西大門に至る南北の筋には、堀の西岸に沿って「福岡内添」「桑山伊左衛門」らの侍屋敷がみえている。

しかしその後、元禄11年(1698)10月6日、北奉公人町から出火した火災が城下に広がり、北奉公人町、内堀、蒂屋町筋、大門筋、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷176軒、町屋1933軒、貸家2000軒余り、寺19、橋12箇所が焼失する被害<sup>(註5)</sup>となった。さらに火勢は城内にも及び、下屋敷、太鼓丸が焼失した。この大火の後、堀西側の侍屋敷は撤去され、前面の筋は広小路となった。<sup>(註6)</sup>

また、享保12年(1727)2月には、小高坂越前町から出火して城内に及び、追手門他の数棟を除いて城郭の大部分が焼失した。火災は尾戸から大川筋、愛宕町、一手は京町、種崎町、農人町、山田町、鉄砲町にも及び、被害は侍屋敷205軒、町屋1163戸、郷分397戸に達した。この享保の大火の後、延享4年(1747)9月27日には、城門の呼称が変更される<sup>(註7)</sup>とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」と改められた。

その後、嘉永年間(1848~1854)には、堀西側に南北九十六間、東西八間の馬場が設けられた。<sup>(註8)</sup>  
近代以降

明治4年(1871)の廃藩置県の後、高知城は明治6年(1873)に、本丸と追手門などを残して表御殿、奥御殿など殆どの建物が撤去され、高知県の管理のもと公園に指定された。その後、南側の内堀は北岸を埋めて幅を狭くされ、南西側では明治8年(1875)に旧裁判所が設置された。堀西側の敷地は旧營林局、裁判所などの国有地となった。

昭和16年に始まった太平洋戦争のなか、昭和20年7月4日の大空襲によって高知市の大部分は焼土と化した。この終戦の混乱の中で、昭和20年8月27日に高知市は建設局を設け、同時に建設委員会を設立して市街地の復興再建にあたった。昭和20年11月4日には連合軍が高知に到着し、後続部隊は朝倉と日章の日本軍旧兵舎に駐屯して西弘小路の電気局が軍政部に当たられたが、この時、瓦礫の山と化した市街地を清掃するについて、市街の瓦礫を高知公園の堀に廃棄し堀を埋め立てて公園や県庁への市民の往来を容易にすることが、軍政部から指示されたという。<sup>(註9)</sup>こうした経緯を経て、東側と西側の堀の埋め立てが行われた。

埋め立ての後、東側の蘿並神社沿いにあった堀跡は公園、西側の堀跡は裁判所と營林局などの国有地となった。西側の堀跡はその後一部が国指定史跡に加えられ、現在に至っている。

〔註〕

- 1)『壹簡集拾遺』
- 2)『正保城絵図』国立公文書館所蔵
- 3)『慶安五年高知郭中絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
- 4)『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
- 5)『南路志』巻七十「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」
- 6)『高知市沿革略史』『高知市沿革略史』は松野尾章行著、濱口真澄校の自筆本で、明治35年成稿。
- 7)『皆山集』
- 8)『高知市沿革略史』
- 9)『高知市戦災復興史』高知市 1969年

〔参考文献〕

- 平尾道雄「第二編 近世」「高知市史 上巻」高知市 1958年
- 『高知県の地名』平凡社 1983年
- 『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店 1986年
- 『高知城下町読み本 - 改訂版 - 』土佐史談会・高知市教育委員会 2004年
- 『特別展 - 絵図の世界』安芸市歴史民俗資料館 1998年
- 『史跡高知城跡1 - 高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年
- 『高知城跡 - 伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知城三ノ丸跡 - 石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- 『高知城伝下屋敷跡 - 高知地家簡裁序合敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 『史跡高知城跡 - 本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 『史跡高知城跡 - 九ノ内縁地試掘確認調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年
- 『尾戸窓跡』高知市教育委員会 2007年
- 『開成館』高知市教育委員会 2007年
- 『金子櫻遺跡』高知市教育委員会 2008年



Fig.2 寛文己酉高知絵図(抜粋)(高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)

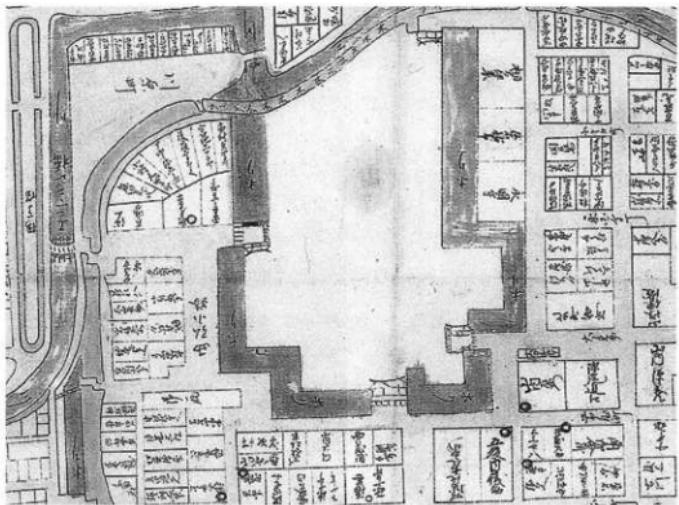


Fig.3 享和元年高知御家中等龜図 (抜粋) (安芸市立歴史民俗資料館所蔵。『特別展－絵図の世界』より転載。)

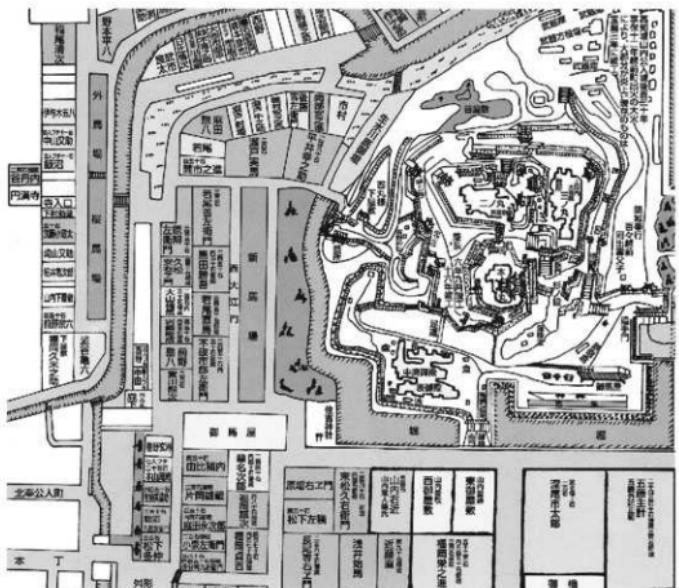
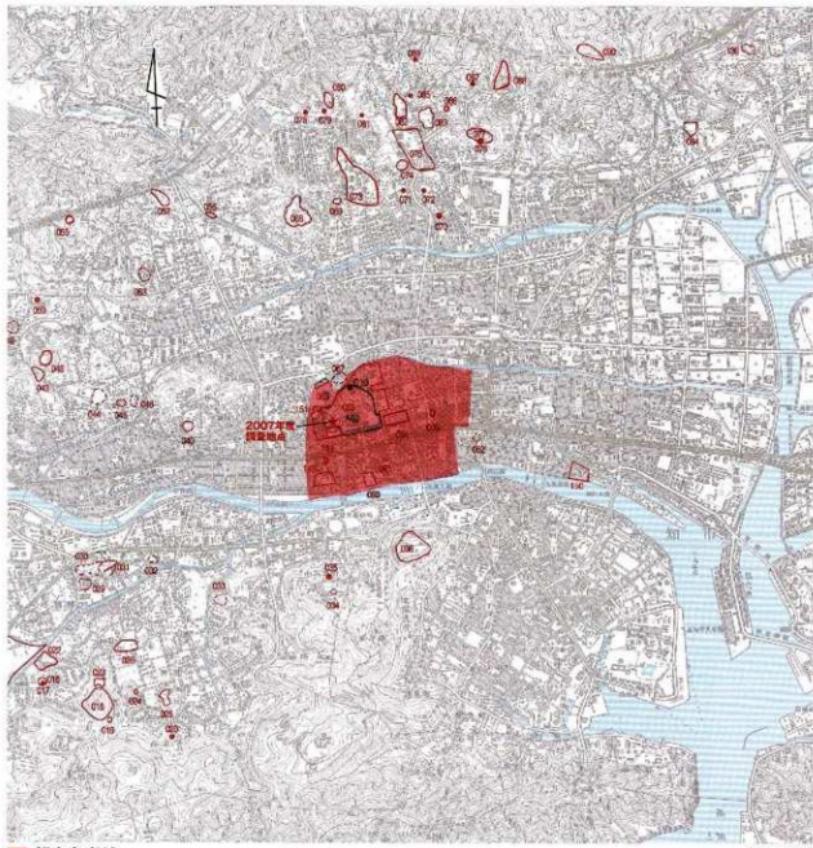


Fig.4 高知郭中図 (幕末の高知郭中図をもとに活字化。『高知城下町読み本』より転載。)



### ■ 郡中参考地

(S-1/40,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
003	高知城跡	近世	046	福井元原城跡	中世	075	栗原寺南門跡	古代
016	分割山道跡	弥生	048	からと一と口遺跡	弥生	076	土居の市古墳	古墳
017	分割山古墳	古墳	049	福井別城跡	中世	077	前川城跡	中世
018	神田南城跡	中世	050	福井古墳	古墳	078	宇治野2号墳	古墳
019	ケジカ塙遺跡	弥生	053	豊武深谷城跡	中世	079	下原野1号墳	古墳
020	高須古墳	古墳	055	福井古墳跡	古墳～中世	080	宇治野遺跡	縄文
022	豊泊船付近遺跡	弥生～中世	056	初月遺跡	弥生	081	秦長寺新屋敷古墳	古墳
023	シリタニ遺跡	弥生・古代	057	万々城跡	中世	082	青葉遺跡	古代
024	高神遺跡	古墳・古代	060	南御前城跡	近世	083	松原谷遺跡	古代～中世
025	神田道跡	弥生～中世	061	中島町遺跡	古墳	084	朝野遺跡	古代
026	神田ムク八道遺跡	弥生～中世	062	御所城跡	中世	085	日の岡古墳	古墳
029	墨屋遺跡	弥生	063	大高坂城跡	中世	086	北条系寺遺跡	弥生
030	甲斐前城跡	中世	064	弘人船城跡	近世	087	南行古墳	古墳
031	能米城跡	近世	065	御所町遺跡	古墳	088	栗原寺城跡	中世
032	久寿野城跡	中世	066	甲斐城跡	弥生	089	秦長寺・井田神社裏古墳	古墳
033	久寿崎・久造跡	弥生～中世	067	尾山城跡	古墳	090	伊勢守跡	小田
034	小人木町道跡	弥生	068	安楽寺山城跡	中世	136	一宮城跡	小田
035	小行・木山古墳	古墳	069	東久方池田遺跡	古代～中世	146	高知城伝下層敷跡	古墳～近世
036	鴨江城跡	中世	070	安室不動院前古墳	古墳	149	今ノ橋遺跡	近世
040	井口城跡	中世	071	藤小学校校庭古墳	古墳	150	間切城跡	近世～近代
043	草加学園遺跡	弥生～古代	072	愛宕若社古墳	古墳	151	西到小路遺跡	近世
044	堀井西城跡	中世	073	西条桑寺遺跡	古墳	A 02	国指定史跡高知城跡	近世
045	堀井中城跡	中世	074	秦長寺別城跡	中世			

※No.は高知市道跡地図による

Fig.5 高知城跡及び周辺の遺跡

### 第Ⅲ章 調査の方法

調査においては、高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査対象地の東部側に5箇所の試掘坑TP1～5を設定した。また、西部側にTP6～9を設定し、内堀外側に広がる近世遺跡の有無を確認した。ただし、今次調査区においては、後に行われる高知地方検察庁仮庁舎の建設工事で、高知地方裁判所旧庁舎の建物基礎を引き継ぎ活用することが予定されていたため、基礎が残存する南側部分への試掘坑の設定を避け、調査を断念している。

試掘坑の掘削にあたっては、重機を用いて表土と搅乱層を除去し、近世の遺物包含層面に達した後は、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図、平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内の3点(T-1・T-2・T-3)について座標を測定した。

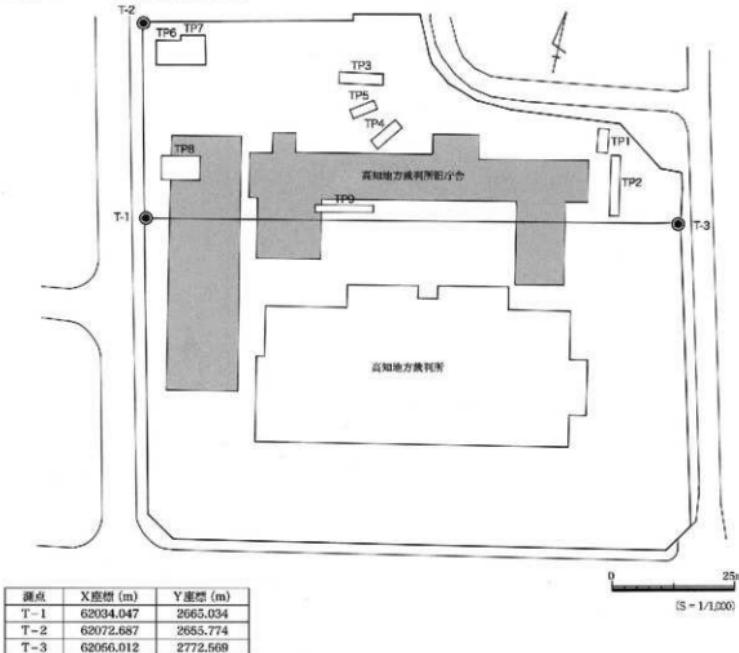


Fig.6 調査区位置図及び試掘坑配置図

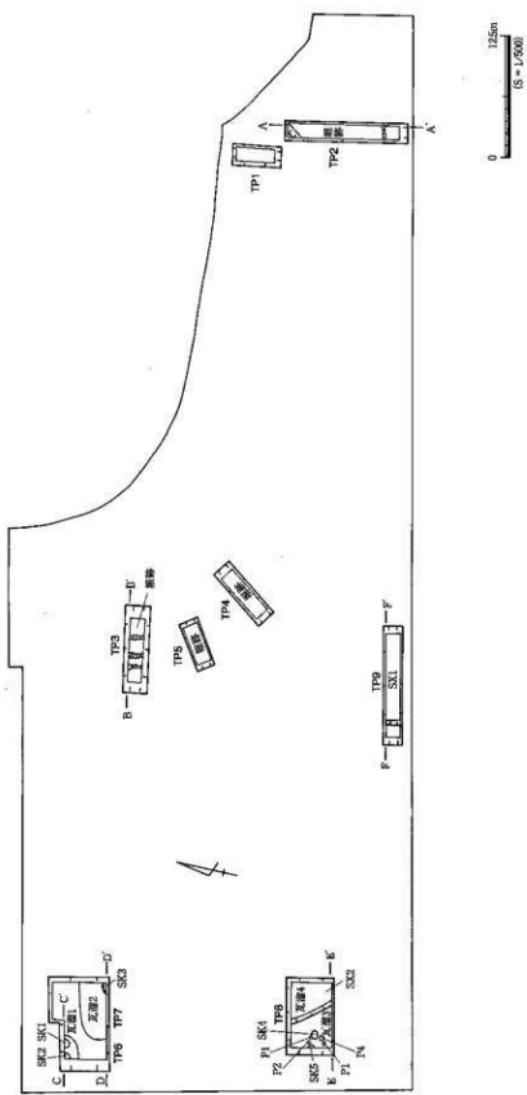


Fig.7 検出構全体図

## 第IV章 調査の成果

今回の調査では、調査対象地内に設定した9箇所の試掘坑のうち、東部側の試掘坑(TP1～5)で高知城の内堀跡を確認した。また、西部と南部に設けたTP6～9では、近世の土坑6基、ピット3基、性格不明遺構2基、瓦溜まり等の近世の遺構と遺物を検出している。

以下、各試掘坑毎に堆積状況、検出遺構と遺物の内容を述べる。

### 1. TP1

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区北東部に設定した試掘坑である。TP2～5で確認された瓦礫層(昭和20年代初めの堀埋め戻し埋土)は検出されておらず、当時には、該当地点は堀外にあったことが推察される。

#### (1) 層序 (Fig.9)

現代の整地層であるⅠ層：円礫を多く含む暗褐色シルト層(標高2.7～2.9m)の下面に、Ⅰ'層：角礫を多く含む褐色シルト層が堆積している。Ⅰ'層からの出土遺物は確認できておらず、年代は不明である。

### 2. TP2

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区東部に設定した試掘坑である。幅2mのトレーナーを南北12mにわたって掘削し、試掘坑のほぼ全面で堀跡の埋土を検出した。南岸の検出を試みたが、岸は調査区外に出るとみられ、壁の立ち上がりは検出できていない。しかし、試掘坑の南端部では、堀の南岸付近に設置されたとみられる近・現代の石垣の一部を確認した。また、試掘坑の北端部ではTP1で検出したⅠ層と堀埋土の境界を確認しており、昭和20年代初め頃の堀北岸が該当地点付近にあったことが推察される。

#### (1) 層序 (Fig.8)

現代の整地層であるⅠ層：円礫を多く含む暗褐色シルト層(標高2.7～2.9m)の下面に、昭和20年代初めの堀埋め戻しの埋土が堆積している。試掘坑の北西隅では、Ⅰ層の下面にⅠ'層：角礫を多く含む褐色シルト層が堆積し、堀の埋土1層がこれを切っている。

#### (2) 遺構と遺物

##### 堀跡 (Fig.8)

試掘坑のほぼ全面で堀跡の埋土を検出した。近世の堀北岸と南岸は未検出であるが、試掘坑の北西隅では、堀埋土の瓦礫層(堀-1層)がⅠ'層の堆積を切っている状況が検出できた。両者の境界は南西から北東方向に向かって延びており(Fig.7)、堀が埋め戻される昭和20年代初め頃の北岸付近の形状を示していると考えられる。堀跡の深さは、掘削を表土下1.7mで止めたため、未確認である。

埋土は1層：暗赤褐色シルト層、2層：黒褐色粗砂層である。このうち1層は焼土と被熱し変色した瓦片や煉瓦他の現代の遺物を多量に含んでおり、終戦直後に堀を埋め戻した際の埋土にあたる。

2層からは近代の遺物が出土するが、被熱した瓦礫類は含まれない。それ以下の堆積状況については未確認である。

堀跡の南岸付近では、北を前面とする東西方向の石垣と、その背後にあるテラス状の高まりを検出した。石垣に使用された石は石灰岩からなり、径30cm前後で、粗い面取りが施されている。上下2段を確認するがそれ以下については未確認である。石垣の背面（南側）には近代の遺物を含む2層：黒褐色粗砂層がテラス状の高まりを形成しており、石垣も近代以降の改修によるものであった可能性が高い。石垣の前面（北側）には1層が堆積し、被熱した瓦礫類が多量に出土していることから、昭和20年代初め頃まで堀南岸がこうした形状を保っていたことが分かる。

### 3. TP3

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区中央部に設定した試掘坑である。幅2mのトレンチを東西9mにわたって掘削し、堀跡の埋土と西岸を確認した。また西岸付近では、近・現代の石垣とテラス状の高まりを検出した。西岸と石垣は南北方向に延びており、平成17年度に北側の旧営林局跡地（高知城跡西櫓地区平成17年度試掘確認調査）で検出された堀跡西岸とも、位置関係が対応する。

#### (1) 層序 (Fig.9)

現代の整地層であるI層：円礫を多く含む暗褐色シルト層（標高2.1m～3.2m）、その下面のII層：灰黄褐色シルト層（標高2.1m以下）を検出した。堀跡はII層を切り込んでおり、II層の東側で石垣と堀の埋土を検出した。I層は、堀の埋土とII層の上面を覆うように堆積している。

#### (2) 遺構と遺物

##### 堀跡 (Fig.9)

試掘坑の西部で堀跡の西岸、それ以東で堀上層の埋土を検出した。

埋土は1層：暗赤褐色シルト層、2層：黒色シルト層を確認した。1層は焼土と被熱し変色した瓦片や煉瓦等の現代の遺物を多量に含んでおり、TP2検出の堀-1層と同様に、昭和20年代初めの堀埋め戻しに伴う埋土にあたる。2層からは近代の遺物が出土するが、被熱した瓦礫類は含まれない。遺構掘

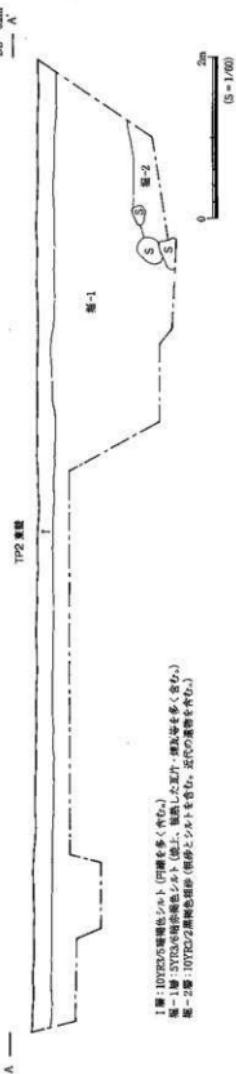


Fig.8 TP2セクション図

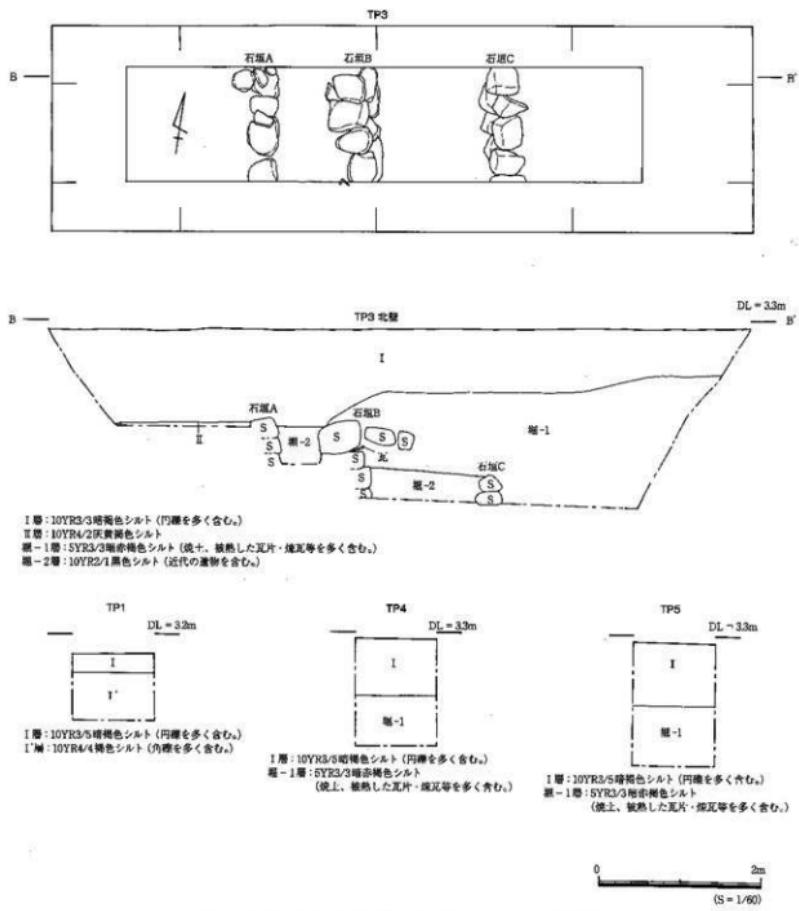


Fig.9 TP3平面図・セクション図、TP1・4・5柱状図

前を現表土下2.1mまでで止めたため、以下の堆積状況については未確認である。

堀の岸はⅡ層を掘り込んで作り出されており、Ⅱ層の東側前面とその前方の2箇所では石垣が検出されている。3箇所の石垣(Fig.9 - ABC)は何れも南北方向で、ほぼ並行して設けられている。岸(Fig.9 - Ⅱ層)の前面に設けられた石垣Aは径30~50cm前後のチャートと石灰岩からなり、東側を前面とする。石垣Bは、Aの前面から1.2m東側に前面を揃えて設けられており、石材は径30~50cm前後のチャートと石灰岩である。石垣Bの背面には、近代の遺物を含む2層：黒色シルト層があり、Ⅱ層と石垣Aに高さがほぼ揃っている。石垣Cは、Bの前面から1.8m東側に前面を揃えて設けられている。石材は径30~40cm前後の石灰岩で、礫の形態、大きさとも不揃いである。石垣Cの背面には、近代の遺物を含む2層があり、背後の石垣より60cm程低い面にテラス状の段が設けられている。

石垣Cの東側前面と2層の上面には、被熱した瓦礫等の遺物を含む1層が堆積していることから、石垣B・C及びテラス状の段部は、昭和20年代初め頃までの堀西岸の形状を示していると考えられる。また、石垣B・Cの背面にある2層からは近代の遺物が出土しており、石垣B・C及び段部が近代以降の改修によるものであったことが分かる。なお、石垣Aについては、石垣間や背後の堆積層からの出土遺物が確認できず年代の特定ができないが、礫の規模や形状等は石垣Bに類似しており、これについても近代以降のものであった可能性がある。

#### 4. TP4・5

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区中央部に設定した試掘坑である。ともに、整地層Ⅰ層の下面で、堀跡の埋土(1層：暗赤褐色シルト層)を検出し、堀の範囲内にあたることが確認できた。(Fig.9) 西岸の推定位置部分については、旧地方裁判所庁舎基礎が残存しており、確認できていない。

#### 5. TP6・7

調査区の北西部に設けた試掘坑である。該当地点は高知城内堀の範囲から西側にあたっているため、堀外側での近世遺跡の広がりを確認する目的で、5×5mの試掘坑TP6を設定した。TP6では瓦溜まりが広がりをみせたため、さらに東側にTP7を設け調査範囲を拡張した。北西側で近世の土坑SK1・2と近世の瓦溜1、南部側で近世の土坑SK1と近代の瓦溜2を確認した。

##### (1) 層序 (Fig.10)

近・現代の整地層であるⅠ層：黒褐色礫層(標高1.9m~2.9m)の下面に、近世の遺物包含層であるⅡ層：暗褐色粘質シルト層(標高1.7m~1.9m)が堆積する。その下面にはⅢ層：ぶい黄褐色シルト層(標高1.7m以下)があり、ここより土師質土器片が出土している。

近代の瓦溜2はⅠ層の最下位で検出され、近世の瓦溜1とSK1・2・3はⅡ層を切っている。

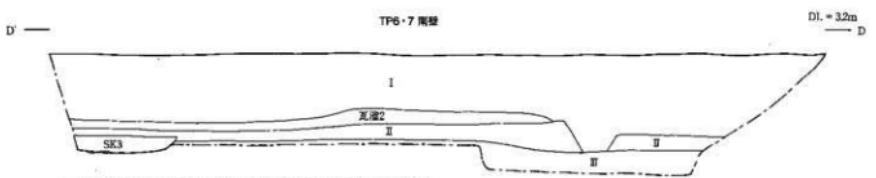
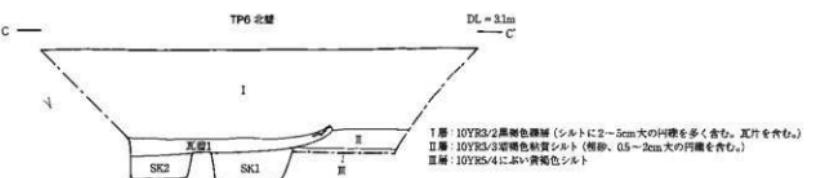
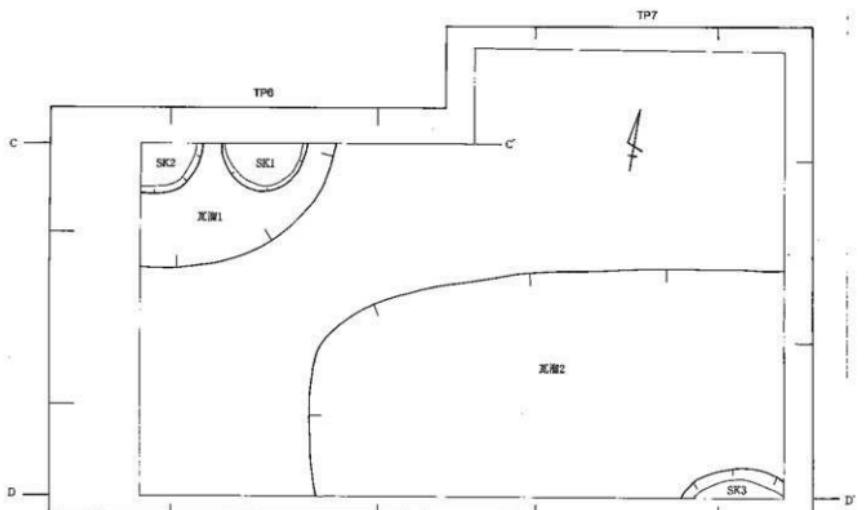


Fig.10 TP6-7平面図・セクション図

0 2m  
(S - 1/60)

## (2) 遺構と遺物

### ① 土坑

#### SK1 (Fig.11)

TP6の北西端で検出された円形土坑で、上面を瓦溜1によって切られている。西側には同様の円形土坑SK2が20cmの間隔を空けて並んでおり、2基が組で機能した可能性がある。

北側の半分が試掘坑の外側に出るが、平面形態は円形とみられ、規模は径100cm、深さ40cmを測る。床面は平坦で、壁がほぼ直立して立ち上がる。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、炭化物を多く含んでいる。床面からは径20cm前後の砂岩角礫が出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・皿、白磁水滴・蓋物蓋、器種不明の青磁体部片、陶器中碗・擂鉢・蓋・小瓶、土器小皿・鉄釘、漆器碗である。

図示したものは、1～6である。

1～3は磁器。1・3は肥前産の染付皿である。1は口縁部輪花形で、外面に梅文、内面に花文を描く。3は内面に草花文を描くものである。2は肥前産の白磁水滴である。鳥を形取ったものとみられ、上部に穿孔をもつ。型押し成形貼り合わせによるもので、内面にユビオサエとユビナデ痕が残る。

4～6は陶器。6は備前焼の擂鉢である。4は鉄軸の蓋で、宝珠形の摘みをもつ。5は小瓶で、外底に回転糸切り痕が残る。鉄軸は黒褐色に発色する。

SK2との関係性からみて、SK1は18世紀末から19世紀に比定される。

#### SK2 (Fig.11)

TP6の北西端で検出された土坑で、円形土坑SK1に隣接する。

検出規模は東西確認長70cm、南北確認長60cm、深さ30cmで、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。SK2は深さ、埋土、形態等がSK1に共通しており、位置関係も隣接することなどからみて、両土坑が組になり同時期に機能した可能性がある。

出土遺物は肥前系の染付広東形中碗1点、土師質土器小皿1点である。

SK2は18世紀末から19世紀に比定される。

#### SK3 (Fig.11)

TP7の南東端で検出された土坑である。

南側と東側部分が試掘坑の外に出るために、全体の規模、形態は不明であるが、東西検出長124cm、深さ20cmを確認している。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

### ② 瓦溜まり

#### 瓦溜1 (Fig.10・12～14)

TP6の北部で検出された瓦溜まりである。

出土遺物は磁器染付中碗・皿・鉢・蓋物蓋・小瓶・水滴、白磁皿、青花皿、陶器中碗・鍋・土瓶蓋・壺・火鉢、土師質土器杯・中皿・鉄釘、硯である。

図示したものは、7～33である。

7～19は磁器。7～10は染付中碗である。9は肥前系の広東形碗。7は能茶山窯の端反形碗で、外

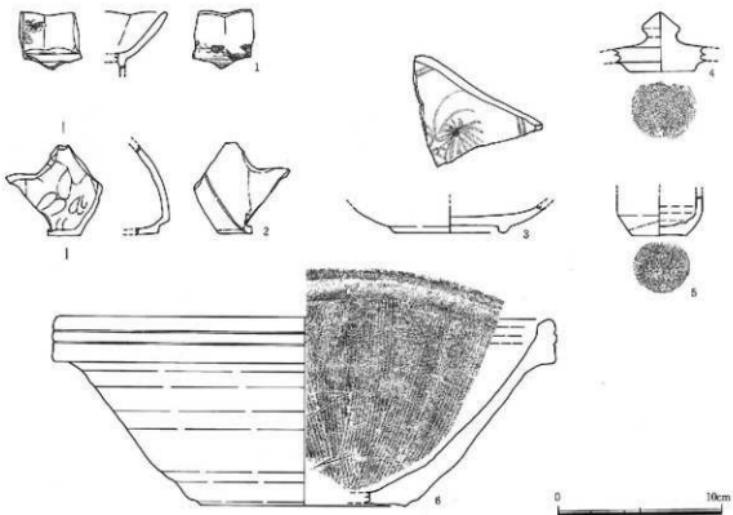
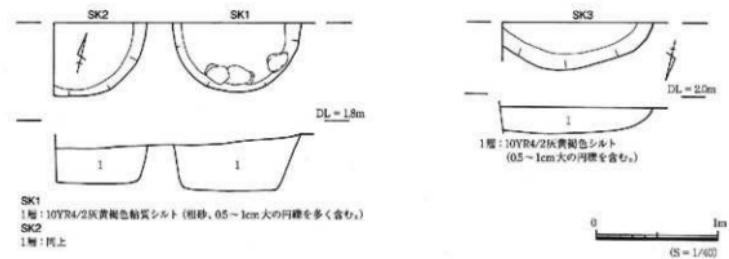


Fig.11 SK1~3平面図・セクション図、SK1出土遺物実測図

面に草花文を描く。8は関西系の端反形碗で外面に宝文、口縁部内面に雲を描く。10は肥前産の青磁染付碗、13は青磁染付碗の蓋である。17は肥前系の蓋物の身。14~16は蓋物の蓋である。19は肥前系の火入れで、山水文を描く。11は肥前系の白磁小杯である。12は景德鎮窯系の青花皿で、17世紀前葉～中葉。口縁端部の釉が部分的に剥がれる。18は肥前産の水滴か。

20~24は陶器。20は肥前産の灰釉丸碗である。21・22は鍋である。21はオリーブ黄色を帯びる透明の釉を施釉している。22は把手に陽刻による唐草文を施すもので、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。23は土瓶蓋で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。24は瀬戸・美濃産の火鉢で、外面に灰釉を施釉し、部分的に青緑色の釉を流し掛けする。

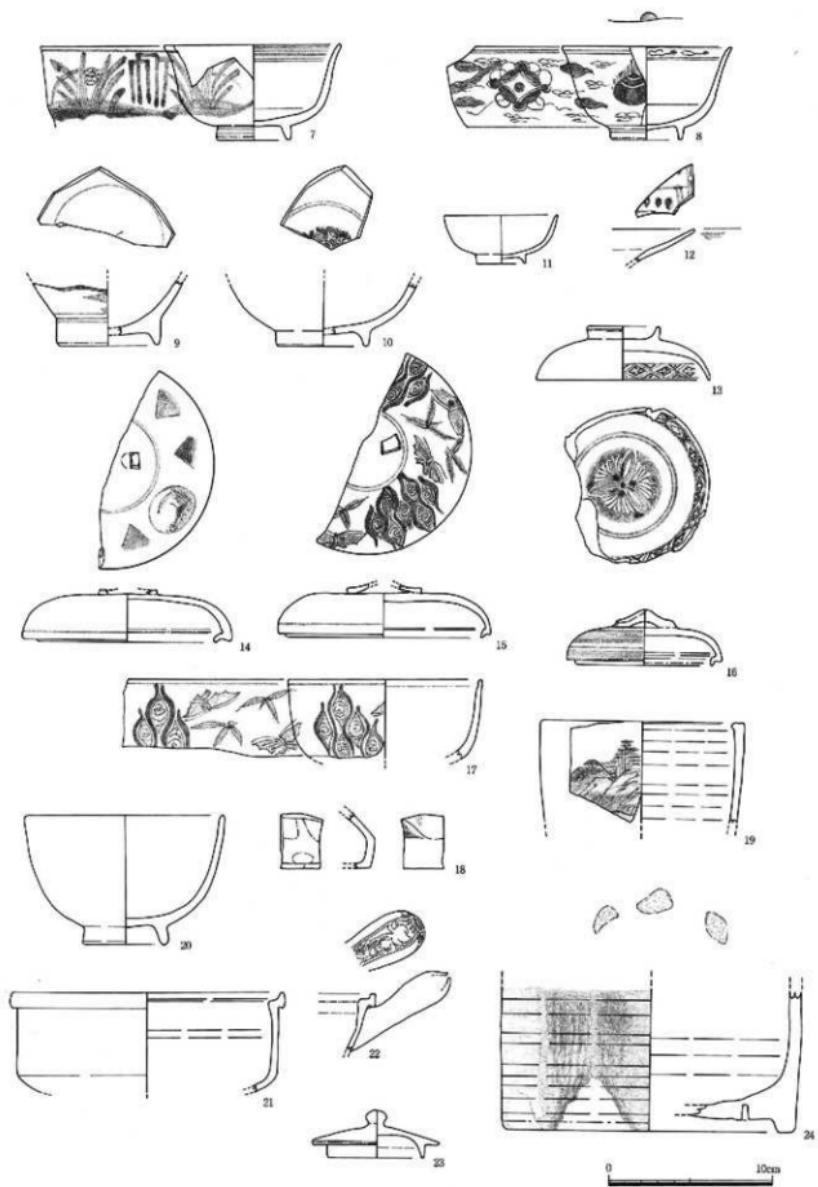


Fig.12 瓦溜1出土遺物実測図(1)

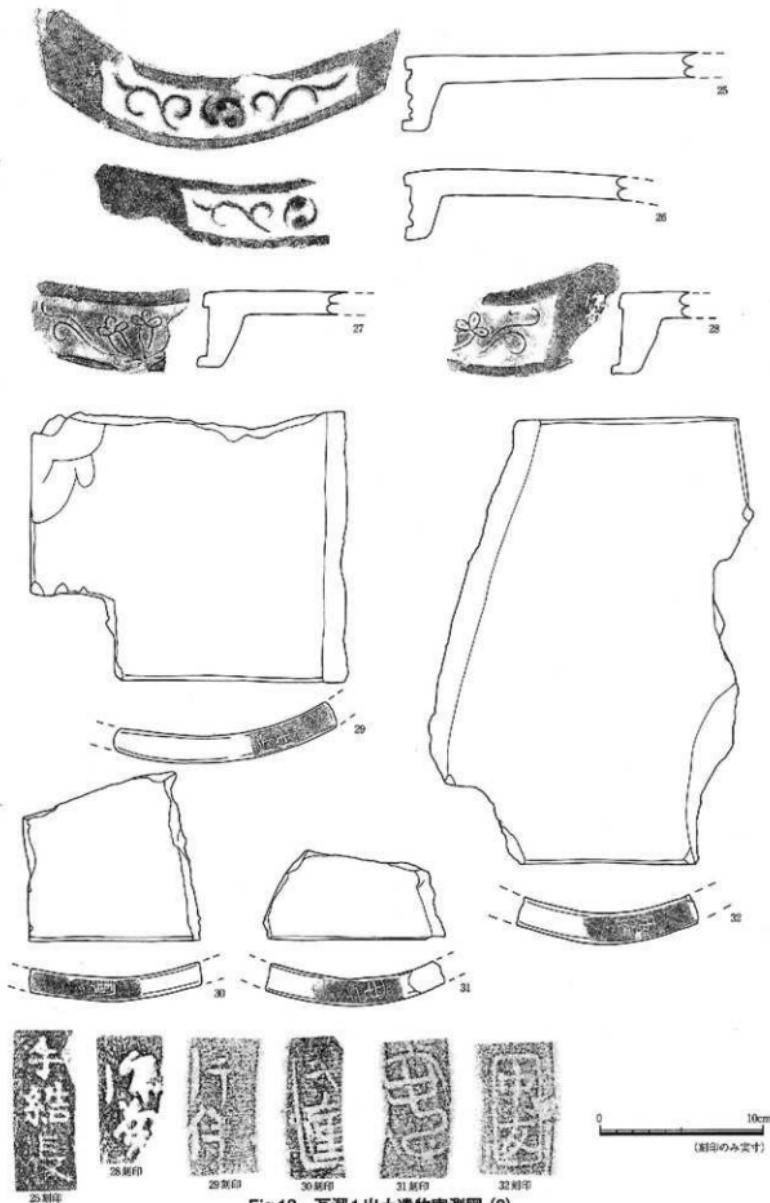


Fig.13 瓦窯1出土遺物実測図(2)

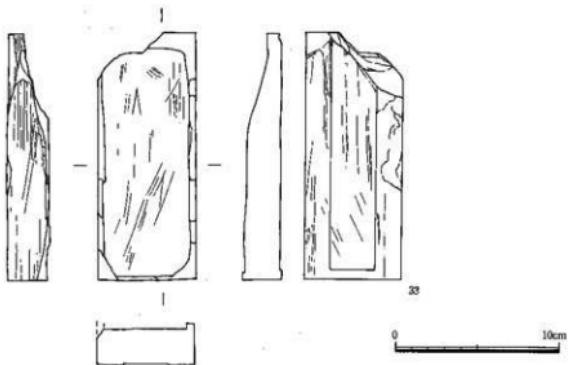


Fig.14 瓦窯1出土遺物実測図(3)

25～28は軒平瓦、29～32は平瓦である。25は中心飾りに三ツ巴文、両側に均整唐草文を配する。瓦当に「手結長」銘印をもち手結窯（高知県香南市夜須町手結）と推定される。27・28は、中心飾りは丁子か。28は瓦當に「片□」銘印をもち片地産（高知県香美市土佐山田町片地）と推定される。29も「片□」の銘印をもつものである。30は角枠内「□キ重」の銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。31は小判形の枠内に「中己」の銘印をもつ。32は角枠内「中友」の銘印をもつ。

33は硯である。粘板岩製で、砥石に転用されている。

図示したものの他、尾戸窯の灰釉中碗、関西系の鉄釉壺、銅線釉を施した陶器土瓶、尾戸窯の白色系土器杯等が出土している。

瓦窯1は19世紀中葉～幕末に比定される。

#### 瓦窯2 (Fig.10・15～17)

TP6からTP7にかけて検出された近代の瓦窯まりである。

東西確認長5.9m、南北確認長2.8mの範囲に、多量の瓦片が12～18cmの厚みをもって廃棄されている。瓦の間からは肥前系の染付端反形中碗、瀬戸・美濃産の染付磁器碗、染付水滴、瀬戸・美濃産の火鉢等の19世紀～幕末の遺物と、酸化コバルトによる染付磁器、青土瓶他の近代の遺物が出土している。

図示したものは、34～53である。

34は肥前系の平形中碗で、外面に青磁釉を施釉し、内面に呉須で松葉を描く。高台内に銘をもつ。35は染付小碗で、外面に松・梅・亀と波を描く。36は染付の壺又は火入れである。外面に型紙刷りによる蓮弁文と手描きによる草文が施されている。肥前系で、近代の製品か。

38は能茶山窯の擂鉢で、外面と口縁部内面に鉄釉を施釉する。近代の製品とみられる。37は水注類で、注口の上面に長方形の切り込みをもつ。39は瓦質土器の火鉢で、外底に円形の三足を貼付する。

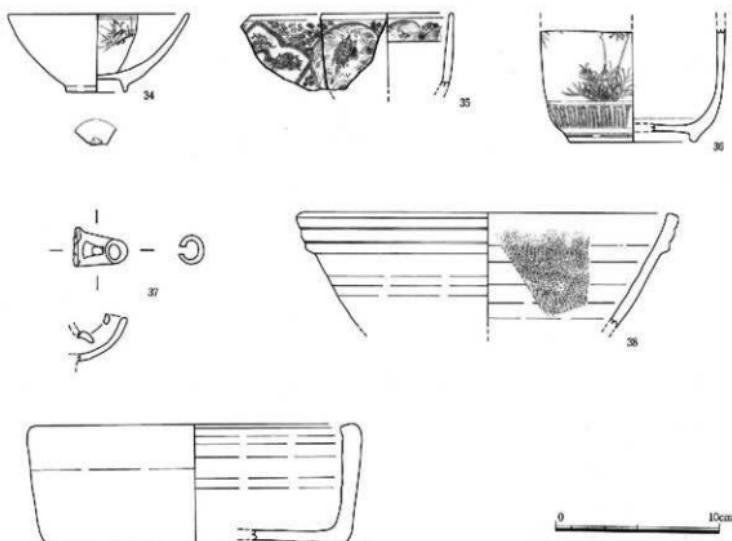


Fig.15 瓦溜2出土遺物実測図 (1)

40～45は軒平瓦、46～53は平瓦である。40・45～51は「布直」銘印をもつもので、布師田産（高知県高知市布師田）と推定される。52・53は「片治」銘印をもち、片地産（高知県香美市土佐山田町片地）と推定される。

## 6. TP8

調査区の南西部に設けられた試掘坑である。該当地点は、高知城内堀の範囲から西側にあたっている。そのため、堀外側での近世遺跡の広がりを確認する目的で、5×8mの試掘坑を設定した。

### (1) 層序 (Fig.18)

近・現代の整地層であるⅠ層と搅乱層の下面で、近世の遺物包含層にあたるⅡ層：暗褐色粘質シルト層（標高1.7m～1.8m）を検出した。その下面では、Ⅲ層：にぶい黄褐色シルト層（標高1.7m以下）が水平に堆積している。

江戸後期の瓦溜まりである瓦溜3・4はⅡ層の上位に広がっており、瓦溜3・4の直上までⅠ層と搅乱が及んでいる。近世の土坑SK4～6、ピットP1～3、落ち込み状の遺構SX2はⅢ層の上面で検出した。

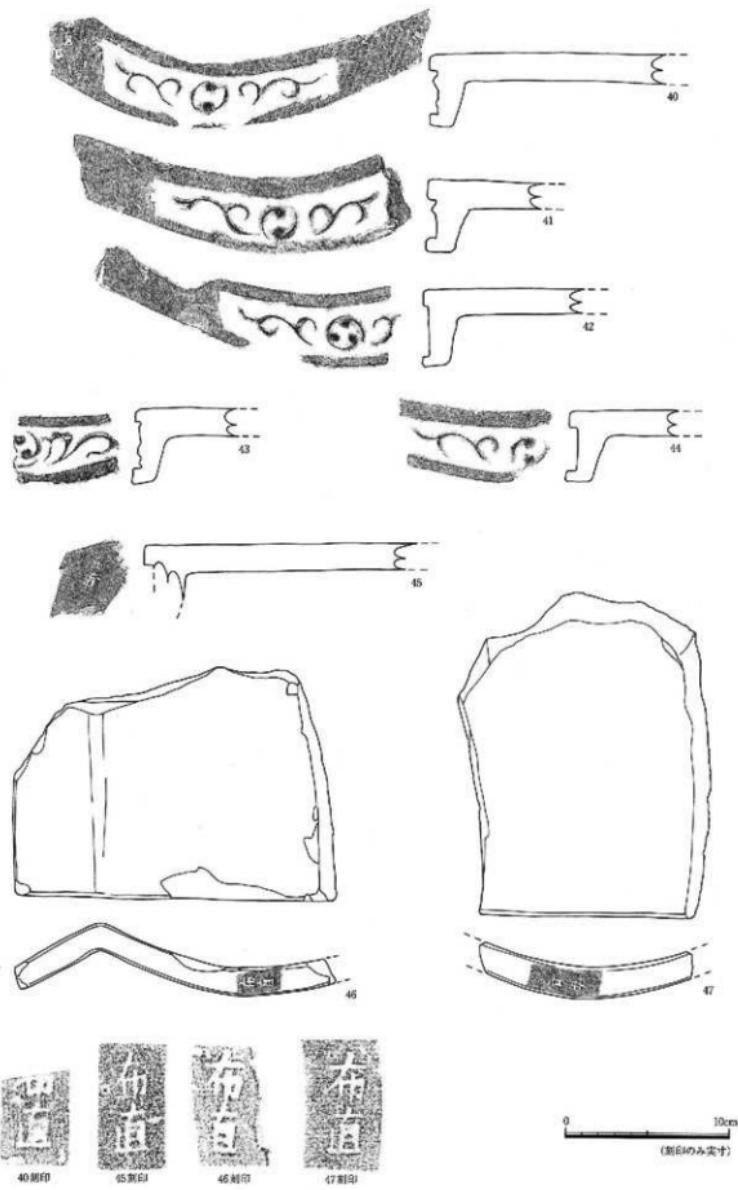


Fig.16 瓦溜2出土遺物実測図(2)

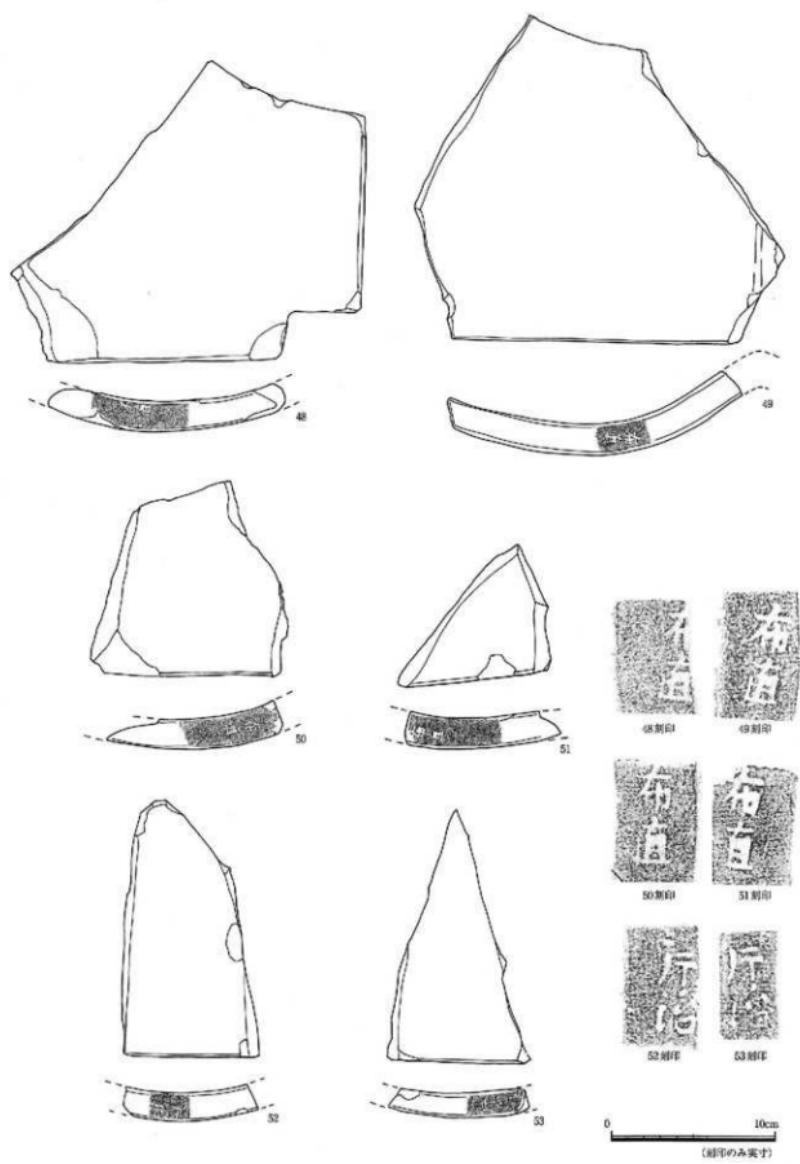


Fig.17 瓦窯2出土遺物実測図 (3)

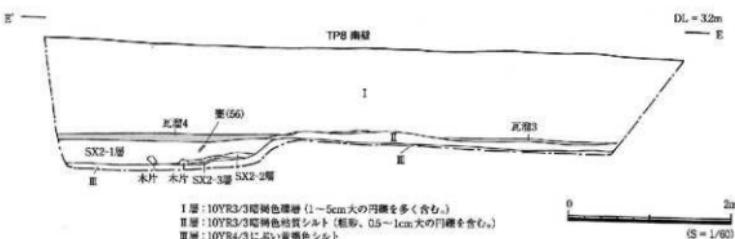
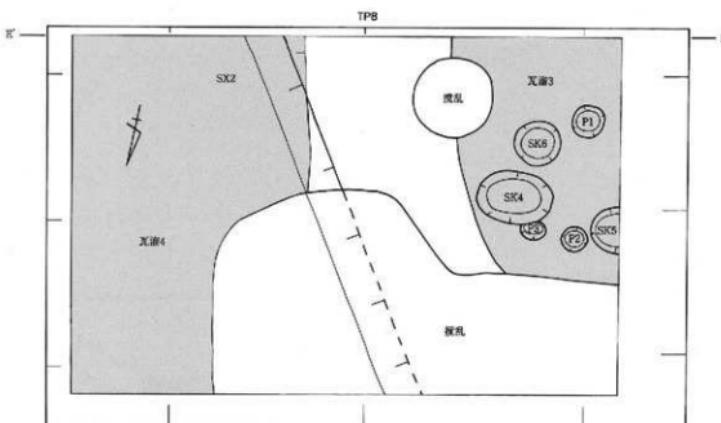


Fig.18 TP8 平面図・セクション図

## (2) 遺構と遺物

### ① 土坑

#### SK4 (Fig.18・19)

TP8の西部で検出された土坑である。平面形は橢円形を呈し、検出規模は長軸94cm、短軸70cm、深さ8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は褐釉の陶器壺又は甕の体部片1点と土師質土器小皿である。

#### SK5 (Fig.18・19)

TP8の西部で検出された土坑である。西側が試掘坑外に出るため全体の規模と形態は不明であるが、南北長56cm、東西検出長36cm、深さ10cmを確認している。壁は緩やかに立ち上がり、床面

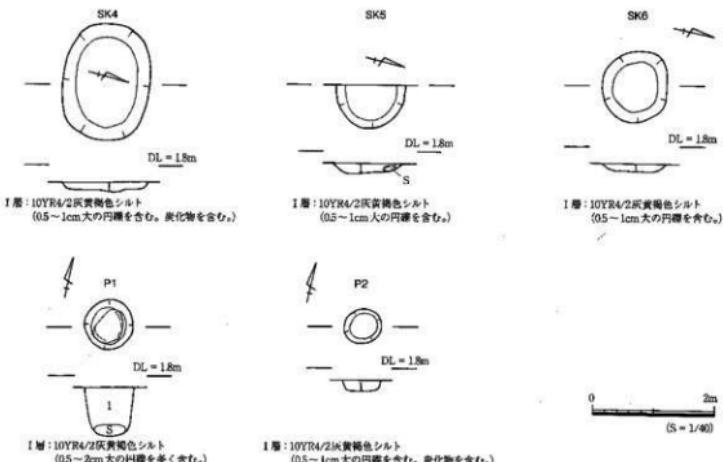


Fig.19 SK3~6・P1・2平面図・セクション図

はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿1点である。

#### SK6 (Fig.18・19・20)

TP8の西部で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸60cm、短軸52cm、深さ6cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は鉄釘1点(57)である。

2ピット

#### P1 (Fig.18・19)

TP8の西部で検出された。検出規模は径40cm、深さ38cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から扁平な砂岩円礫が出土している。

遺物は上層から瀬戸・美濃産の太白手広東形碗と染付碗、肥前系の染付碗、陶器の灰釉碗、鉄軸壺が、下層から備前焼擂鉢が出土している。P1は19世紀に比定される。

#### P2 (Fig.18・19)

TP8の西部で検出された。検出規模は径30cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は土師質土器小皿、鉄釘である。

#### P3 (Fig.18)

TP8の西部で検出されたピットである。SK4と切り合が前後関係は不明である。検出規模は径30cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は土師質土器小皿である。

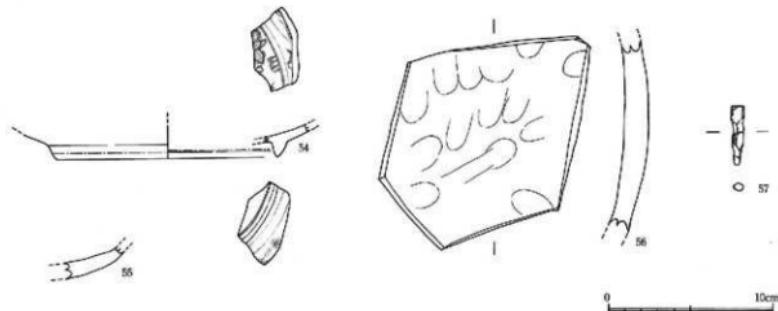


Fig.20 SK6・SX2出土遺物実測図 (SK6:57, SX2:54～56)

### ③性格不明遺構

#### SX2 (Fig.18・20)

TP8の東部で検出された落ち込み状の遺構である。西壁以外の三方が試掘坑外に出ているため全体の規模や形態は不明であるが、東西2.6m、南北4.4mを確認している。北側部分については上面が現代の搅乱によって削平されるが、床面付近の埋土の一部が残存しており、西壁が南東から北西に向かって延びることが分かる。切り合い関係では、19世紀の瓦溜4に上面を切られている。

深さは30cmを測り、壁は斜め上方に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。埋土は1層：粗砂と円礫を含むにぶい黄褐色粘質シルト、2層：褐灰色粘土、3層：腐蝕土で、最下層にあたる3層には木片と植物遺体が多く含まれている。こうした堆積状況等からみて、SX2は床面に水が溜まっていた池状の遺構や落ち込み状の遺構であった可能性が考えられる。

出土遺物は、景德鎮窯の色絵皿、志野焼、備前焼窯で、何れも1層からの出土である。

図示したものは、54～56である。54は景德鎮窯の古赤絵皿で、16世紀前半の製品である。内面に赤、緑の花唐草文を描き、外面にも文様の一部が見える。55は志野焼の体部片で、16世紀末から17世紀初頭のもの。56は備前焼窯の体部片である。

#### ④瓦溜まり

#### 瓦溜3 (Fig.18・21～28)

TP8の西部で検出された瓦溜まりである。西側が試掘坑外に出るため全体の規模は不明であるが、東西2m、南北3mまでの範囲を確認している。多量の瓦片が10cm前後の厚みをもって堆積しており、瓦片とともに炭化物、近世の陶磁器、土器等が出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・大碗・小碗・小杯・小皿・五寸皿・鉢・盃台・中瓶・青磁染付中碗・色絵染付蓋物蓋、陶器中碗・小碗・小皿・擂鉢・鍋・土瓶・土瓶蓋・蓋物蓋・壺・火鉢・火入れ・灯明受皿・鳥の水入れ・施釉土器のミニチュア、土師質土器杯・中皿・焰塔・焜炉・燒塗壺・瓦質土器焜炉・鉄釘・硯・瓦である。

図示したものは、58～128である。

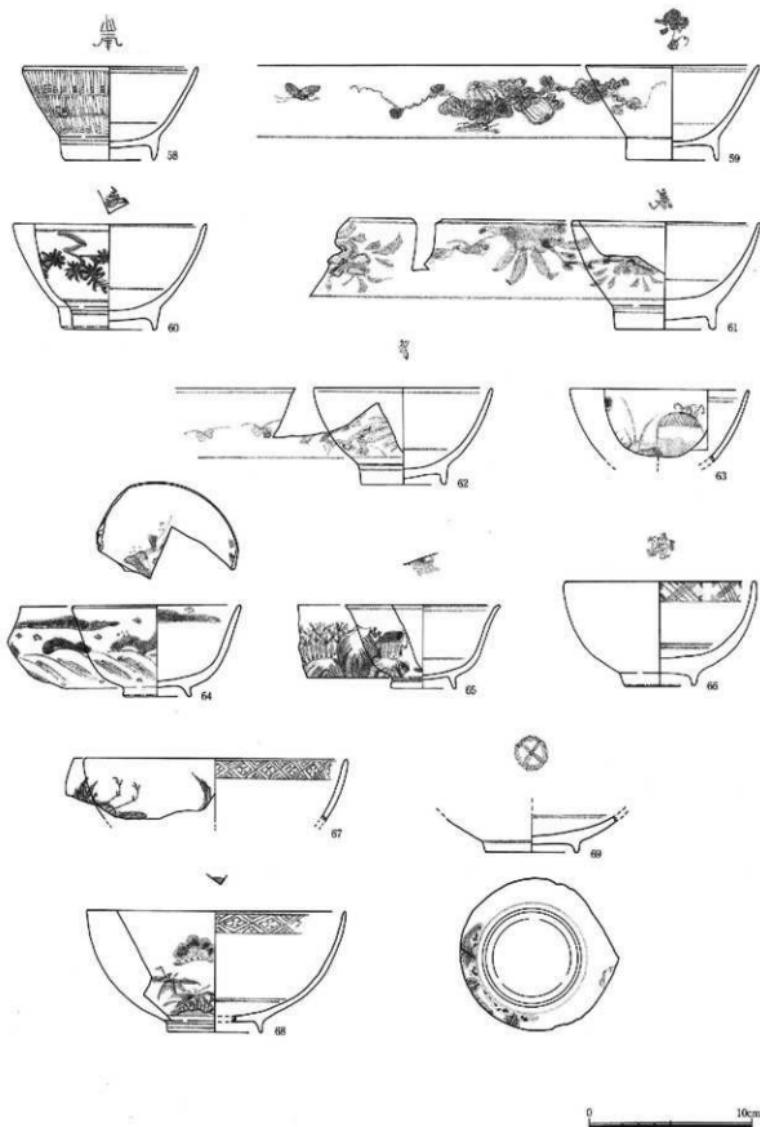


Fig.21 瓦窯3出土遺物実測図(1)

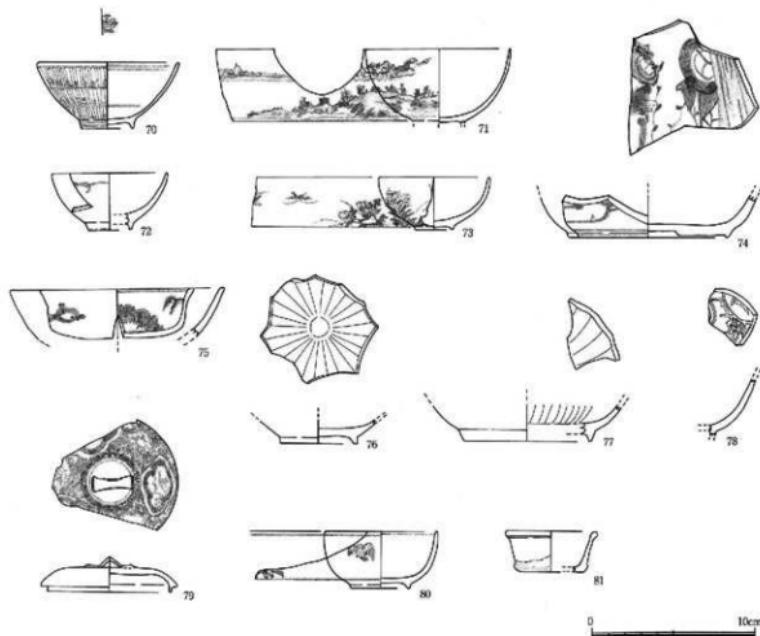


Fig.22 瓦窯3出土遺物実測図(2)

58～81は磁器。75は瀬戸・美濃産、その他は肥前産または肥前系である。

58～65は染付中碗である。58～63は広東形碗で、58は唇手、59は野菜文を描く。64は端反形碗で、外面と口縁部内面に波と千鳥、見込みに岩と波を描く。65は端反形碗で山水文を描くものか。66は青磁染付の丸形碗で、口縁部内面に四方櫛、見込みに手描きによる五弁花、高台内に渦福を描く。67・68は肥前産の染付大碗。67は外面に鶴、口縁部内面に四方櫛を描くもの、68は外面に松・竹、口縁部内面に四方櫛を描くものである。69は碗の底部で、外面に若松文を描くものである。70・71は染付小碗。70は広東形碗で唇手を描く。71は肥前産の染付半球形碗で山水文を描くものである。72・73は染付小杯。72は肥前系の並文小杯、73は肥前産の浅半球形小杯で、草花文と蝶を描く。

74～77は皿。76・77は白磁の菊花形小皿である。74は染付の五寸皿で蛇の目凹型高台をもつ。外面に連続唐草文、内面に山水文を描き、呉須は暗緑灰色に発色している。75は瀬戸・美濃産の太白手の五寸皿である。内面に松と竹、外面に宝文を描き、呉須は暗緑灰色に発色している。78は白磁の皿又は鉢で、内面に陽刻による花文を施す。

80は染付の蓋物で、外面に鳥と植物を描く。79は色絵染付の蓋物蓋。窓を呉須、草花文を上絵付

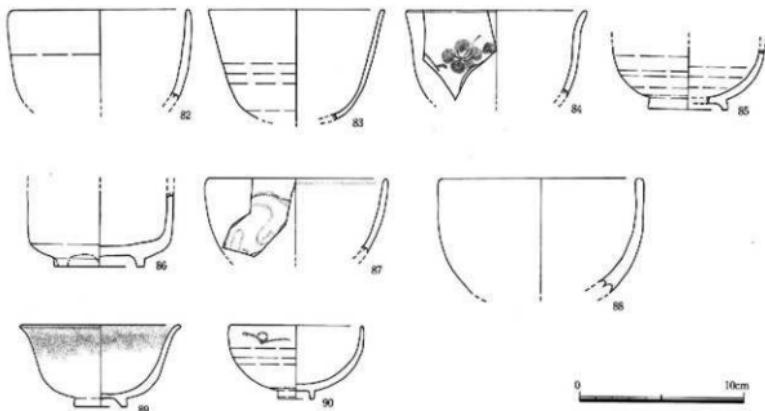


Fig.23 瓦窯3出土遺物実測図(3)

け、四方棒と唐草を赤絵の具で描き分けている。81は白磁で器種不明。型押し成形によるもので、外面にチザレ目が残る。

82~107は陶器。

82~88は中碗。82~85は尾戸窯の灰釉碗である。84は外面に梅文を描くもので、花弁を白土、枝を鉄錆で描き分けている。86は尾戸窯の鉄釉碗か。高台内を曲線的に削り出し高台内に渦状の施痕が残る。87は瀬戸・美濃産の太白手碗である。88は灰釉の丸形中碗で、灰釉は白渦する。89・90は小碗。89は信楽産の端反形小碗。灰釉を施釉し、口縁部内外面に緑釉を施す。高台内に墨書を認める。90は京都系の半球形小碗で、灰釉を施釉する。外面には鉄錆で略化した鳥文を描いている。

91は捏鉢である。92は堺産、93は堺・明石系の摺鉢である。94は鉄釉の鍋で、鉄釉を施釉し、外底を曲線的に削り出している。95も鉄釉の鍋で、尾戸窯又は能茶山窯の製品とみられる。96は灰釉の急須。外面上位に多段の強いロクロ目を巡らしている。97は灰釉土瓶で外面に白泥で花文を描く。98は鉄釉の土瓶。99は鉄釉の土瓶蓋で、摘みを花形に成形している。

100は丹波焼の壺で、外面に黒褐色の釉を施釉し、肩部から黒色の釉を流し掛けする。口縁端部から内面には灰釉を施釉する。101は関西系の鉄釉壺である。鉄釉はにぶい赤褐色で、肩部に黒色の釉を流し掛けする。102は器種不明。褐釉を施釉し、頭部の外面には丸彫による縦筋が巡らされる。103は底部の中央に円孔を穿つもので、植木鉢に転用されたものか。内底に砂目が残る。104は蓋物の蓋。灰釉を施釉し、外面には呉須、鉄錆、白土で菊花を描く。105は火入れ。外面に白化粧土を施した後、灰釉を施釉する。106は灰釉の灯明受皿で、内面に型押しによる菊花を貼付する。107は鳥の水入れである。小判形で、灰釉を施釉し、外底と口縁端部は無釉である。尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。

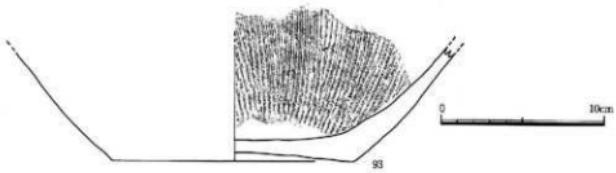
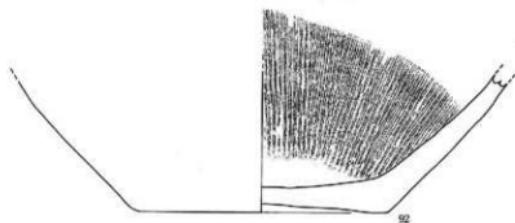
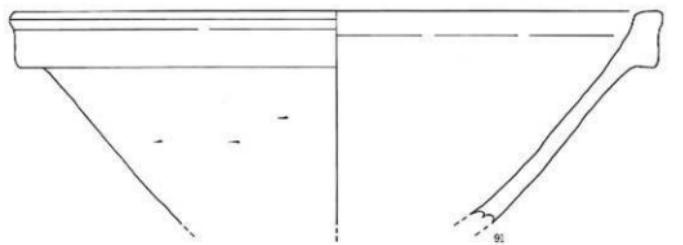


Fig.24 瓦溜3出土遺物実測図 (4)

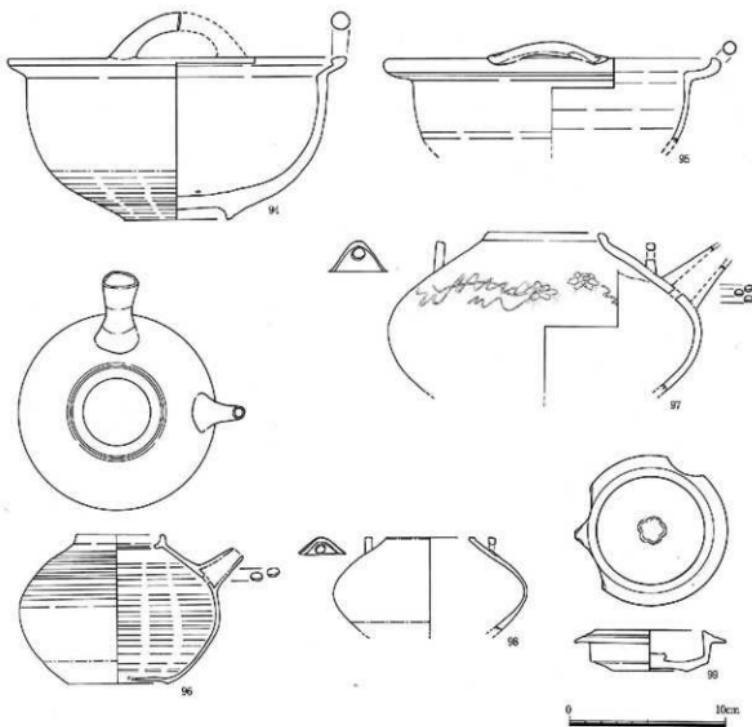


Fig.25 瓦溜3出土遺物実測図(5)

108～118は土器。

109は施釉土器で、片口を形取ったミニチュアである。型押し成形で、外面に緑色の低下度釉を施釉している。110は焼塩壺の蓋で、内面に布目痕が残る。胎土中には石英・長石・チャートの粗砂を含んでいる。108は関西産の焰烙である。111・112は関西系の土師質土器焜炉で、体部の前方に口縁部から切り込む窓を設け、内面には手捏ねによる突起を貼付する。113も土師質土器焜炉で、外底に墨書を認める。114は関西系の焜炉で、筒型のもの。体部前方に窓をもち、窓下側の受けは剥離している。底部には輪高台を貼付している。前面の下位には花状の透かしを設け、外面に赤彩を施している。115・116は焜炉のさなである。117・118は瓦質土器の焜炉である。117は体部の両側に松笠形の把手を貼付している。118は箱形で、体部の前方に四角形の窓を設ける。外底の四隅には脚を貼付する。

119～122は鉄釘である。

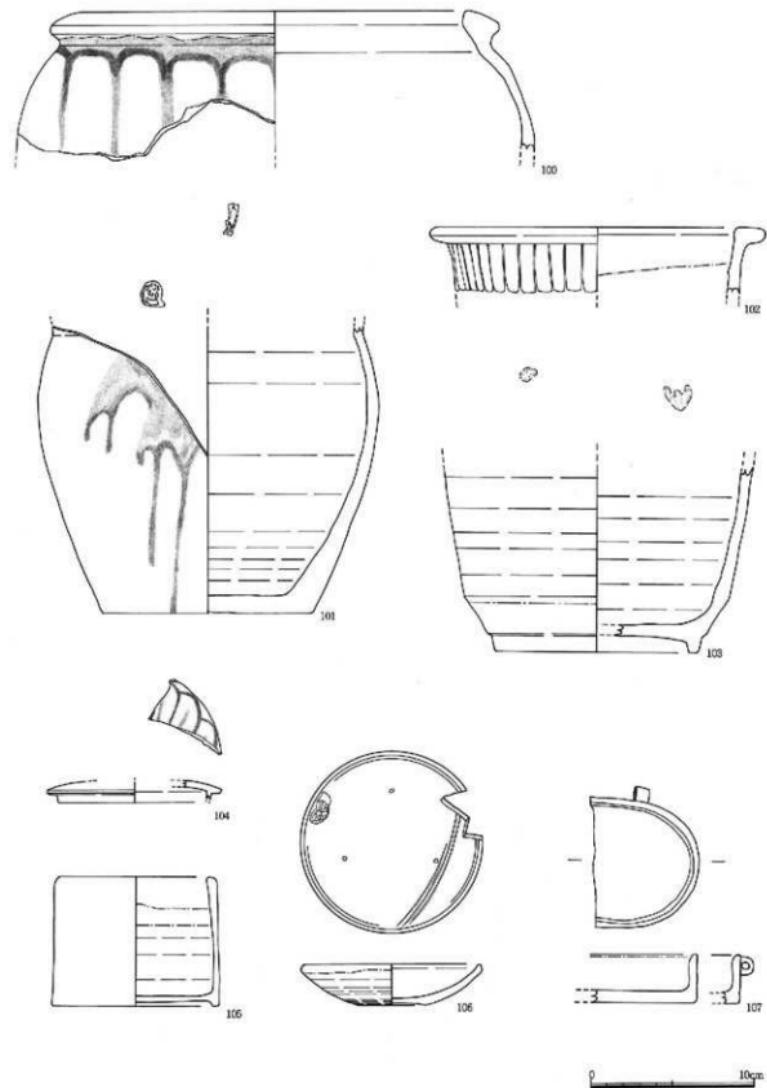


Fig.26 瓦窯3出土遺物実測図(6)

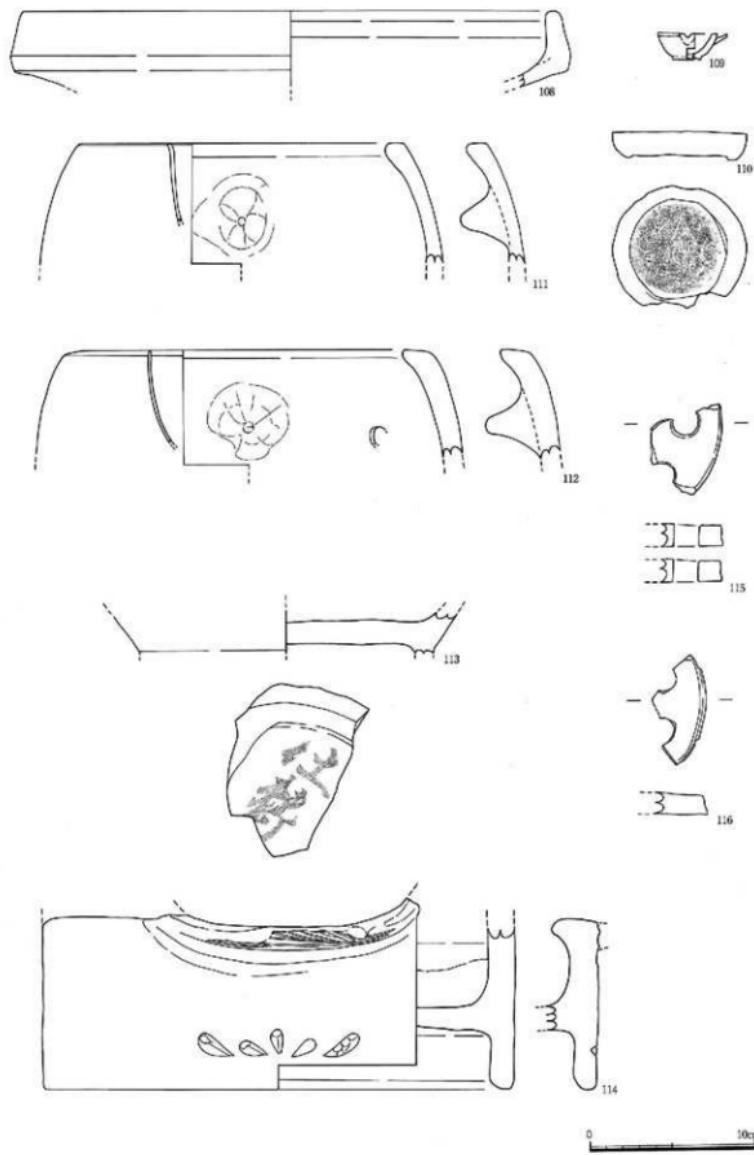


Fig.27 瓦窯3出土遺物実測図(7)

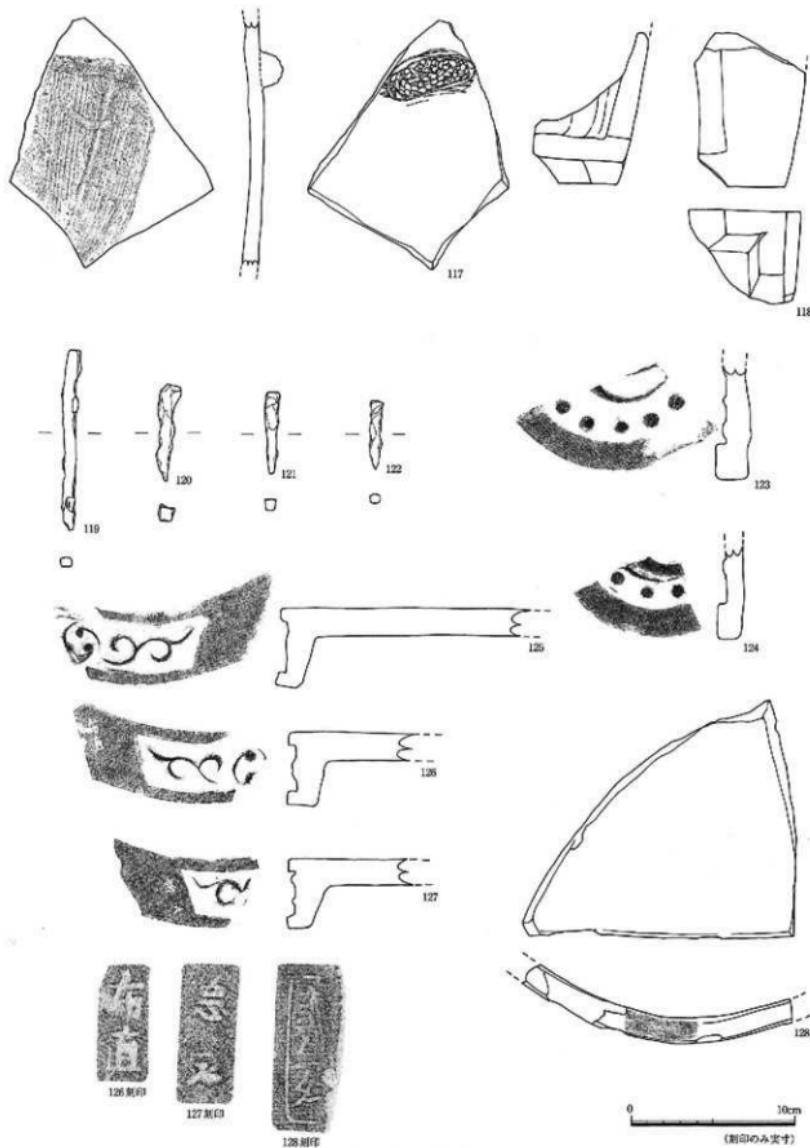


Fig.28 瓦溜3出土遺物実測図(8)

123・124は軒丸瓦、125～127は軒平瓦、128は平瓦である。126は瓦当に「布直」銘印をもち、布師田産（高知県高知市布師田）と推定される。128は角枠内「葦生□」の銘印をもち、葦生野産（高知県香美市香北町葦生野）の製品である。

図示したものの他に、瀬戸・美濃産の染付碗、瀬戸・美濃産の縁釉火鉢、備前焼擂鉢等が出土している。瓦溜3は19世紀前葉に比定される。

#### 瓦溜4 (Fig.18・29～42)

TP8の東部で検出された瓦溜まりである。東部以外の三方が試掘坑外に出るため全体の規模は不明であるが、東西2.9m、南北4.4mまでの範囲を確認している。15cm前後の厚みをもって多量の瓦片、炭化物、近世の陶磁器、土器等が出土している。

出土遺物は磁器染付碗・小碗・小杯・皿・鉢・猪口・碗蓋・瓶・蓋物・段重・水滴・白磁小皿・紅皿・ミニチュア、色絵磁器小碗・小杯、陶器中碗・小碗・小杯・碗蓋・小皿・鉢・擂鉢・捏鉢・片口・鍋・蓋物・土瓶・瓶・徳利・壺・漫瓶・火鉢・灯明受皿・水滴・鉢鉢・鳥の水入れ・ミニチュア・植木鉢・土師質土器小皿・杯・中皿・羽釜・焙烙・焜炉・火消し壺・焼塩壺・人形・型・瓦質土器焜炉・火鉢・鉄釘・硯・銅製煙管・ガラス製品（簪か）、瓦である。

図示したものは、129～332である。

129～196は磁器。143～148・151・166は瀬戸・美濃産、153は関西系、その他は肥前産または肥前系である。

129～153は碗。129・130は丸形碗で、130は外面に草花文、口縁部内面には帯線と墨弾きによる唐草文を配する。131は肥前産の染付大碗で、外面に鶴、花、壇、口縁部内面に四方擇、見込みに鶴を描く。132～138・141は広東形碗。139は肥前系の草花文碗である。140は肥前産の端反形碗で、外面に草文、見込みにコンニャク印判による五弁花文を描く。142は端反形碗で、花文を描く。143～148は瀬戸・美濃産の端反形碗である。149は肥前産の丸形小碗で、外面に人物と竹、見込みに手描きによる五弁花文を描く。150は肥前産、151は瀬戸・美濃産の端反形小碗、152は蟹手の白磁小碗である。153は関西系の色絵小碗で、外面に赤、黒、その他による上絵付を施す。

154は肥前産の薄手酒杯で、内面に花文を描く。156～162は染付小杯。156は山水文、157は和歌を描く。155・163は色絵小杯。155は赤、緑の上絵付けによる花卉文が施される。163は赤、黒、その他による上絵付を施しており、輪郭を黒で描いている。

164～166は碗の蓋。164・165は広東形碗の蓋で、164は葡萄、165は外面に松、内面に鷺を描く。166は瀬戸・美濃産で、外面に唐草文、口縁部内面は帯線と墨弾きによる如意頭文を描く。

167～174は皿。167・168は肥前系の染付小皿である。169～171は肥前系の五寸皿で、蛇の目凹型高台をもつ。169・171は外面に連続唐草文、内面に山水文、170は内面に松と竹を描く。172は蛇の目凹型高台の染付小皿で、口鉢。内面には雲龍と山水文を描いている。173は白磁の菊花形皿。174は白磁の菊花形極小皿で口鉢である。

175～178は鉢。175は肥前産の浅丸形鉢である。蛇の目凹型高台で、外面に連続唐草文、内面に草花文と手描きによる五弁花文を描く。176は芙蓉手の八角形鉢。177は六角形鉢で外面に植物、内面に宝文を描く。178は肥前系の端反形鉢で、外面に波、内面に不明文様を描く。

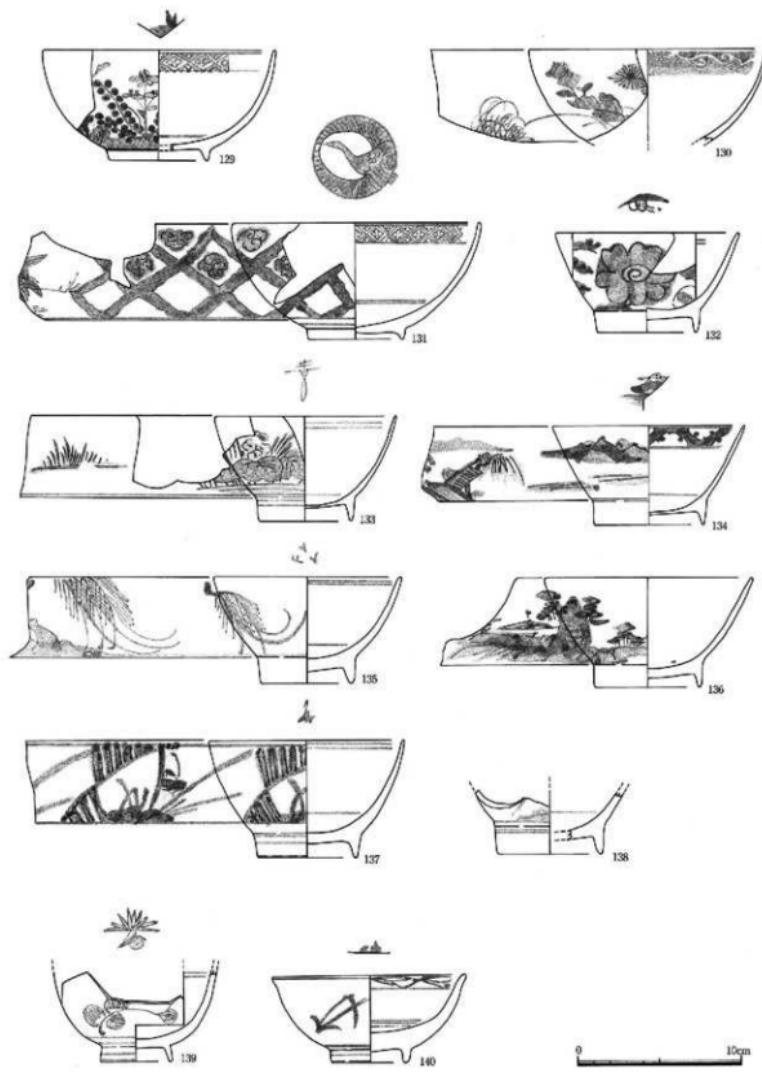


Fig.29 瓦溜4出土遺物実測図(1)

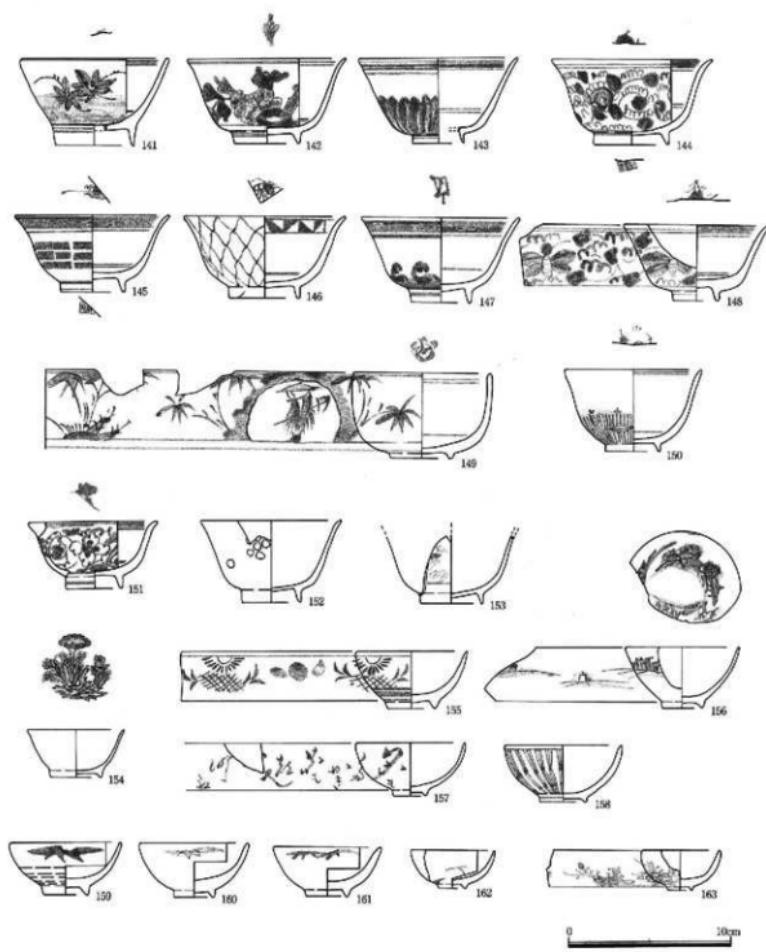


Fig.30 瓦窯4出土遺物実測図(2)

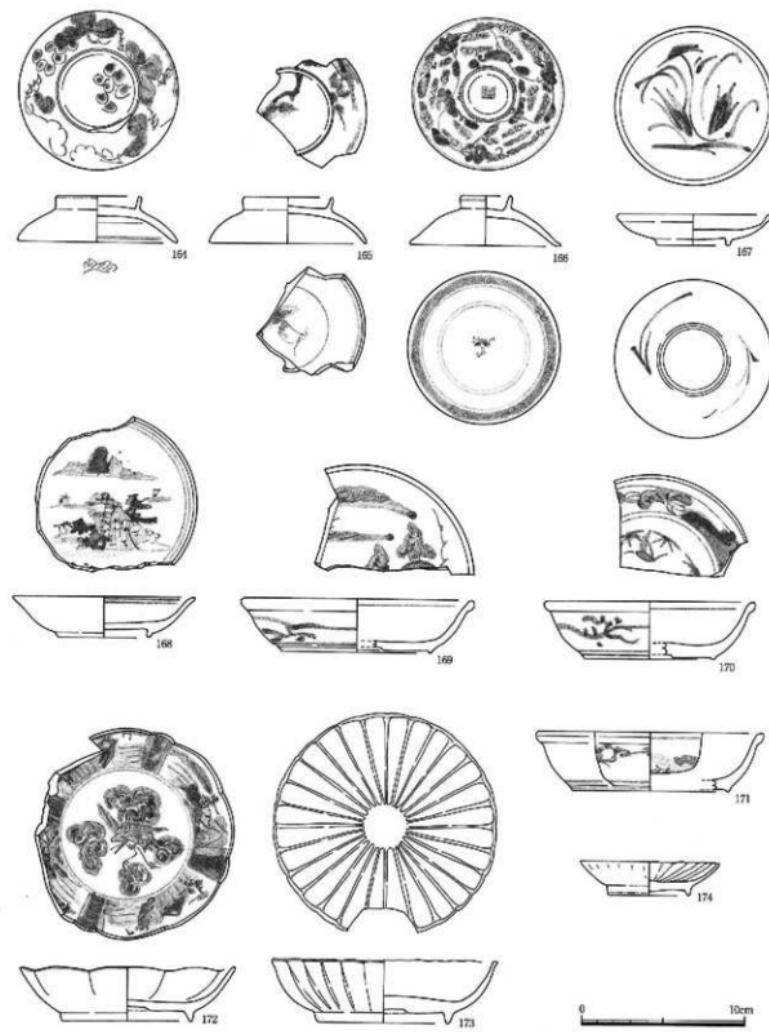


Fig.31 瓦溜4出土遺物実測図 (3)

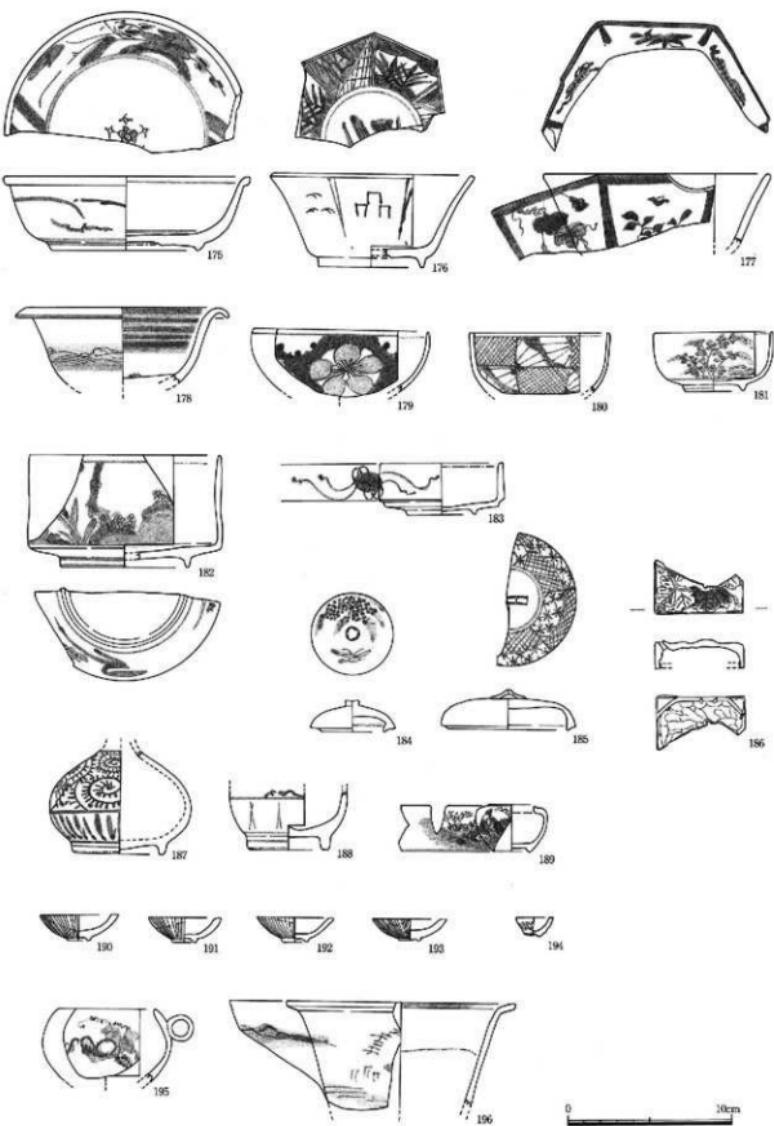


Fig.32 瓦窯4出土遺物実測図(4)

179～182は蓋物。179は肥前産の蓋物で梅と雪輪を描く。180は外面に半菊と網目、181は外面に草花文を描くものである。182は半筒形蓋物で、外面に草花と岩を描く。183は肥前産の段重で宝文を描く。184・185は蓋物の蓋で、184は草花文、185は外面に網目文と四方擣を描く。

186は水滴で、陽刻による葡萄文を施す。187は髮油壺で、外面は蛸唐草文である。188は肥前系の瓶で、外面に唐草文と松葉を描く。190～193は白磁紅皿である。195は鉢鉢か。外面に葡萄文を描く。

194は白磁のミニチュア。型押し成形で、外面には陽刻の蓮弁文を施す。189はミニチュアの壺で、外面に人物文を描く。196は植木鉢か。

197～268は陶器。

197～206・208～210は碗。197～206は尾戸窯の灰釉碗で、199は焼成不良、197・198・200～204・206は灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。205は広東形碗で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉し、鉄錆で宝文を描く。201～203は高台内に渦状の施痕が残る。207は尾戸窯の碗又は鉢である。208は京都系又は尾戸窯産の灰釉半筒形小碗である。209は灰釉小碗で、尾戸窯産の可能性をもつ。高台内には墨書を認める。210は関西系の灰釉端反形小碗である。211は丸形の灰釉小杯で、尾戸窯産か。

212～214は皿。212は尾戸窯の灰釉中皿で、口縁部は溝縁状を呈する。見込み蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分には白泥を塗る。灰釉はオリーブ黄色を帯び、一部にオリーブ色の釉を流し掛けしている。213は見込み蛇の目釉剥ぎの鉄釉小皿である。釉は黒褐色に発色し、釉剥ぎ部分に白泥を薄く塗る。外面上位には一条の沈線を巡らせてある。尾戸窯又は能茶山窯の製品である。214も尾戸窯の蛇の目釉剥ぎ鉄釉小皿である。

215は尾戸窯の灰釉鉢で、口縁部を輪花形に作り出すものである。216は鉄釉の捏鉢で、口縁を内側へ肥厚させる。暗赤灰色の釉を施釉している。217は片口で、灰白色の白濁した釉を施釉する。218は備前焼擂鉢である。

219は行平か。にい黄橙色を帯びる透明の釉を施釉し、三足を添付する。220も行平で、外面に鉄釉を刷毛塗りし、飛鉈を施す。221は灰釉の鍋で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。222は灰釉の鍋蓋で、外面上位に多条の沈線を巡らす。灰釉はにい黄橙色に発色している。

223～225・228～230は土瓶。223は外面に白化粧土施釉の後、灰釉を施し、体部上位に緑釉を流し掛けする。224は鉄釉土瓶で、体部上位に灰釉を流し掛けする。225は上位に多条の沈線を巡らせ、黒褐色の鉄釉を施釉する。228は灰釉土瓶で外面に白化粧土施釉の後、灰釉を施す。229も灰釉土瓶である。230は隱元形の灰釉土瓶。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉し、白土のイッチン描きで草花文を描く。226は尾戸窯又は能茶山窯産の土瓶蓋で、黒褐色の釉を施釉する。227も鉄釉の土瓶蓋である。

231は備前の人形徳利である。腹部を窪ませ、型作りによる布袋を貼付する。232は瓶で、白化粧土施釉の後、灰釉を掛けける。233は関西系の鉄釉壺。釉は褐色で、黒色の釉を肩部から流し掛けする。234は壺又は壺の底部で、鉄釉を施釉する。235は尾戸窯産の灰釉小瓶。胎土は灰白色で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。236は鉄釉の小壺で、釉は暗褐色に発色する。237は鉄釉の瓶

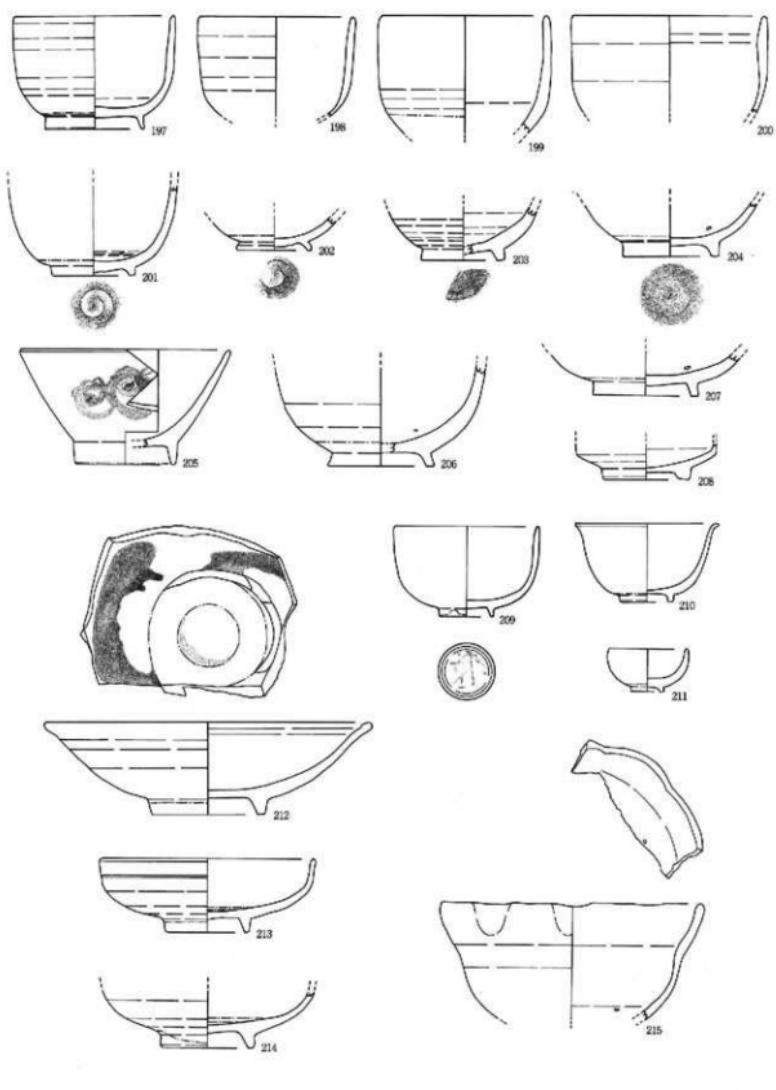


Fig.33 瓦窯4出土遺物実測図(5)

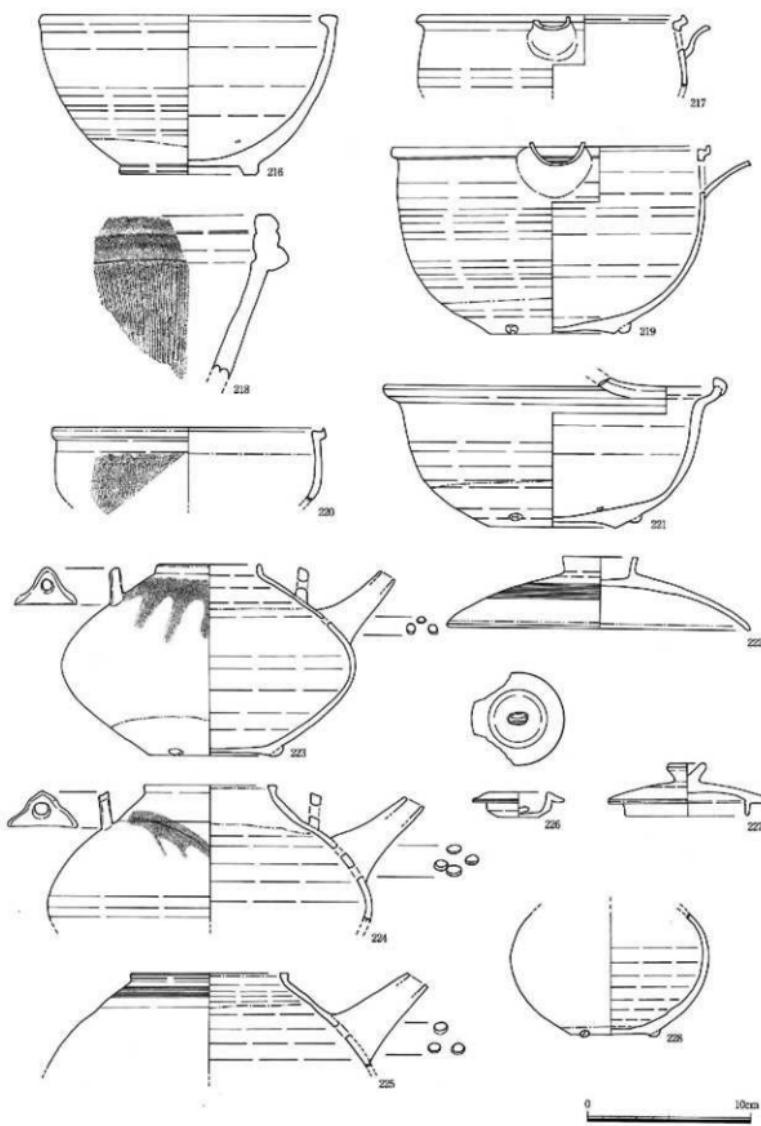


Fig.34 瓦溜4出土遺物実測図 (6)

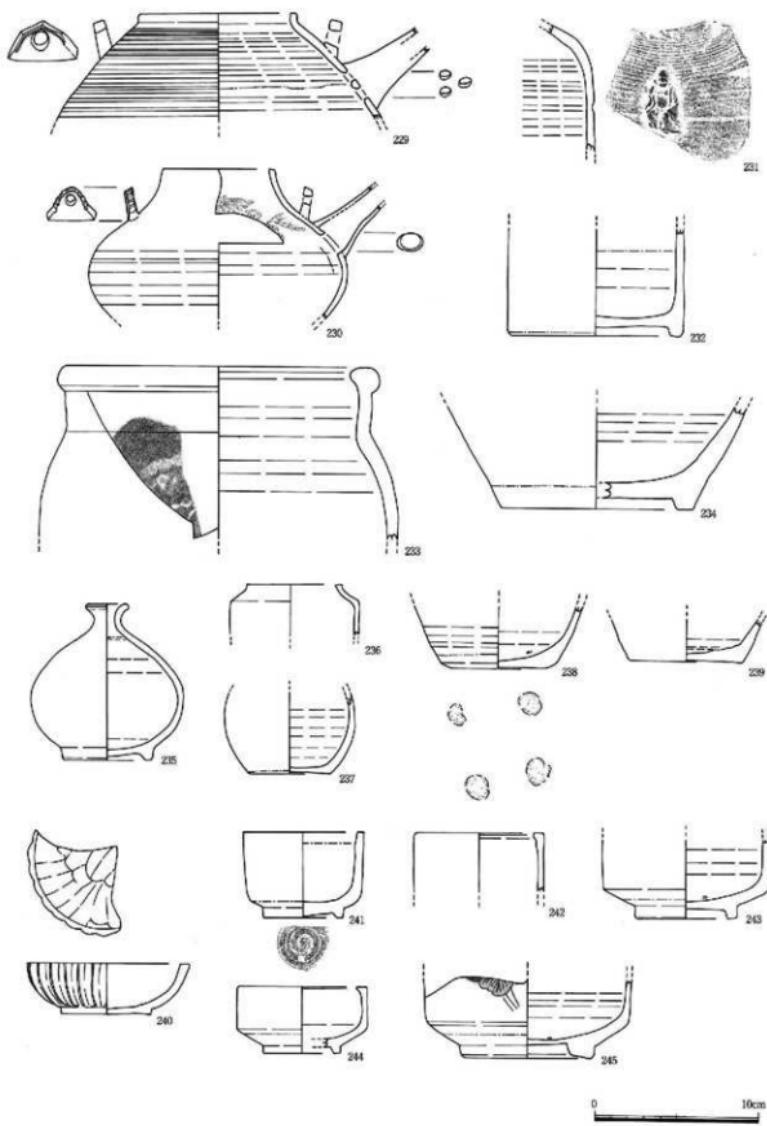


Fig.35 瓦窯4出土遺物実測図(7)

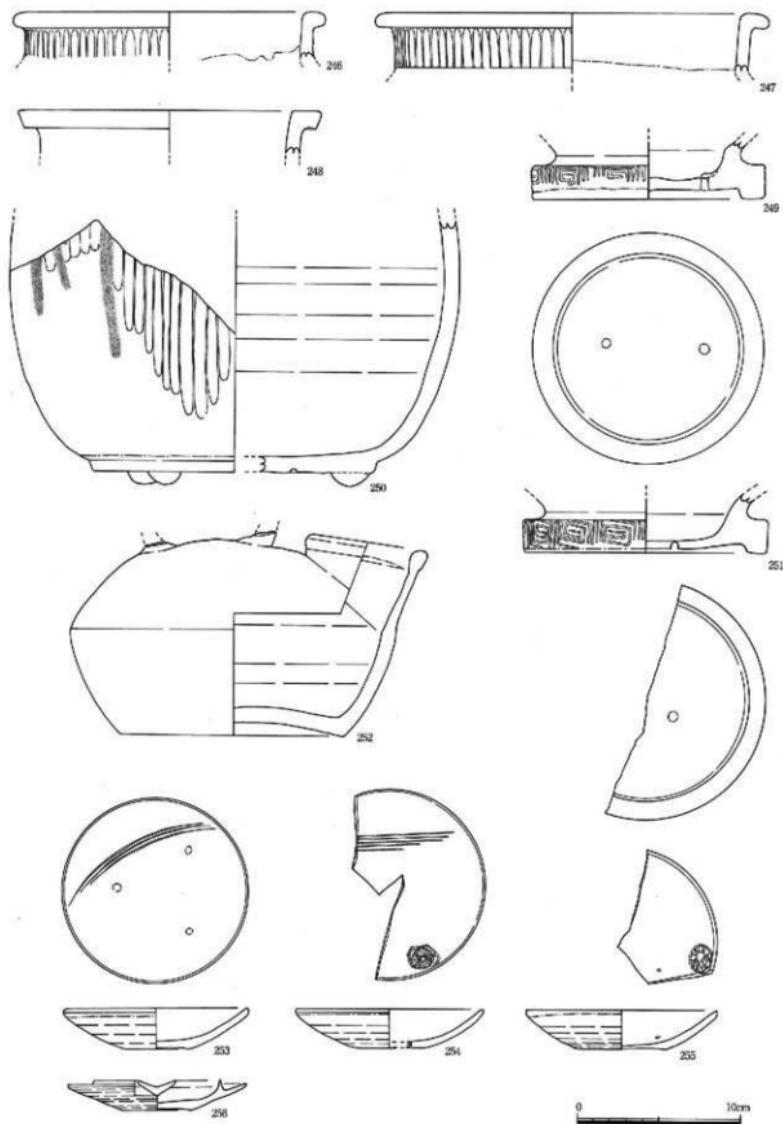


Fig.36 瓦溜4出土遺物実測図(8)

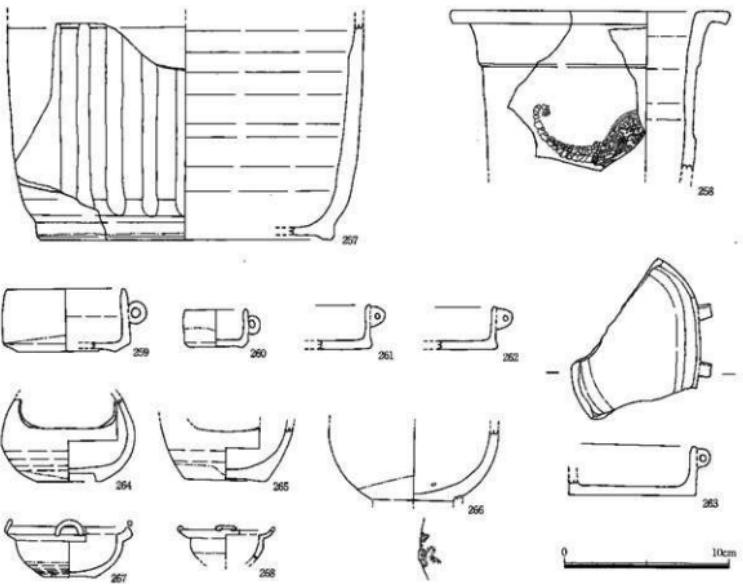


Fig.37 瓦窯4出土遺物実測図 (9)

で、釉は黒褐色に発色する。238は瓶頸か。鉄釉は褐色に発色する。内底に目痕3足、外底の4箇所に团子状の砂目痕が残る。239は鉄釉の瓶で、釉は暗赤褐色に発色する。

240～242・244は蓋物。240は菊花形の灰釉蓋物で尾戸窯産か。型押し成形で、外面に型による菊弁を施す。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。241は尾戸窯の灰釉蓋物。外面は灰黄色に発色し、高台内に乱れた渦状の鉢痕が残る。242は尾戸窯又は京都系の灰釉蓋物で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。244は関西系の灰釉蓋物である。243は尾戸窯の中碗又は蓋物で外面は灰黄色に発色する。245は器種不明の底部。灰釉を施釉し、外面に呉須絵を描く。

246・247・249～251は火鉢で、何れも瀬戸・美濃産である。250は外面に丸彫りによる縦筋を施す。淡黄色を帯びる灰釉を施釉し、部分的に青色の釉を流し掛けする。内面は錆釉を刷毛塗りする。248も瀬戸・美濃産で、器種不明。252は鉄釉の漫瓶で、釉は黒褐色に発色する。

253～256は灯明受皿。254・255は京都系の灯明受皿で、内面に櫛目を施し、菊花を貼付する。灰黄色を帯びる半透明の釉を施釉している。253・256は関西系の灯明受皿である。

257は器種不明。外面に丸彫りによる縦筋を巡らせ、鉄釉は褐灰色に発色している。胎土は黄灰色を呈する。258は瀬戸・美濃産の植木鉢で、外面に陽刻文様が施される。緑色の釉を施釉している。

259・260は灰釉の鉢鉢。261～263は灰釉の鳥の水入れで尾戸窯産か。264・265は体部前方に梢円形の窓をもつもので、鉄釉は褐色に発色し、胎土は灰白色を呈する。尾戸窯の製品である。266は器種不明の底部で、高台内に墨書が残る。267・268はミニチュアの鍋。267は胎土が黄灰色を呈し、にぶい赤褐色の鉄釉を施釉する。268は灰白色の胎土をもち、褐色の鉄釉を施釉している。

269～322は土器。

280は土師質土器の杯である。内外面回転ナデで、外底の周縁にナデを施している。269は椀状の形態をもつもので、内外面回転ナデの後、外面下半に回転ケズリを施している。内底に焦げ痕が残る。

270～274は土師質土器小皿。270は内外面回転ナデで、外底に回転糸切り痕が残る。口縁部には灯芯油痕を認める。271～274は尾戸窯産の土師質土器小皿で、外面下半と外底に回転ケズリとナデを施すものである。胎土は橙色またはにぶい橙色に発色している。271・272は内底に不定方向のナデを加えている。

275～279は土師質土器中皿で、尾戸窯産とみられるものである。275は外面下半と外底に回転ケズリを施し、胎土はにぶい橙色である。276・278は外面下半と外底に回転ケズリ、内底に直線方向のナデを施し、胎土は橙色を呈する。外底に焦げ痕が残る。277は外面と外底に回転ケズリとナデを施し、胎土は淡い橙色を呈する。279は薄手の作りで、外面下半に回転ケズリを施す。外底に焦げ痕が残る。

286～292は焼塙壺、281～285は焼塙壺の蓋である。蓋281・282・284・285、身286・287は関西産で、胎土中に石英・長石・金雲母他の粗砂を含む。286・287は外面ナデ調整で、内面に粗い布目痕が残る。286は外底に粘土塊の貼付痕が明瞭に残り、287も外底に粗いユビオサエ痕が残っている。蓋283・身288～292は産不明で、胎土中に石英・長石・チャート(灰色)他の粗砂を含むものである。288～292は内外面ともにナデ調整を施しており、289・291・292は体部内面と内底に工具による回転方向のナデが認められる。外底はユビオサエとナデである。285は上面に墨書きを認めている。

293～295は土師質土器の焙烙、297・298は瓦質土器の焙烙である。293～295は口径が約30cm、297・298は約19cmの小型のものである。293～295は内面と口縁部外面が回転ナデで、外底は型によるチヂレ目や凹凸が残る。297・298は内面回転ナデ調整で、外面は口縁端部の直下までチヂレ目や凹凸が残っている。299は土師質土器の羽釜で、灰白色の胎土をもつ。底部は厚手で、外面下半と外底に回転ケズリを施している。296は土師質土器で、把手の部分か。300は火消し壺、301は不明土器の部品である。

302～311は土師質土器の焜炉。302～307は丸形の体部に輪高台を貼付するもので、303は前方に梢円形の窓を認める。308は筒型の焜炉で、前方に窓をもち窓の下部に受けを貼付する。外面に赤彩を施している。309は筒型の焜炉で、体部内面の中位に断面三角形の突帯を貼付している。310も筒型の体部をもつもので、内面中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ調整、体部外面にはチヂレ目が残る。311は練り込み手の土師質土器焜炉で、窓の形状は不明である。312・313は焜炉のさなである。314・315は瓦質土器の焜炉。314は箱形で体部前面に四角形の窓をもつ。315は箱形で、松笠形の把手を貼付している。

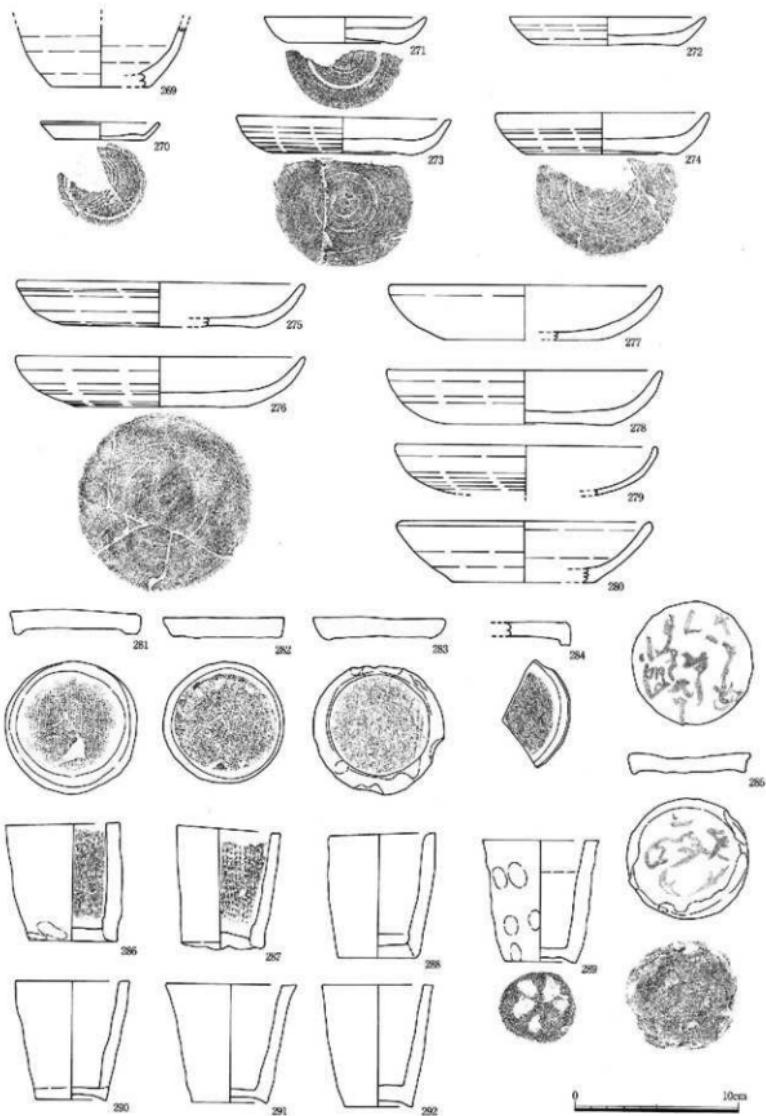


Fig.38 瓦溜4出土遺物実測図(10)

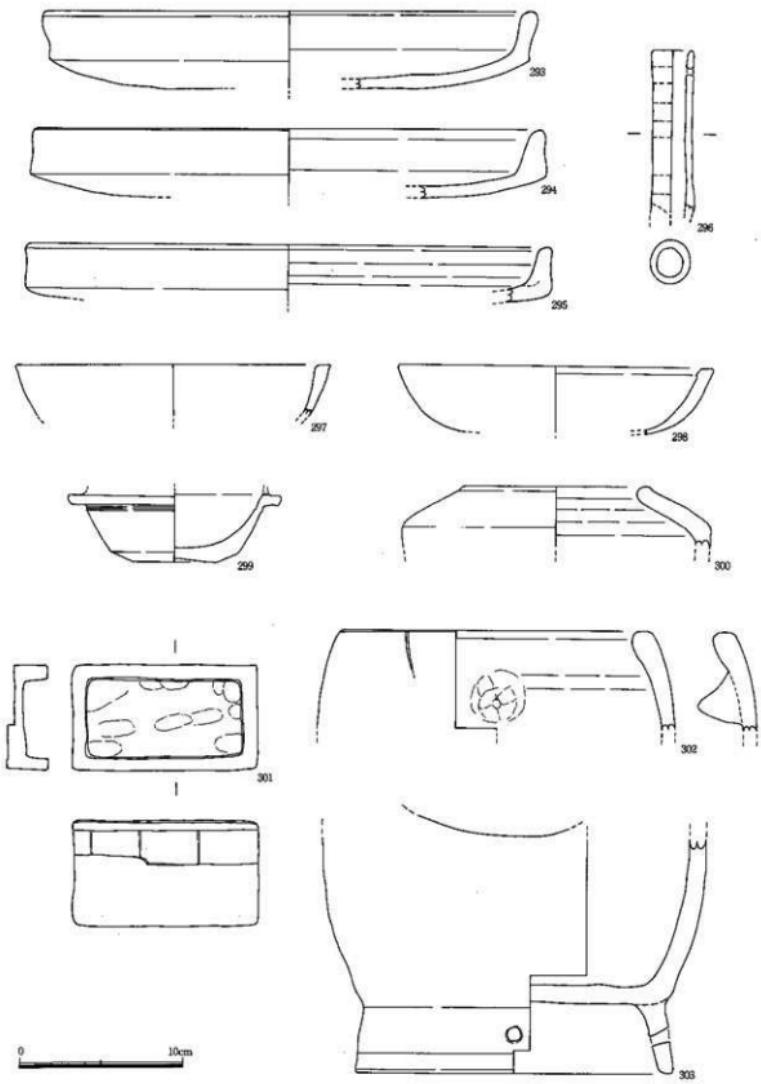


Fig.39 瓦溜4出土遺物実測図 (11)

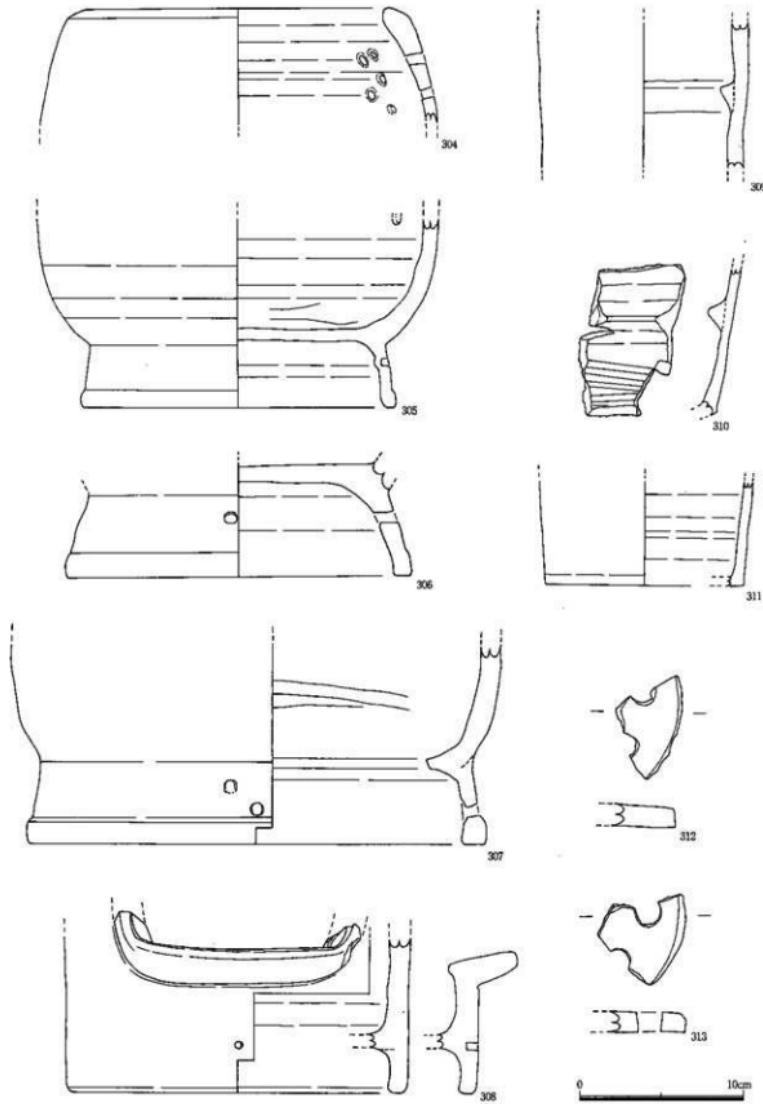


Fig.40 瓦窯4出土遺物実測図(12)

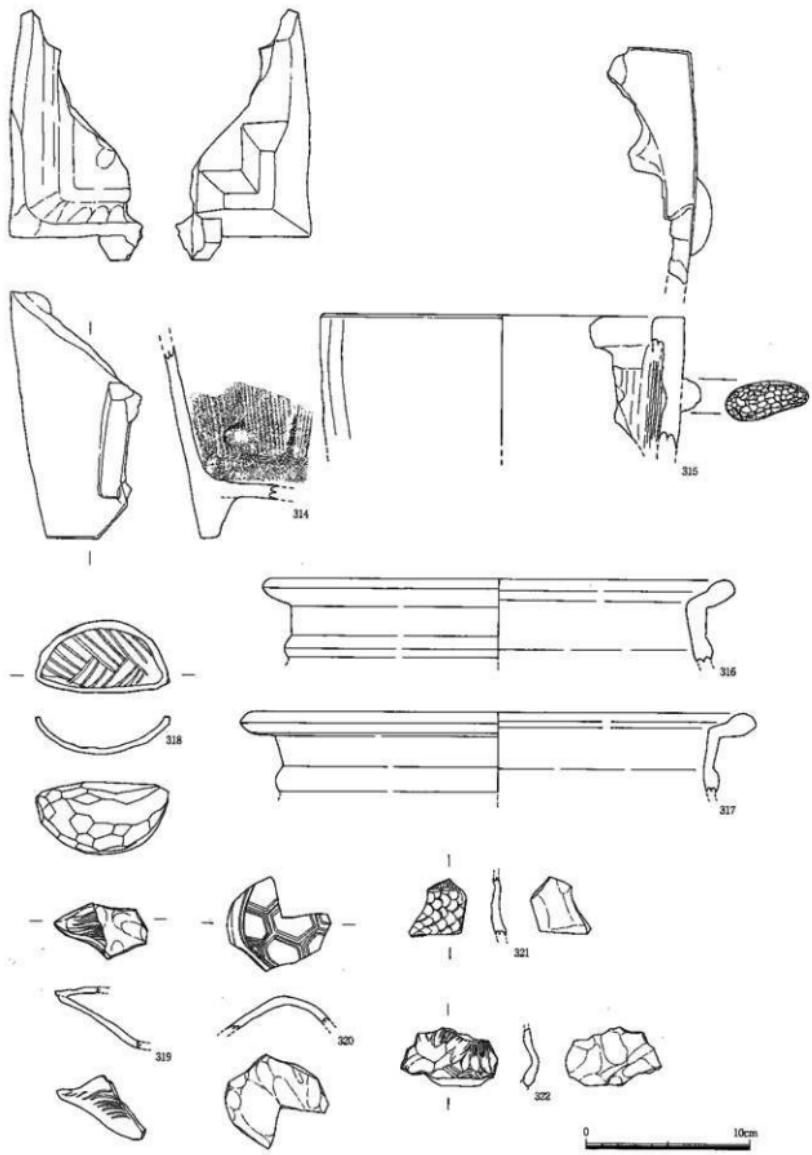


Fig.41 瓦窯4出土遺物実測図 (13)

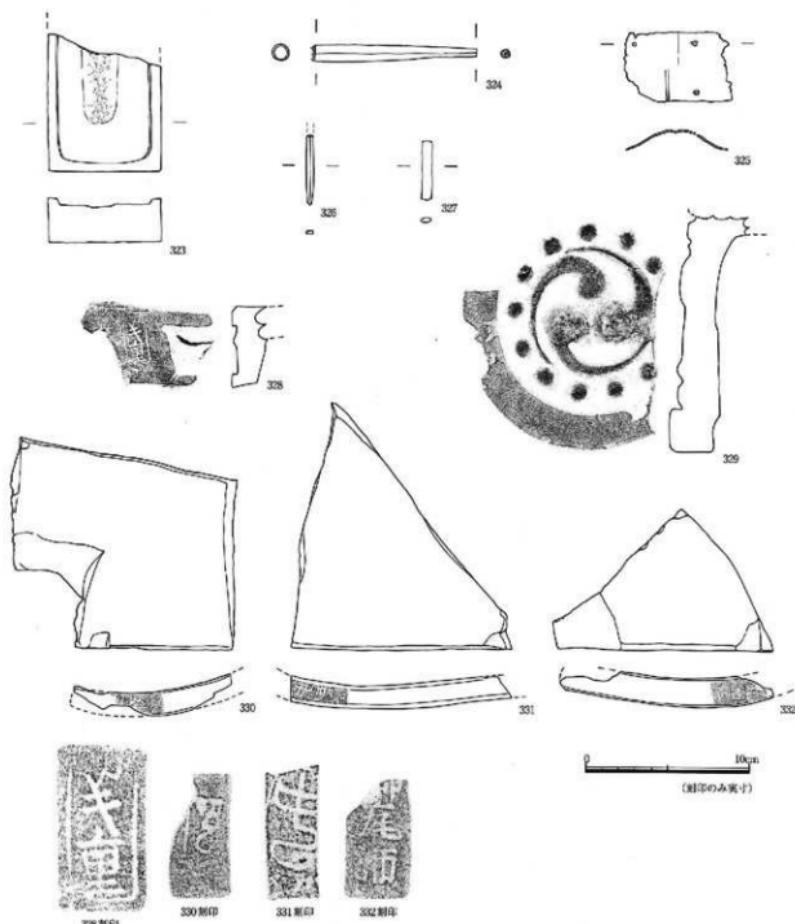


Fig.42 瓦窯4出土遺物実測図 (14)

316・317は瓦質土器の火鉢で、外面にミガキ、内面に回転ナデを施す。

319～322は土師質土器の人形である。319は鳥、320は亀、321は魚、322は人物で、何れも中空で、型作り貼り合わせによる。胎土はにぶい橙色またはにぶい黄橙色に発色している。318は土師質土器の型で、内面に凸状の松笠の文様が入る。外面に面取りを施し、内面にはチザレ目が残る。

323は覗で、海部を欠損する。324は銅製の煙管吸口。325は用途不明の銅製品。薄い板状で、両

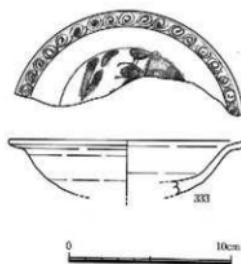


Fig.43 TP8 包含層Ⅱ層出土遺物実測図

端に円孔を穿つ。326はガラス製の簪で、先端部は丸みをもつ。327もガラス製品で、簪か。

329は軒丸瓦、328は軒平瓦、330～332は平瓦である。328は角枠内「アキ重」銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。331は「中己」銘印をもつ。332は「御瓦師」銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。

#### ⑤包含層出土の遺物 (Fig.43)

333は初期伊万里の皿で、口縁部内面に渦文を描く。包含層Ⅱ層からの出土である。

## 7. TP9

調査区の南部に設定した試掘坑である。該当地点は、平成13年度に高知県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った高知城伝下屋敷跡の調査区北側に接している。そのため、両調査区の関連性を確認するために、幅2mのトレンチを東西12mにわたって掘削し検出作業を行った。

高知城伝下屋敷跡の調査では、17世紀～18世紀初めの遺物を含む瓦溜まりや焼土層、江戸前期の堀跡の存在が報告されているが、本試掘坑においても同様に、焼土と被熱した瓦片を含む遺構SX1を検出した。

#### (1) 層序 (Fig.44)

近・現代の整地層（I層）と攪乱の下面で、近世の遺物包含層であるII層：灰黄褐色シルト層（標高2.1m～2.4m）を検出した。II層の下面には、III層：にぶい黄褐色シルト層（標高1.9m～2.1m）、IV層：褐灰色粘質シルト層（標高1.0m以下～1.9m）が堆積している。

焼土を含む遺構SX1は、III層を掘り込んでおり、SX1の上面にII層が堆積している。

SX1との関係からみて、II層は江戸中期以降、III層、IV層は江戸前期またはそれ以前の堆積層と考えられる。IV層からは土師質土器片が少量出土している。

#### (2) 遺構と遺物

##### ①性格不明遺構

##### SX1 (Fig.44～46)

TP9の西部で、遺構の西壁を検出した。南北長2m、東西長7.3mまでを確認したが、調査区上の制約から、南北と東側の壁は未検出である。深さは80cmを測る。床面はほぼ平坦で、西壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がっている。埋土は1層：焼土ブロックと炭化物を多量に含む暗赤褐色シルト、2-1・2-2層：焼土ブロックと炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルト、3層：焼土ブロックを少量含むにぶい黄褐色粘質シルトである。このうち、2-2層は瓦片を多量に含んでおり、2-1層からも少量の瓦片が出土している。

出土遺物は磁器染付碗・皿・鉢・壺、青磁猪口又は碗・瓶、陶器碗・小皿・擂鉢・瓶、土師質土器小皿、瓦である。

図示したものは334～348・350・351・353～365である。このうち、334・335・337・338・340～

343・346～348・350・351は最上位の焼土層(1層)からの出土、336・339・344・345・353～361は中層(2-2層)から多量の瓦片とともに出土したものである。また、359は3層から出土したものである。これらのうち341・343・347・348・351・359は二次被焼によって釉が変質している。

334～348・350・351は磁器。何れも肥前産である。334は染付の半筒形中碗で、山水文を描くものか。335は染付中碗。336は染付碗か。内面に寿字文、高台内に角枠内福鉢をもつ。337は青磁の猪口又は碗で、釉は明緑灰色に発色する。338は青磁中碗で明緑灰色の釉を施釉する。339は青磁猪口又は碗である。340は染付の変形皿で、外面に笠文を描く。341は染付の丸形小皿である。薄手で、外面に唐草文、内面に松を描く。342は染付の皿または鉢で、外面に草文を描く。343は染付の丸形中皿で、外面に花唐草文、内面に籠と草花、水を描く。344は青磁の変形皿で、内面に陽刻文様を施す。345は青磁の鉢又は変形皿である。ともに釉は明緑灰色に発色する。346は染付磁器の底部で器種不明。内面は無釉である。347は鉢か。外面に梅文を描く。348・350は青磁で器種不明。内面は無釉である。351は染付壺で、頸部に籠と雷文、体部外面に桐文を描く。

353～359は陶器。353・354は肥前産の褐釉碗で、354は黒褐色の釉を施釉する。355は肥前産の灰釉丸碗で、浅黄色を帯びる半透明の釉を施釉する。356・357は唐津系灰釉陶器の小皿である。358は播鉢。359は鉄釉の小瓶で、釉は二次被釉

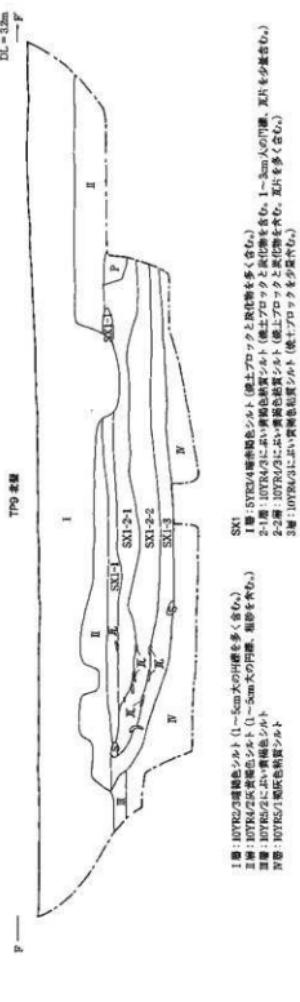


Fig.44 TP9セクション図

によって変質している。

360・361は土師質土器小皿である。

362～364は軒丸瓦、365は軒平瓦である。図示したものの他にも、21・22層内から瓦片が多量に出土しており、二次被熱によって変色したものが多く認められた。出土した瓦片のうち、平瓦は厚手のものが多く含まれる。また、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦とも銘印をもつものは確認できなかった。

SX1からは17世紀初頭～18世紀前葉の遺物が出土している。これらの内容より、SX1は18世紀前葉に比定される。

#### ②包含層出土の遺物 (Fig.45)

349・352は包含層Ⅱ層出土の遺物である。349は肥前産の青磁瓶、352は肥前産の染付壺である。

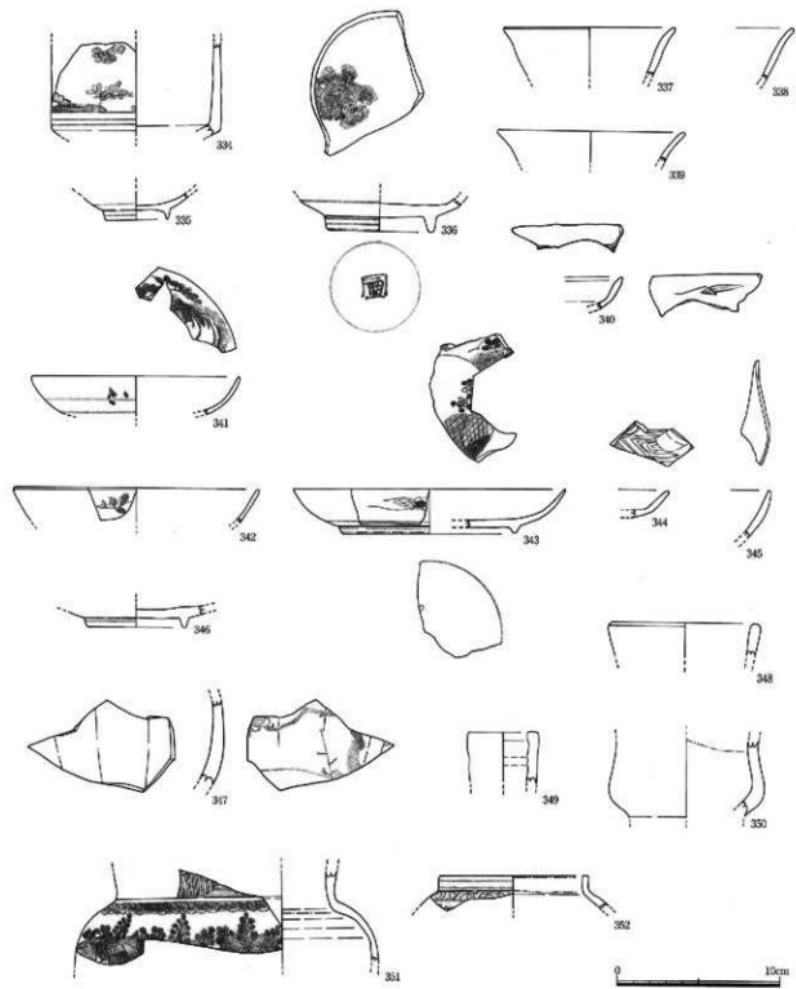


Fig.45 SX1 · TP9 包含層Ⅱ層出土遺物実測図 (SX1:334~348・350・351, Ⅱ層:349・352)

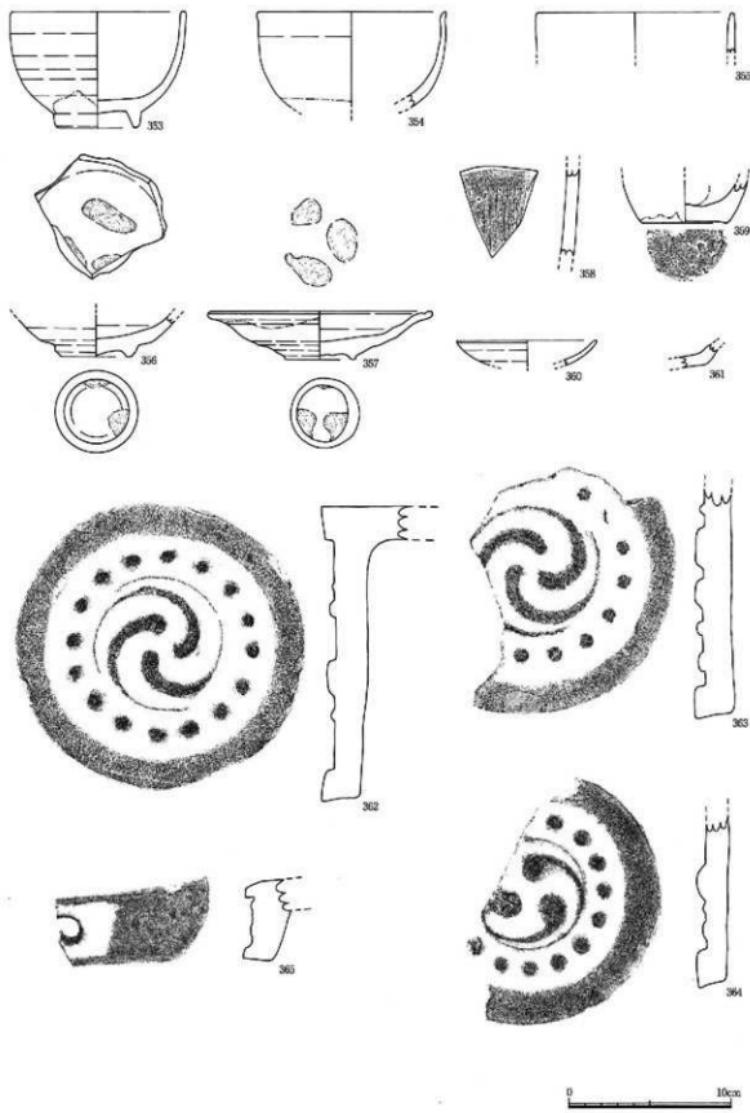


Fig.46 SX1出土遺物実測図

Tab.1 遺物觀察表(陶磁器・土器)

国版 番号	出土 地點	種類	器種 部形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉薬等)	備考(生産地、 生産年代・路、 使用痕、他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1	SK1	磁器 束付	直	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 梅文 (内) 花文 高台外) 多重環	山根部輪花形。	肥前系
2	SK1	白磁	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	島か	施押し繩目貼り合わせ。上部に 穿孔、内面ユビササギ、ユビナギ。 内面と外底無縫。	肥前系
3	瓦瀬1・ SK1 下層	磁器 束付	直	—	6.8	—	—	外) 灰75Y6/1 内) 灰N7/	内) 草花文		肥前系
4	SK1床	陶器	笠部 径	3.6	掩み 径23	—	—	外) 黒25Y2/1 内) 灰白25Y7/1	鉄粒	宝珠形の跡みをもつ。圓軸は切 り。鉄粒は黒褐色で、薄く折か る部分はオリーブ褐色に発色。	
5	SK1 下層	陶器	小瓶	—	—	34	—	外) 黒褐10YR3/1 内) 灰白25Y7/1	鉄粒	内面クロロ目。外底削除系切り。 内面無縫。黒褐色の輪。	
6	SK1 下層	陶器	擂鉢	30.2	11.5	12.6	—	外) 灰灰10R4/2 内) 黄灰25Y6/1	焼締め	山根部外縁に凹線。外面部輪ナ デ、内面部輪ナデ、標印。外底ナ デ。	備前
7	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	中範 端反形	10.8	5.8	4.4	—	外) 白 内) 白	外) 草花文 (内) 多重環 見込み) 宝文 (高台外) 二重環	腹底は竹灰色。透明釉は貢入が 入る。	鹿島茶窯 1520年代～幕末
8	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	中範 端反形	10.4	5.7	4.4	—	外) 白 内) 白	外) 宝文 (内) 宝文 見込み) 宝文	胎土は透明感をもつ。	関西系
9	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	中範 広景形	—	—	6.0	—	外) 灰灰5GY8/1 内) 灰白NB/	外) 不明 (高台外) 二重環 見込み) 不明	典模は青灰色。透明釉は貢入が 入る。	肥前系 1780年代～幕末
10	TP6 瓦瀬1	青磁 束付	中範	—	—	5.5	—	外) 明緑灰10GY7/1 内) 白	外) 青磁 (内) 二重環 見込み) 唐草文	青磁釉は明緑灰色。	肥前系 18世紀後半
11	TP6 瓦瀬1	白磁	小杯	7.0	3.0	3.0	—	外) 白 内) 白	透明釉は灰白色を帯びる。	肥前系	
12	TP6 瓦瀬1	青花	直	—	—	—	—	外) 白 内) 美濃手	内底は新青色。部分的に口唇部 の物が剥がれる。	美濃絵窓系 17世紀前葉～ 中葉	
13	TP6 瓦瀬1	青磁 束付	碗蓋	笠部 径10.6	3.3	掩み 径4.5	—	外) 明緑灰75GY8/1 内) 白	外) 青磁釉 内) 四方揮、二重 環、唐草 (内) 角付内湯 槽		肥前系 18世紀後半
14	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	蓋物蓋	笠部 径12.8	—	掩み 径3.6	かえり 径10.8	外) 灰白5GY8/1 内) 白	施みを貼付する。内面クロロ目。 かえりは無釉で灰白色の砂が付 着する。	肥前系	
15	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	蓋物蓋	笠部 径13.0	—	掩み 径4.5	かえり 径12.0	外) 白 内) 白	外) 垂・輪・不明	掩みを貼付。	肥前系
16	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	蓋物蓋	笠部 径9.5	3.4	掩み 径4.0	かえり 径8.4	外) 白 内) 白	外) 藍線	掩みを貼付する。かえり無釉。 外底は青灰色。	肥前系
17	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	蓋物	12.0	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 色・輪・不明	口唇内面と帯詰無釉。	肥前系
18	瓦瀬1	磁器 束付	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 藤割文様	壁厚し底底。内面ナデ、ユビオサ エ。内面と外底無縫。	肥前系
19	TP6 瓦瀬1	磁器 束付	火入れ	12.4	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 山本文	便衣小袋で透明釉は白濁する。 鳥原は灰オリーブ色に発色。	肥前系
20	TP6 瓦瀬1	陶器	中範 丸形	12.2	7.9	5.0	—	外) 灰黄5V8/3 内) 灰白	高台施釉。淡青色を帯びる平透 明の釉で1mm前後の貢入が入 る。		
21	TP6 瓦瀬1	陶器	鍋	16.6	—	—	—	外) オリーブ黄 内) 灰白	外) 施釉 内) 灰白	内面施釉。かえり無釉。オリー ブ色を帯びる透明の釉で1mm 前後の貢入が入る。	尾戸窯か
22	TP6 瓦瀬1	陶器	行平	—	—	—	—	外) 黒オリーブ 75V6/2 内) 灰白5Y8/1	把手	把手は原作より貼り合せせによる。 かえり無釉。灰オリーブ色を帯 び半透明の釉で貢入が入る。	
23	TP6 瓦瀬1	陶器	土瓶蓋	笠部 径7.5	2.9	掩み 径1.2	かえり 径5.8	外) 明緑灰10GY8/1 内) 灰白5Y6/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰オリーブ 色を帯びる透明の釉。輪は部分 的に焼成不良で白濁。	尾戸窯か
24	TP6 瓦瀬1	瓦器	火鉢	—	—	8.8	—	外) 淡黄5Y8/3 内) 灰白5Y8/1	灰釉外) 灰釉、青 緑釉の施釉し剥げ (内) 施釉剥落 釉	外底に径4mmの通溝とない穿孔 あり。外面に多段の浅いクロロ 目。外面に浅青色を帯びた灰釉を 施釉後、青緑釉の釉を薄く剥げ 掛け。	鹿戸・美濃窯
25	瓦瀬2	磁器 束付	中範 平形	11.4	4.8	3.6	—	外) 白 内) 白	外) 松・梅・波と 魚 (内) 山本文	吳須は鮮やかな青色。	肥前系 近代化
26	瓦瀬2	磁器 束付	小碗	8.0	—	—	—	外) 白 内) 白			肥前系

Tab.2 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・釉面・施土	特徴(変形・調整・釉面等)	備考(生産地、 生産年代、鉢、 使用痕)	
				口径	器高	底径					
36	瓦瀬2	磁器 染付	蓋又は 火入れ	—	—	7.8	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	外) 型紙刷りによ る墨介文・手書き による中文	内面クロロ目。内面と高台内側 輪郭。施成不規則で透明釉は白 居。内面に灰白色の砂が付着。	肥前系 近代か
37	瓦瀬2	陶器	水注瓶	—	—	—	—	外) 灰青25Y6/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	往口部の上面に長方形の切り込みあり。灰釉は灰青色を帯びる半透明の範囲で1mm前後の窓が入る。	
38	瓦瀬2	陶器	擂鉢	22.2	—	—	—	外) 黒褐25Y3/1 断) 黒25Y2/1	黒釉	内面に縦かい櫛目。内外面継ぐかなロクロ目。外側と口部部の開削部。内面四輪ナデ。外面ヨコナデ。外底に円形の三足を船台。	肥基山窯 近代
39	瓦瀬2	瓦質 土器	火鉢	20.0	8.0	18.6	—	外) 晴黃25Y5/2 断) 黑5Y2/1	内) 上輪付け (赤・緑) 花唐草文 外) 不明	墨付の両面に面取り。高台施釉。	中国産徳清窯 16世紀
54	SX21層	磁器 色絵	皿	—	—	13.6	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	内) 番手 (赤・緑) 花唐草文 外) 不明	鐵鑄を施した後長石釉を厚く掛ける。	志野焼 16世紀末~1610 年代
55	SX21層	陶器	碗	—	—	—	—	外) 灰25Y8/1 断) 灰白25Y8/1	長石釉	外面横方向のイタナデ。内面ユビオナエ・ナデ。	
56	SX21層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 赤灰25Y8/1 断) 赤灰25Y8/1	洗練め	外側は暗青色。	肥前系 備前
58	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	10.6	5.7	5.6	—	外) 灰白75Y8/1 断) 白	外) 番手 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 二重輪縫 見込み 文字	外側は暗青色。	肥前系
59	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	10.6	5.6	5.6	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 (口縁内) 二重輪縫 見込み 植物	肥前系又は肥前系	
60	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	11.8	6.5	5.8	—	外) 白 断) 白	外) 松 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 圖線 見込み 芳字		肥前系
61	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	11.6	6.6	6.0	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 圖線 見込み 芳字	外側は暗青色。	肥前系
62	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	10.8	5.9	5.2	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 圖線 見込み 芳字	外側は暗青色。	肥前系
63	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 広東形	10.8	—	—	—	外) 灰25GY8/1 断) 白	外) 草花文 (口縁内) 二重輪縫		肥前系
64	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 湖田形	10.2	5.6	4.0	—	外) 白 断) 白	外) 砂・波・千島 (口縁内) 波・千島 見込み 芳字		肥前系又は肥前系
65	瓦瀬3	磁器 染付	中輪 堆瓦形	9.4	5.1	3.8	—	外) 灰白25GY8/1 断) 白	外) 山水文 (高台外) 圖線 (口縁内) 二重輪縫 見込み 植物・木 に岩		肥前系
66	瓦瀬3	青磁 染付	中輪 丸形	5.8	6.4	4.2	—	外) 灰青灰10GY8/1 断) 白	外) 青磁釉 (口縁外) 西方博 見込み 二重輪縫 施土・手書きによる 五瓣花		肥前系 18世紀後半
67	瓦瀬3	磁器 染付	大輪 丸形	15.2	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 菊・花・延 (口縁内) 四方博		肥前系
68	瓦瀬3	磁器 染付	大輪 丸形	16.0	7.4	5.8	—	外) 白 断) 白	外) 竹 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 四方博 見込み 二重輪縫 花文		肥前系 18世紀
69	瓦瀬3	磁器 染付	碗	—	—	5.6	—	外) 白 断) 白	外) 茶柄 (高台外) 二重輪縫 見込み 十字花文	外側は暗青色。	肥前系
70	瓦瀬3	磁器 染付	小輪 広東形	8.6	4.1	3.2	—	外) 灰白75Y8/1 断) 灰白NS/	外) 番手 (高台外) 二重輪縫 (口縁内) 二重輪縫 見込み 芳字	外側は暗青色。透明釉は白濁する。	肥前系又は肥前系
71	瓦瀬3	磁器 染付	小輪 半球形	8.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 山水文		肥前系 18世紀
72	瓦瀬3	磁器 染付	小輪 丸形	7.0	3.5	2.6	—	外) 白 断) 白	外) 菊文		肥前系
73	瓦瀬3	磁器 染付	小輪 浅半球形	6.8	3.2	2.2	—	外) 白 断) 白	外) 草花文・菊		肥前系

Tab.3 遺物観察表(陶器・土器)

器版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・釉薬等)	備考(生産地・生産年代・鉱・使用痕・他)	
				L径	器高	底径					
74	瓦瀬3	磁器 束付	五寸瓶	—	—	9.6	—	外)灰白5GY8/1 内)灰白N8/1	外)透明白草文 内)山水文	蛇の目凹型高台。負痕は暗緑灰色。	肥前系
75	瓦瀬3	陶胎 束付	五寸瓶	13.2	—	—	—	外)灰白10Y8/1 内)灰白75Y8/1	外)宝文 内)松・竹	負痕は暗緑灰色。	鹿戸・美濃系か
76	瓦瀬3	白磁	小壺	—	—	4.6	—	外)灰白5GY8/1 内)白	内)型による割弁	型打成形。	肥前系か
77	瓦瀬3	白磁	小壺 花形	7.8	—	—	—	外)男青灰5B7/1 内)白	白磁釉	型打成形。白磁釉は明青灰色を帯びる。	肥前系
78	瓦瀬3	白磁	壺又は鉢	—	—	—	—	外)白 内)白	内)隆起による花 外)白	隆起打成形。	肥前系
79	瓦瀬3	白磁 束付	壺物	笠部 径8.4	2.1	綻み 径3.0	かえり 径7.5	外)白 内)白	外)窓に草花文 四方彌・唐草文	内)花瓶種。かえり窓は長 窓。草花文は上縁付け(断継)。 四方彌と草花は赤絵の見で描き分けた。	肥前系
80	瓦瀬3	磁器 束付	壺物	6.5	3.5	3.6	—	外)白 内)白	外)鳥・植物・圓線	内)圓施釉。八脚形飾。	肥前系
81	瓦瀬3	白磁	不規	5.6	2.5	4.0	—	外)白 内)白	型打し成形。外邊にチザレ目。内 面施釉ナダ。外底無釉。		
82	瓦瀬3	陶器	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外)灰黄5Y7/3 内)灰黄5Y8/2	灰釉	灰黄色を帯びる半透明の釉で 1mm前後の質人が入る。	尾戸窯
83	瓦瀬3	陶器	中碗	10.8	—	—	—	外)灰白5Y7/2 内)灰白25Y7/1	灰釉	灰黄リーブ色を帯びる半透明の 釉で0.5~1mm人の質人が入る。	尾戸窯
84	瓦瀬3	陶器	中碗 端反形	11.0	—	—	—	外)灰白25Y7/2 内)灰白5Y7/2	灰釉(白土に よる花弁は 白土、枝は灰緑で 葉)	灰黄リーブ色を帯びる半透明の 釉で1mm前後の質人が入る。	尾戸窯
85	瓦瀬3	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外)灰白75Y7/1 内)灰白5Y8/1	灰釉	内)表面ロクロ目。外面下位に瘤状 がかかる。蓋付外側面ナダ。高台無釉。 灰白色を帯び半透明の 釉で1mm前後の質人が入る。	尾戸窯
86	瓦瀬3	陶器	碗か	—	—	5.4	—	外)にい黄褐 10YR4/3 内)灰白25Y7/1	鐵釉	蓋付内側面にナダ。高台内に瘤状 の瘤状。高台無釉。鐵釉はにい い黄褐色で、部分的に黒褐色で 発色する。	尾戸窯
87	瓦瀬3	陶胎 束付	中碗	11.0	—	—	—	外)灰白5Y8/1 内)にい黄褐 10YR7/2	外)唐草か 口縁内)圓線	外側に白化粧土施釉の後、共須 絵、透明釉。	潮戸・美濃系
88	瓦瀬3	陶器	中碗 丸形	12.4	—	—	—	外)灰白5Y8/1 内)灰白5Y8/2	灰釉	灰釉は白済	
89	瓦瀬3	陶器	小碗 端反形	9.8	5.0	3.2	—	外)灰白75Y7/2 内)灰白5Y8/1	灰釉・綠釉	口縁部内外面に綠釉を掛け掛け。	信楽か 高台内に墨済。
90	瓦瀬3	陶器	小碗 半球形	8.2	4.5	2.2	—	外)灰白5Y7/2 内)灰白5Y8/1	灰釉 外)鉄錆による暗 化した為	外側墨吸やかなロクロ目。蓋付外側 を小さく圆取る。高台無釉。灰 黄色を帯びる半透明の釉で1mm 前後の質人が入る。	京都系
91	瓦瀬3	陶器	擂鉢	39.6	—	—	—	外)にい赤褐 25YR4/3 内)にい赤褐 25YR5/4	焼締め	外)圓軸ケズリ・圓軸ナダ。内面 凹凸面ナダ。	
92	瓦瀬3	陶器	擂鉢	—	—	15.6	—	外)赤I0R5/6 内)赤I0R5/6	焼締め	外)圓軸ナダ。内面凹凸 にサールマーク状の跡目。	尾戸窯
93	瓦瀬3	陶器	擂鉢	—	—	18.0	—	外)灰白25YR5/6 内)赤褐25YR5/6	焼締め	内面凹凸・内底に放射状の跡の裡目。 外)赤ヨコナタ。外底に凹凸。	押・明石系
94	瓦瀬3	陶器	網	21.6	11.3	6.3	—	外)灰白5YR4/3 内)灰白5Y4/2	灰釉	外)下半ケズリ後ナダ。外底を曲 線的に削り出す。外底に乱れた 溝の跡底。内底に目薬足。	尾戸窯か
95	瓦瀬3	陶器	鍋	21.0	—	—	—	外)墨褐75YR3/3 内)灰白10YR7/1	鐵釉	内面ロクロ目。把手を貼付。	尾戸窯又は舞子 山窯
96	瓦瀬3	陶器	总塗	55	9.6	6.2	127	外)灰オリーブ5Y6/2 内)灰白5Y7/1	灰釉	把手を貼付。外底上部には多段の 強いロクロ目を基す。内面ロ クロ目。灰オリーブ色を帯びる 透明の釉で2mm前後の質人が入 る。	
97	瓦瀬3	陶器	土瓶	6.8	—	—	20.0	外)灰オリーブ5Y6/2 内)灰白75Y7/1	灰釉	体部側面に白土を巻上げるよ うに花文を描き、イッチャン模き を加える。内面と口縁端部無釉。	
98	瓦瀬3	陶器	土瓶	5.0	—	—	124	外)墨褐25Y7/1 内)灰白K25Y6/1	鐵釉	外)下平ケズリ後ナダ等ナダ。内 面墨吸。口縁端部と外底下半無 釉。鐵釉は黒褐色。	
99	瓦瀬3	陶器	土瓶兼	笠部 径6.8	2.6	4.6	楠木 径2.0	外)灰褐75YR4/2 内)灰白25Y7/1	鐵釉	楠木は花形。外側無釉。鐵釉は にい褐色に発色。	
100	瓦瀬3	陶器	甕	23.6	—	—	—	外)墨褐10YR3/1 内)灰白10YR3/1	内)灰釉 外)灰釉	外底に黒褐色の釉。肩部に黒色 の縞を流し掛ける。	丹波系

Tab.4 遺物観察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法面(cm)				色調	文様・無文・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	備考(生産地、 生産年代、鉢 使用痕、他)
				口径	高さ	底径	最大 径				
101	瓦窯3	陶器	壺	—	—	13.0	21.0	外)にぶい赤褐 SYR4/3 内)灰白N8/	鉄輪	内面クロロ片。鉄輪はにぶい赤褐色。肩部から黒色の釉を流し掛け。内面施釉。	関西系
102	瓦窯3	陶器	不明	20.0	—	—	—	外)暗褐10YR3/4 内)貴灰2.5YR6/1	鉄輪	腹部外部に丸窓による施釉を差します。墨褐色の半透明の釉で、厚く掛かる部分は青白色に発色。	施茶山窯か
103	瓦窯3	陶器	不明	—	—	12.8	—	外)褐7.5Y4/3 内)灰白2.5YB8/2	鉄輪	内面クロロ片。外腹にナデ。内底に灰白色の砂目。	底部中央に径2cmの円窓を挿す。椎木軸に転用。
104	瓦窯3	陶器	蓋物壺	笠形 径10.8	—	—	—	外)浅黄25Y7/3 内)灰白2.5YB8/3	灰釉・白土による菊花	内面施釉。かえり無釉。	尾戸窯又は京都系
105	瓦窯3	陶器	火入れ	10.0	7.9	10.2	—	外)灰白7.5Y7/1 内)灰白5Y6/1	白化粧土・灰釉	内面無釉。外腹に白化粧土施釉の後、灰釉施す。灰釉は透明で、根深い質入がある。	口縁部に轟打痕。
106	瓦窯3	陶器	灯明受皿	10.4	2.5	4.2	—	外)灰白6Y7/2 内)灰白2.5Y7/1	灰釉内)菊花・唇 目	内面に壓押による菊花を貼付。外腹下平凹切ケズ。内底に目皿3足。	口縫部外面に焼と灯芯痕。
107	瓦窯3	陶器	鳥の 水入れ	8.0	3.0	—	—	外)灰青25Y7/2 内)灰青25Y7/2	灰釉	小判形。たたら成形。把手は粘付。外底直線刃向のナデ。外底口縁部施釉。	名屋窯又は施茶山窯
108	瓦窯3	土師質 土器	焼拂	32.4	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲母の粗砂。赤褐色化粧を含む。	口縁部外面と背面回転ナデ。外底砂目凹出。外底に石英・長石の粗砂が付着。	関西系
109	瓦窯3	施釉 土器	ミニチュア 片口	3.6	1.6	1.6	—	外)灰白2.5Y8/2 内)灰白2.5Y8/2	緑色の低火度釉	壓押し成形。内面施釉。外腹無釉。	
110	瓦窯3	土師質 土器	焼拂 蓋裏	径8.0	厚さ 1.4	—	—	外)にぶい橙5YR6/4 内)にぶい橙5YR6/4	石英・長石・チャート(灰) ト(灰)の粗砂を含む。	上面ナデ。下面布目。側面ヨコナデ。	
111	瓦窯3	土師質 土器	焼拂	20.0	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲母・チャート(灰色) の粗砂を含む。	粘土絞横み上げ成形。前方に口縁部から切り落し窓をもつ。手捏ねによる急な突起を貼付。外腹ナデ、内面ユビカサエ、ナデ。	関西系 口縫部に窓と黒色の渦み。
112	瓦窯3	土師質 土器	焼拂	22.0	—	—	—	外)にぶい橙10YR7/3 内)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・チャート(灰) の粗砂を含む。	粘土絞横み上げ成形。前方に口縁部から切り落し窓をもつ。側面に径1.1cmの円孔。手捏ねによる内部突起を貼付。外腹ナデ、内面ユビカサエ、ナデ。	関西系
113	瓦窯3	土師質 土器	焼拂	—	—	—	—	外)橙5YR6/6 内)橙5YR7/6	石英・長石・灰黒色の粗砂を含む。	内底に圓弧方向のナデ、外底ナデ。	外底に磨擦。
114	瓦窯3	土師質 土器	焼拂 筒形	—	—	28.5	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	赤彩 石英・長石・金雲母・チャート(灰)	粘土絞横み上げ成形。前方に口縫部下側の受け台削離し浮合部に埋没が残る。前面下位に花弁状の通かしをもつ。外底に施釉台を貼付。外腹ヨコナデ、内面圓滑ナデ、外底に凹内、外底圓棘に回転ナデ。	関内系
115	瓦窯3	土師質 土器	焼拂 きな	径12.6	厚さ 1.4	—	穿孔径 1.5	外)にぶい黄橙 10YR7/3 内)にぶい黄橙 10YR7/3	—	円孔径1.5cm。上面ナデ、下腹ナデ。	
116	瓦窯3	土師質 土器	焼拂 さな	径11.8	厚さ 1.2	—	穿孔径 1.5	外)にぶい黄橙 10YR7/3 内)にぶい黄橙 10YR7/3	—	円孔径1.5cm。上面と下腹ナデ。下面は糸切り表が一筋死する。側面圓軸ナデ。	
117	瓦窯3	瓦質 土器	焼拂 箱形	—	—	—	—	外)灰黄2.5Y1/4 内)にぶい黄橙 10YR6/3	石英・長石・漂母・チャートの粗砂を含む。	側面に松等を形取った把手を貼付。内腹ナデ。	
118	瓦窯3	瓦質 土器	焼拂 箱形	—	—	—	—	外)黑褐2.5YR3/1 内)にぶい橙10YR7/4	—	たら成形。前方に四角形の窓をもつ。窓の外は側面と浮合部に櫻目が残る。底部の四隅に脚を貼付。外腹不定方向のナデ、内腹ナデ。	
119	瓦窯4	磁器 染付	半磁 丸形	14.4	6.7	6.0	—	外)白 内)白	外)草花文 (口縫内)四瓣 見込み)草花文 ・二重瓣		肥前窯
120	瓦窯4	磁器 染付	中碗 丸形	14.6	—	—	—	外)白 内)白	外)草花文 (口縫内)奇練に芭 舞・花・扭 (口縫内)四方 瓣見込み)舞・二重 瓣		肥前窯
121	瓦窯4	磁器 染付	大碗 丸形	15.2	7.1	5.8	—	外)白 内)白	—		肥前窯
122	瓦窯4	磁器 染付	中碗 広口形	11.4	6.1	6.2	—	外)灰白N8/ 内)白	外)花唐草文 (口縫内)二重瓣 見込み)笠文・團扇	内底凸状。	肥前窯 1780年～幕末

Tab.5 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉薬等)	備考(生産地、 生産年代・期、 使用痕)
				口径	器高	底径	最大 径				
133	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	11.0	6.5	5.6	—	外) 灰白2SGY8/1 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重團継 口縁内) 二重團継 見込み) 寿字	輪幅は青灰色。透明釉は貫入がある。	肥前系
134	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	11.8	6.1	6.6	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 口縁内) 带線に植物 見込み) 岩波・團継		肥前產
135	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	11.4	6.5	5.6	—	外) 灰白5YG8/1 断) 白	外) 御 口縁内) 二重團継 見込み) 断化した 不規則・擦か	粧直は淡い青灰色。	肥前系
136	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	12.8	6.7	6.4	—	外) 白 断) 白	外) 山水文	内底に目盛3足。	肥前系 1780年代～幕末
137	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	12.0	7.2	6.0	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重團継 口縁内) 二重團継 見込み) 不明・簡継		肥前產又は肥前 系 1780年代～幕末
138	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	—	—	6.4	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	外) 不明 高台外) 二重團継 見込み) 團継		肥前產又は肥前 系
139	瓦瀬4	磁器 染付	中碗	—	—	4.4	—	外) 灰白75Y8/1 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重團継 口縁内) 多重團継 か 見込み) 草花文	粧直は青灰色。透明釉は白濁する。	肥前系
140	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	11.8	5.3	4.6	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N7/ 外) 白	外) 不明 口縁内) 不明 見込み) コンニャ ク印跡による五介 花・二重團継	見込み蛇の目割剥ぎ。釉剥ぎ部 に砂が付着。粧直は暗オリーブ 色に劣化。	肥前產
141	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 広東形	9.2	5.3	4.8	—	外) 灰白75Y8/1 断) 白	外) 草花文 口縁内) 團継 見込み) 不明・二 重團継	焼成不良で透明釉は白濁。	肥前產
142	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.8	5.2	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 花文 高台外) 二重團継 口縁内) 二重團継 見込み) 草文・二 重團継		
143	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.8	5.2	3.2	—	外) 白 断) 白	外) 黒文文・帝継・ 團継 高台外) 二重團継 口縁内) 帝継・團継 見込み) 不明・二 重團継		國J・美濃產
144	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.8	5.2	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 高台外) 團継 口縁内) 菊瓣・團 継 見込み) 草花文・ 二重團継		窓戸・美濃產
145	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.4	4.7	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 八卦 口縁内外) 帯雍・ 墨揮きによる如意 頭文・團継 高台外) 團継 見込み) 岩波・二 重團継 高台外) 跖		窓戸・美濃產
146	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.8	5.0	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 網目文 口縁内) 帯雍文 見込み) 不明・團継		窓戸・美濃產
147	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.8	5.2	3.6	—	外) 白 断) 白	外) 波 口縁内外) 帯雍に 墨揮きによる如意 頭文 高台外) 團継 見込み) 乳釣 脚・團継		窓戸・美濃產
148	瓦瀬4	磁器 染付	中碗 端反形	9.0	4.6	2.6	—	外) 白 断) 白	外) 蝶虫・花唐草 高台外) 二重團継 口縁内) 帯雍・團 継 見込み) 草花文・ 二重團継		窓戸・美濃產

Tab.6 遺物賛察表（陶磁器・土器）

固版 番号	出土 地点	種類	法薬 (cm)				色調	文様・釉彩・胎土	特徴 (成形・調製・釉調等)	備考 (生産地・ 生産年代・路 由・使用痕・他)	
			器形 断面	口径	高さ	底径					
149	瓦瀬4	磁器 染付	小瓶 丸形	8.4	5.2	3.8	—	外) 白 内) 白	外) 人物・竹 口縁内) 二重團綱 見込み) 手描き 上) 五瓣花・團綱	内) 磁は青灰色。透明釉は黄入が 入る。	肥前系
150	瓦瀬4	磁器 染付	小瓶 楕円形	8.4	5.0	3.4	—	外) 灰白NB/ 白	外) 灰 口縁内) 二重團綱 見込み) 草花文・ 團綱		肥前系
151	瓦瀬4	磁器 染付	小瓶 楕円形	7.4	4.1	3.4	—	外) 灰白2.5GY8/1 白	外) 花卉文 口縁内) 紫羅 見込み) 花文・二 重團綱		肥戸・美濃屋
152	瓦瀬4	白磁	小瓶 楕円形	8.6	5.0	3.6	—	外) 灰白5GY8/1 白	外) 堂手・花卉	白磁釉は明緑灰色を帯びる。	
153	瓦瀬4	磁器 色絵	小瓶 楕円形	—	—	3.8	—	外) 灰白5GY8/1 白	外) 上輪付(赤・ 黒・その他の渦 線)による草花文		肥西系
154	瓦瀬4	磁器 染付	海舟透杯 楕円形	6.0	2.9	3.2	—	外) 白 内) 白	内) 花文		肥前系
155	瓦瀬4	磁器 色絵	小杯 丸形	6.8	3.5	2.8	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 白	外) 上絞付(赤・ 緑)による花卉・ 團綱	内) 磁は明緑灰色を帯びる。	
156	瓦瀬4	磁器 染付	小杯	7.0	3.7	2.4	—	外) 白 内) 白	外) 山水文か 山文	内) 磁は青灰色。	肥前系
157	瓦瀬4	磁器 染付	小杯 浅鉢形	6.6	3.2	2.0	—	外) 白 内) 白	外) 和歌文		肥前系
158	瓦瀬4	磁器 染付	小杯 丸形	7.2	3.4	2.8	—	外) 白 内) 白	外) 朝日文 高台口) 团綱		肥前系
159	瓦瀬4	磁器 染付	小杯	6.9	3.2	2.6	—	外) 白 内) 白	外) 伝文	外両下位にケズリ痕が残る。染付 に砂が付着。	肥前系
160	瓦瀬4	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.3	2.4	—	外) 灰白7.5Y8/1 白	外) 带文	内) 磁は赤オーリーブ灰、透明釉 は白濁する。	肥前系
161	瓦瀬4	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.0	2.6	—	外) 白 内) 白	外) 伝文		肥前系
162	瓦瀬4	磁器 染付	小杯 丸形	5.2	2.3	1.6	—	外) 白 内) 白	外) 松葉文		肥前系
163	瓦瀬4	磁器 色絵	小杯 丸形	4.8	2.4	1.4	—	外) 灰白10Y8/1 白	外) 上絞付(赤・ 黒・その他の渦 線)による花卉	内) 色絵は墨で輪郭を描く。	肥前系又は肥前 系
164	瓦瀬4	磁器 染付	笠部 径9.8	2.8	納み 径5.2	—	外) 白 内) 白	外) 文 口縁内) 二重團綱 見込み) 純白	廣東形模の蓋		肥前系
165	瓦瀬4	磁器 染付	笠部 径9.6	2.8	納み 径5.4	—	外) 白 内) 白	外) 純 口縁内) 二重團綱 見込み) 純白	廣東形模の蓋。内) 磁は暗青灰色。	肥前系	
166	瓦瀬4	磁器 染付	瓶蓋	笠部 径9.4	3.1	納み 径3.0	—	外) 白 内) 白	外) 青文 瓶内) 純 口縁内) 二重團綱 見込み) 純白		肥戸・美濃屋
167	瓦瀬4	磁器 染付	小皿	9.6	1.9	4.4	—	外) 灰白7.5Y8/1 白	内) 草花文 外) 草花文	内) 磁は暗緑灰色、透明釉は白濁 する。	肥前系
168	瓦瀬4	磁器 染付	小皿 楕円形	11.0	2.5	5.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 内) 灰白NB/	内) 山文 口縁内) 二重團綱	内) 磁は赤オーリーブ灰、透明釉 は白濁する。	肥前系
169	瓦瀬4	磁器 染付	五寸皿	14.4	3.2	9.2	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 内) 白	外) 連枝草文 高台口) 团綱 内) 山文 口縁内) 二重團綱	口縁部玉状形。蛇の目四型高台、 内) 磁は赤オーリーブ色に変色。	肥前系
170	瓦瀬4	磁器 染付	五寸皿	12.8	3.5	8.0	—	外) 灰白2.5GY8/1 内) 灰白NB/	外) 連枝草文 内) 竹 内) 磁は竹	口縁部玉状形。蛇の目四型高台、 内) 磁は赤オーリーブ灰。	肥前系
171	瓦瀬4	磁器 染付	五寸皿	13.8	3.6	9.6	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 内) 白	外) 明緑灰文 内) 山文 口縁内) 二重團綱 内) 灰白NB/	蛇の目四型高台。	肥前系
172	瓦瀬4	磁器 染付	小皿	13.2	3.3	8.0	—	外) 灰白2.5GY8/1 内) 白	外) 純 口縁内) 菊瓣・区 巻内) 山文	口縁部菊瓣形。蛇の目四型高台。	肥前系
173	瓦瀬4	白磁	五寸皿 菊花形	13.8	3.8	8.0	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 内) 白	内) 型による南舟 點打成形。		肥前系
174	瓦瀬4	白磁	瓶小皿 菊花形	8.6	2.0	5.0	—	外) 白7.5Y8/1 内) 白	外) 純 内) 菊瓣文 内) 瓶井と花 内) 五瓣花	内) 磁は白磁又は肥前 系	肥前系又は肥前 系
175	瓦瀬4	磁器 染付	鉢 丸形	14.6	4.5	9.0	—	外) 灰白2.5GY8/1 内) 白	外) 線板工形狀 内) 草花文・手描 内) 五瓣花	内) 磁は白磁。	肥前系

Tab.7 遺物観察表(陶磁器・土器)

國號 番号	出土 地點	種類	器形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	備考(生産地、 生産年代、路、 使用歴、他)
				口径	器高	底径	最大 幅				
176	瓦瀬4	磁器 束付	鉢 八角形	12.2	5.7	6.4	—	外) 白 断) 白	外) 美手 (内) 区直に草・楊 子	…	肥前窯又は肥前系
177	瓦瀬4	磁器 束付	鉢 六角形	14.0	—	—	—	外) 白 断) 白	…	…	肥前窯
178	瓦瀬4	磁器 束付	鉢 爐反形	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 爐 (内) 不明文様 波み	…	肥前系
179	瓦瀬4	磁器 束付	盃物 丸形	10.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 煙・霧輪	…	肥前窯
180	瓦瀬4	磁器 束付	盃物 圓筒形	8.6	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 半菊・調口	内面施釉。口縁部内面無釉。	肥前窯
181	瓦瀬4	磁器 束付	盃物 圓底形	7.2	3.6	3.5	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 (高台付) 二重頭輪	…	…
182	瓦瀬4	磁器 束付	盃物 半筒形	11.8	6.9	7.8	—	外) 白 断) 白	外) 草花・分 (高台付) 二重頭輪	内面施釉。口縁端部と口縁部内 面無釉。	肥前窯
183	瓦瀬4	磁器 束付	煎豆	7.6	3.2	4.2	—	外) 白 断) 白	外) 宝文	内面施釉。口縁端部無釉。	肥前窯
184	瓦瀬4	磁器 束付	蓋物蓋	先部 後 5.2	1.9	横み 後 0.8	かえり 往 3.8	外) 白 断) 白	外) 草花文	内面施釉。かえり無釉。	肥前窯
185	瓦瀬4	磁器 束付	蓋物蓋	笠部 後 8.2	2.4	横み 後 2.2	かえり 往 7.4	外) 白 断) 白	外) 菊目文・四方 博	内面施釉。かえり無釉。	肥前窯
186	瓦瀬4	磁器 束付	水滴 箱形	全長 —	全厚 1.7	全幅 5.4	—	外) 白 断) 白	外) 審判による審 奇文、常の一部を 斜段で仕切り分ける 形	型押し成形底部貼り合せ。上 面の2箇所に円印。内面ユビオサ エ、ユビナダ。外底有目。外底施 釉。側面の1箇所が無釉。	肥前窯
187	瓦瀬4	磁器 束付	蟹皿	—	—	5.4	8.7	外) 灰白GY8/1 断) 白	外) 唐唐草・薔薇 (高台付) 二重頭輪	内面施釉。	肥前窯
188	瓦瀬4	磁器 束付	瓶	—	—	4.8	—	外) 白 断) 白	外) 草葉・松葉	内面無釉。透明釉は白濁する。	肥前系
189	瓦瀬4	磁器 束付	ミニチュア 壺	2.8	2.8	2.2	—	外) 白 断) 白	外) 人物文	内面施釉。呂須は苔色。	…
190	瓦瀬4	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.5	12.0	—	外) 白 断) 白	外) 型による審介	型押し成形。外底下半無釉。	肥前窯
191	瓦瀬4	白磁	紅皿 菊花形	4.4	1.5	1.4	—	外) 白 断) 白	外) 型による審介	型押し成形。外底下半無釉。	肥前窯
192	瓦瀬4	白磁	紅皿 菊花形	4.9	1.6	1.4	—	外) 白 断) 白	外) 型による審介	型押し成形。外底無釉。	肥前窯
193	瓦瀬4	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.3	1.2	—	外) 白 断) 白	外) 型による審介	型押し成形。外底下半無釉。	肥前窯
194	瓦瀬4	白磁	ミニチュア 碗	2.2	1.1	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 剛則による蓮 瓣文	型押し成形。	肥前窯
195	瓦瀬4	磁器 束付	胡鉢小	6.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 蓼葉	内面施釉。	肥前系
196	瓦瀬4	磁器 束付	植木鉢小 薄緑絵形	14.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 (内) 混み	内面下半無釉。	肥前系
197	瓦瀬4	陶器	中瓶 蘭丸形	9.8	6.9	6.0	—	外) 灰白SY7/1 断) 灰白2SY7/1	灰釉	高台内に澗状の施釉。茎付内側に面取り。 高台無釉。	尾戸窯
198	瓦瀬4	陶器	中瓶 蘭丸形	9.6	—	—	—	外) 灰白2SY7/1 断) 灰白2SY7/1	灰釉	外面継ぎかなロコロ目。灰白色を 帯びる半透明の釉。	尾戸窯
199	瓦瀬4	陶器	中瓶 蘭丸形	10.2	—	—	—	外) にじ・黄蜜 10SY7/2 断) 淡黄SY7/3	灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
200	瓦瀬4	陶器	中瓶	12.0	—	—	—	外) 灰白SY7/2 断) 灰白SY7/1	…	灰白色を帯びる半透明の釉で 1mm前後の貫入がある。	尾戸窯
201	瓦瀬4	陶器	中瓶	—	—	5.0	—	外) 灰白SY7/1 断) 灰白2SY7/1	灰釉	高台内に澗状の施釉。茎付外側 にナデ。高台無釉。灰釉を帯 びる半透明の釉で0.5mm前後の 貫入がある。内底に日置3足。	尾戸窯
202	瓦瀬4	陶器	中瓶	—	—	4.4	—	外) 灰白2SY7/1 断) 灰白2SY7/2	灰釉	高台内に澗状の施釉。茎付外側 にナデ。高台無釉。灰釉を帯 びる半透明の釉で0.5mm前後の 貫入がある。	尾戸窯
203	瓦瀬4	陶器	中瓶	—	—	5.0	—	外) 灰白SY7/2 断) 灰白SY7/1	灰釉	内外ロコロ目。高台内に澗状の施 釉。茎付外側にナデ。灰白色を 帯びる半透明の釉。	尾戸窯
204	瓦瀬4	陶器	中瓶	—	—	5.8	—	外) 灰白2SY7/1 断) 灰白2SY7/1	灰釉	高台内に澗状の施釉。茎付外側にナデ。 高台無釉。灰釉は焼成不良気味 で白濁。	尾戸窯
205	瓦瀬4	陶器	中瓶 広東形	12.8	7.0	6.0	—	外) 灰白SY7/2 断) 灰白SY7/1	外) 鉄錆による宝 文(宝珠)	鉄錆を両側面に配する。高台施 釉。灰釉は灰オリーブ色を帯 びる透明の釉で1mm前後の貫入が ある。	尾戸窯 内底に日置。

Tab.8 遺物観察表(陶磁器・土器)

団固 番号	出土 地點	種類	器種 器形	寸法(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調査・釉調等)	備考(生産地、 生産年代、路 使用度、集)	
				L径	器高	底径					
206	瓦瀬4	陶器	中碗	—	—	64	—	外) 灰白25Y8/2 内) 淡黄25Y8/3	灰釉	外底面に乱れた鉢底。内底に 後染の鉢底。蓋付外側にナデ。 高台無釉。底物は焼成不良で部分 的に白済。内底に日痕。	尾戸窯
207	瓦瀬4	陶器	碗又は鉢	—	—	64	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白25Y7/1	灰釉	高台内底凹。蓋付外側にナデ。 灰白色を帯びる半透明の釉で 1mm前後の黄入が入る。内底に 日痕。	尾戸窯
208	瓦瀬4	陶器	小碗 半圓形	—	—	52	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	高台内底凹。蓋付外側に面取 り。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	京都系又は尾戸 窯
209	瓦瀬4	陶器	小碗 腰彫形	88	55	32	—	外) オリーブ黄5Y6/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内底変形。高台内無釉。高 台外側まで無釉。灰オーリーブ 色を帯びる半透明の釉で1mm前後 の黄入が入る。	尾戸窓又は高台内 に蓄着。
210	瓦瀬4	陶器	小碗 逆反形	88	48	32	—	外) 灰白75Y7/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉	高台内平坦。蓋付外側に面取 り。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉で1~2mmの黄入 が入る。	関西系
211	瓦瀬4	陶器	小杯 丸形	48	26	20	—	外) 淡黄25Y7/3 内) 灰白25Y8/2	灰釉	高台無釉。淡黄色を帯びた半透 明の釉で1mm前後の黄入が入 る。	尾戸窓か
212	瓦瀬4	陶器	中皿	202	56	68	—	外) オリーブ黄5Y6/3 内) 灰白5Y7/1	灰釉	口縁部無釉状。高台内平坦。蓋 付外側にナデ。見込みの目物 割ぎ。輪刺ぎ部分に土を撒る。 底物はオーリーブ黄色で、内底の 一部に暗オリーブ色を施し流し 掛ける。	尾戸窯
213	瓦瀬4	陶器	小皿	132	45	50	—	外) 黒褐10YR3/2 内) 黄灰25Y6/1	鉄釉	見込みの目物割ぎ。輪刺ぎ部 に白陶土を撒く。外底に土を撒 く1枚の沈織。高台内先端部。蓋付 外側にナデ。高台無釉。	尾戸窓又は施茶 山窯
214	瓦瀬4	陶器	小皿	—	—	56	—	外) 黑75Y4/3 内) 灰白25Y7/1	鉄釉	見込みの目物割ぎ。高台内平 坦。蓋付外側を取り後手ナ。	尾戸窯
215	瓦瀬4	陶器	鉢	160	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白5Y7/1	灰釉	口縁部花形。灰白色を帯びる 半透明の釉で厚く掛かる部分は 白済する。内底に日痕。	尾戸窓
216	瓦瀬4	陶器	捏鉢	164	97	84	—	外) 扇形灰25Y3/1 内) 黄灰25Y6/1	鉄釉	口縁を内側へ肥厚させ。内外 面に継ぎやかなクロロ目。高台内 平坦。蓋付外側に面取り。内底に 日痕と足。	
217	瓦瀬4	陶器	片口	162	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 黄5Y6/1	灰釉	内面施釉。端部無釉。灰白色の 内底したれ。	
218	瓦瀬4	陶器	捏鉢	—	—	—	—	外) にい黄26 内) 黄25YR4/2	焼結め	上縁部外側に凹成。外面ケズり、 内面削れ。	關前
219	瓦瀬4	陶器	行平か	194	114	76	—	外) にい黄26 内) 10YR6/3 にい黄25YR7/2	灰釉	外面に燒結やかなクロロ目。三足 を貼付。外底無釉。にい黄26 色を帯びる透明の釉で1mm前後 の黄入が入る。	
220	瓦瀬4	陶器	行平	166	—	—	—	外) 烧結耐熱5YR3/3 内) にい黄SYR7/4	鉄釉 外) 飛鉢	外面に燒結やかなクロロ目。底部に 3足を貼付。外底ケズり。灰白色 を帯びた半透明の釉で1mm前後 の黄入が入る。内底に日痕4足。	露茶山窯か
221	瓦瀬4	陶器	鍋	204	86	78	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	内面に継ぎやかなクロロ目。底部に 3足を貼付。外底ケズり。灰白色 を帯びた半透明の釉で1mm前後 の黄入が入る。内底に日痕4足。	外底に焼。
222	瓦瀬4	陶器	笠部 佳	4.4	横み 径	4.7	—	外) にい黄26 内) 10YR7/3 にい黄25Y7/4	灰釉 外) 上位に多条の 沈織	内面施釉。端部無釉。にい黄 色を帯びる半透明の釉。	
223	瓦瀬4	陶器	土瓶	64	117	72	18.1	外) 淡黄25Y8/3 内) にい黄25YR7/4	外) 白化粧土後灰 胎 上位に綠施釉 内) 透明の釉	三足を貼付。内底にクロロ目。外 面と外底に白化粧土。口縁部と 内底に施釉物。灰釉は淡黄色を 帯びる透明の釉。	
224	瓦瀬4	陶器	土瓶	80	—	—	20.0	外) 黑褐10YR4/2 内) 黑褐10YR8/4	外) 上位に胎(燒 成不良で白濁)を 沈し剥け	内面クロロ目。内底と口縁部施 釉。灰釉は黒褐色に発色。	
225	瓦瀬4	陶器	土瓶	88	—	—	—	外) 黑褐10YR3/1 内) 黄灰25Y7/2	外) 黑褐10YR2/2 内) 黄灰25Y6/1	外底ケズり。外底無釉。黒褐色の 釉。	尾戸窓又は施茶 山窯
226	瓦瀬4	陶器	土瓶	15	横み 径	12	—	外) 黑褐10YR2/2 内) 黄灰25Y6/1	鉄釉	外底ケズり。外底無釉。黒褐色の 釉。	尾戸窓又は施茶 山窯
227	瓦瀬4	陶器	土瓶	32	横み 径	24	74	外) 削25YR3/3 内) にい黄25Y7/2 内) 10YR7/2	鉄釉	内面施釉。かえり無釉。暗褐色 の釉。	

Tab.9 遺物観察表(陶磁器・土器)

団版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施釉・胎土	特徴(成形・調整・施調等)	備考(生産地、生産年代・期、使用痕)	
				口径	器高	底径					
228	瓦瀬4	陶器	土瓶	—	—	48	122	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	外) 白化無土施釉後、灰釉 (内) 灰釉	三足を付。内面クロロ目。内面施釉。灰釉は灰オリーブ色を帯びる。	
229	瓦瀬4	陶器	土瓶	9.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y6/1	外) 灰釉 (内) 上半に多条の細線	内面クロロ目。内面上半と口縁端部無釉。	
230	瓦瀬4	陶器	土瓶 陽光形	6.8	—	—	16.0	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 内) 灰白2Y5Y7/1	外) 灰釉・白土のイッチャン様きによる草木文 (内) 鉄釉	内面土手無釉。内面下位に灰釉。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で黄入が入る。	
231	瓦瀬4	陶器	泡利人形柄利	—	—	—	—	外) 伝い窓75YR5/4 明治窓25YR5/6	鉄輪	鉄輪を付せ。頂にによる袋袋を貼付。外側に伝い窓のクロロ目。	備前
232	瓦瀬4	陶器	瓶	—	—	10.4	—	外) 灰白2G5Y7/1 内) 灰白2Y5Y7/1	白化無土施釉後、灰釉	高台内平底。内面下手無釉。	
233	瓦瀬4	陶器	甕	18.6	—	—	—	外) 灰75YR4/3 内) 灰白5Y7/1	鉄輪	口縁部玉筋状。褐色の釉。肩部から黒色の釉を撒いて掛けた。	関西系
234	瓦瀬4	陶器	甕又は甕	—	—	11.8	—	外) 灰75YR4/4 内) 灰白2Y5Y7/1	鉄輪	内面裏にクロロ目。高台内平底。甕又は甕側にナギ。内面下位施釉。黒無釉。	関西系又は尾戸 黒無釉。
235	瓦瀬4	陶器	小瓶	2.4	9.5	5.2	9.4	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1	灰釉	内面裏にクロロ目。受け側の両側に面取り。内面無釉。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窓
236	瓦瀬4	陶器	小甕	5.6	—	—	7.9	外) 番窓10YR3/4 内) 灰白25Y7/1	鉄輪	内面施釉。口縁端部無釉。暗褐色の釉。	
237	瓦瀬4	陶器	甕	—	—	4.8	8.0	外) 番窓10YR3/1 内) 伝い窓75YR5/4	鉄輪	内面クロロ目。内面と外底無釉。黒無釉。	
238	瓦瀬4	陶器	瓶頸か	—	—	5.6	—	外) 灰75Y4/3 内) 黄灰25YS5/1	鉄輪	内面クロロ目。内面施釉。褐色の釉。内底に皮膚足。外底の下箇所にサボ子状の糸跡。	尾戸窓又は龍茶 山窓
239	瓦瀬4	陶器	瓶	—	—	7.0	—	外) 番赤垂25YR3/2 内) 黄灰10YR6/1	鉄輪	内面クロロ目。暗赤褐色の釉。内面無釉。	
240	瓦瀬4	陶器	甕物 菊花形	9.8	3.1	5.4	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/2	外) 灰釉 (外) 型による肩付	型厚・成形・ペタ底。内面ニジナダ、外底ナダ。内底と外底無釉。灰白釉を帯びる半透明の釉で0.5~1mmの大入が入る。	尾戸窓か
241	瓦瀬4	陶器	甕物	7.4	5.2	4.4	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 伝い窓黄青10YR7/3	灰釉	内底に付いた斑状の鹿皮。亞付外底ナダ。暗赤無釉。端部と口縁部に面施釉。	尾戸窓
242	瓦瀬4	陶器	甕物 半筒形	8.0	—	—	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉	内面施釉。口縁端部無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の大入が入る。	尾戸窓又は京都系
243	瓦瀬4	陶器	中綴又は 蓋物	—	—	6.0	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉	内面クロロ目。高台内平底。蓋付外縁に面取り。内面施釉。高台無釉。内底に日焼3足。	尾戸窓
244	瓦瀬4	陶器	甕物	7.8	4.1	4.6	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉	口縁端部無釉。内面施釉。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1~2mmの大入が入る。	関西系
245	瓦瀬4	陶器	不明	—	—	7.8	—	外) 灰白25GY7/1 内) 灰白N8/	外) 灰釉 (外) 兵役による支撑	内面クロロ目。蓋付両面に面取り。内面施釉。高台無釉。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で2mm前後の大入が入る。内底に目焼4足。	
246	瓦瀬4	陶器	火鉢	—	—	18.4	—	外) 灰オリーブ 7.5Y5/3 内) 灰白5Y8/1	輪部外) 丸彫りによる輪 (外) 口縁内) 鉄輪 (内) 施錆刷毛塗り	輪部は灰オリーブ色に褐色。鉄輪	戸・美濃産
247	瓦瀬4	陶器	火鉢	—	—	22.8	—	外) 番 内) 灰白25Y8/1	頭部外) 丸彫りによる輪 (外) 口縁内) 緑輪	頭部の釉色の釉。	戸・美濃産
248	瓦瀬4	陶器	火鉢か	18.4	—	—	—	外) 灰白5Y8/2 内) 灰白5Y8/1	火鉢	灰白色を帯びる透明の釉。	戸・美濃産
249	瓦瀬4	陶器	火鉢	—	—	14.2	—	外) 灰75YR4/3 内) 灰白25Y7/1	高台外) 背割によ る蓄水帯 (外) 緑輪 (内) 鉄錆刷毛塗り	外底に貫通しない円孔2大。外底無釉。	戸・美濃産
250	瓦瀬4	陶器	火鉢	—	—	17.0	27.4	外) 淡黄5Y8/3 内) 灰白5Y8/1	火鉢 外) 丸彫りによる 腰筋、淡青色の輪 流し、擦け (内) 武鉄刷毛塗り 高台外) 腹割によ る蓄水帯 (外) 緑輪 (内) 鉄錆刷毛塗り	外底の一部に繊維。外底に円形の三足を付。外底に貫通しない円孔。	戸・美濃産
251	瓦瀬4	陶器	火鉢	—	—	14.8	—	外) オリーブ5Y5/4 内) 灰白25Y8/1	外底に貫通しない円孔。外底無釉。内底に灰白色の砂目。	戸・美濃産	
252	瓦瀬4	陶器	涅槃	7.6	—	13.6	20.0	外) 番窓25Y3/1 内) 灰白N7/	上部に粗手。外底施釉。内底無釉。		

Tab.10 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉病等)	備考(半蔵地、 生産年代、鉢、 使用痕、他)
				口径	器高	底深	最大径				
253	瓦瀬4	陶器	灯明 受皿	11.2	2.5	4.0	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉 翫目	外面と内底面軋ケズリ。外底無輪。オリーブ葉色を帯びる透明の釉。内底に呑底3足。	西系
254	瓦瀬4	陶器	灯明 受皿	11.4	2.4	4.1	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 灰白25Y7/1	灰釉 翫目・菊花	内面に型による菊花を貼付。外底下半と外底面軋ケズリ。外底無輪。灰黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入がある。	京都系 口縁部外面に灯芯油滴。
255	瓦瀬4	陶器	灯明 受皿	11.8	2.4	2.8	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉 内) 型による菊花	内面に型による菊花を貼付。外底下半と外底面軋ケズリ。内底に呑底。	京都系 口縁部外面にタール状の油斑。
256	瓦瀬4	陶器	灯明 受皿	7.8	1.8	4.2	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	底溝半透。外面部回転ケズリ。外底面軋ケズリ。かえり輪無輪。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入がある。	西系
257	瓦瀬4	陶器	不明	—	—	17.8	—	外) 鐵5Y7/4R4/1 内) 黄灰25Z6/1	鐵釉 丸彫りによる 縮詰を基らす	内面クロロカ。豊外輪に面取り後ナ。内面に鉄斑。	尾戸窓か
258	瓦瀬4	陶器	楕木鉢	17.0	—	—	—	外) 緑 内) 灰白25Y8/1	外) 緑 内) 陶器絞織	内面無釉。	窓戸・淡糞座
259	瓦瀬4	陶器	鉢鉢	7.2	4.8	6.0	—	外) 浅黄5Y7/3 内) 灰白25Y8/2	灰釉	把手を貼付。外底無輪。浅茶色を帯びる透明の釉で1~2mmの大貫入がある。	
260	瓦瀬4	陶器	鉢鉢	3.8	2.3	3.4	—	外) 浅黄25Y7/3 内) 不明	灰釉	外底面軋ケズリ。外底無輪。浅黄色を帯びる半透明の釉で貫入がある。	
261	瓦瀬4	陶器	鳥の 入れ	—	2.7	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1	灰釉	外底ナデ。口縁端部と外底無輪。灰白色を帯びる半透明の釉0.5mm前後の貫入がある。外底面軋ケズリに泥を塗る跡ある。	尾戸窓
262	瓦瀬4	陶器	鳥の 入れ	—	2.6	—	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白25Y7/1	灰釉	楕円形。外底と口縁端部無輪。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窓
263	瓦瀬4	陶器	鳥の 入れ	—	3.0	—	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	楕円形。外底ナデ。外底無輪。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1~2mmの大貫入がある。外底面縁に白泥を塗る跡ある。	尾戸窓か
264	瓦瀬4・5	陶器	不明	—	—	4.0	8.2	外) 鐵5Y7/4R4/3 内) 灰白25Y7/1	鐵釉	前方に楕円形の窓をもつ。クリ底。内面ナデ。付付割れナデ。内面下半と底底部無釉。	尾戸窓
265	瓦瀬4	陶器	不明	—	—	5.0	—	外) 鐵5Y7/4R4/4 内) 灰白25Y7/1	鐵釉	前方に窓をもつ。内面ナデ。外底回転ケズリ。外底無輪。	尾戸窓か
266	瓦瀬4	陶器	不明	—	—	5.0	—	外) 灰青25Y7/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	高台を欠陥する。高台内平坦。内面無釉。内底に呑底。	高台内に墨書き。
267	瓦瀬4	陶器	ミニチュア 鉢	7.2	3.5	3.0	—	SYR4/4 内) 貨25Y6/1	鐵釉	前方に窓をもつ。外底下半と外底ケズリ。	尾戸窓か
268	瓦瀬4	陶器	ミニチュア 鉢	5.6	—	—	—	外) 鐵5Y7/4R4/3 内) 灰白5Y7/1	鐵釉	把手を貼付。	尾戸窓か
269	瓦瀬4	土師質 土器	碗	—	—	3.0	—	外) にせい5Y7R7/4 内) にせい5Y7R7/4	石英・良石、灰色 の細粉を含む。	内面と外底上半回転ナデ。外底下半四輪ケズリ。	内底に焦げ付。
270	瓦瀬4	土師質 土器	小皿	7.2	1.1	5.6	—	外) にせい10YR7/3 内) にせい10YR7/3	石英・良石、赤褐色 の細粉を含む。	外底回転ナデ。外底回転余切 り。	尾戸窓に灯芯油滴。
271	瓦瀬4	土師質 土器	小皿	10.0	1.6	7.0	—	外) にせい5Y7R7/4 内) にせい5Y7R7/4	石英・良石、灰色 の粗粉・細粉を含む。	口縁部内外面回転ナデ。外底下半と外底回転ケズリ。内底不定方向のナデ。	尾戸窓
272	瓦瀬4	土師質 土器	小皿	12.0	1.7	8.8	—	外) にせい5Y7R7/4 内) にせい5Y7R7/4	—	口縁部内外面回転ナデ。外底下半ケズリ後ナデ。外底ナデ。内底不定方向のナデ。	尾戸窓
273	瓦瀬4	土師質 土器	小皿	13.2	2.2	8.6	—	外) 鐵5YR6/6 内) 鐵5YR6/6	石英・良石、灰黒 色の細粉を含む。	尾戸窓に薄い保、内底に黒色の部分み。	
274	瓦瀬4	土師質 土器	小皿	13.0	2.5	9.2	—	外) 鐵5YR6/6 内) 鐵5YR6/6	石英・良石の細粉 を含む。	外面上半回転ナデ。外底下半回 転ケズリ。外底回転ケズリ。内面 回転ナデ。内底不定方向のナデ。	尾戸窓か
275	瓦瀬4	土師質 土器	中皿	17.6	2.7	11.6	—	外) にせい75YR7/4 内) にせい75YR7/4	石英・良石・雲母 の細粉を含む。	外面上半回転ナデ。外底下半回 転ケズリ。外底回転ケズリ。内底 回転ナデ。内底不定方向のナデ。	尾戸窓か
276	瓦瀬4	土師質 土器	中皿	17.8	3.1	11.0	—	外) 鐵5YR7/6 内) 鐵5YR7/6	石英・良石、灰黒 色の細粉を含む。	外面上半回転ナデ。外底下半回 転ケズリ。外底回転ケズリ。内底 回転ナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窓
277	瓦瀬4	土師質 土器	中皿	16.6	3.3	9.6	—	外) 深25YR2/4 内) 深25YR2/4	石英・良石の粗 粉・細粉を含む。	外面上半回転ナデ。外底下半回 転ケズリ後ナデ。外底回転ケズリ。 内底回転ナデ。内底不定方 向のナデ。	尾戸窓
278	瓦瀬4	土師質 土器	中皿	16.8	3.3	10.4	—	外) 深5YR7/6 内) 深5YR7/6	石英・良石、灰黒 色の細粉を含む。	外面上半回転ナデ。外底下半回 転ケズリ後ナデ。外底回転ケズリ。 内底回転ナデ。内底不定方 向のナデ。	尾戸窓 口縁部に焦。内 底に弱い焦げ。

Tab.11 遺物観察表(陶磁器・土器)

閑版 番号	出土 地点	種類	器種 形態	法量(cm)				色調	文様・釉色・胎土	特徴(成形・調整・釉薬等)	備考(生産地、 生産年代、路 使用歴、他)
				口径	器高	底径	最大 径				
279	瓦瀬4	土器質 土器	中壺	160	—	—	—	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・金雲母の粗砂。赤色を含む。	薄手。内外と外面上に旋轉ナデ。外底下に回転ケズ。	外に薄い塗。内底に焦げ。
280	瓦瀬4	土器質 土器	杯	15.2	37	8.8	—	外) に赤い模10YR7/3 内) に赤い模10YR7/3	石英・長石・雲母、灰青色・赤褐色の粗砂を含む。	内外面回転ナデ。外底周縁ナデ。	
281	瓦瀬4	土器質 土器	焼塙壺	径 厚さ	8.1	15	—	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石の粗砂。灰黒色の粗砂、金雲母を含む。	上面ナデ。下面粗い布目。側面ヨコナデ。	関西系
282	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑 厚	7.3	全厚 12	—	外) 橙7.5YR7/6 内) に赤い模7.5YR7/6	石英・長石の粗砂。赤色と半透明の粗砂、金雲母を含む。	上面ナデ。下面凹凸、部分的に目が見える。下部周縁にユビオサエ。エッジを設ける。側面ヨコナデ。	関西系
283	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑 厚	7.9	厚さ 13	—	外) に赤い模7.5YR5/4 内) に赤い模7.5YR5/4	石英・長石、灰黒色の粗砂を含む。	上面ナデ。下面細かい布目。側面ユビオサエ。ナデ。	
284	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑 厚	7.8	全厚 10	—	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・金雲母、灰黒色の粗砂、赤色風化粒を含む。	ト面ナデ、周縁に押圧による段。下部細かい目。周縁に押圧による段。側面ヨコナデ。	関西系
285	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑 厚	7.6	厚さ 12	—	外) 橙7.5YR6/6 内) 橙7.5YR6/6	石英・長石・金雲母、灰黒色半透明の粗砂を含む。	上面ナデ。下面布目。側面ヨコナデ。	関西系 上面に焦げ。
286	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	7.0	7.2	5.4	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・金雲母、ナード(火)の粗砂を含む。	外表面ナデ。内面に粗い布目。外底に粘土塊の貼付痕が明瞭に残る。	関西系
287	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	6.3	7.6	5.0	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・金雲母、灰黒色の粗砂を含む。	上面ナデ。内面粗い布目。外底粗いユビオサエ。	関西系
288	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	6.5	7.7	4.8	外) 橙5YR6/6 内) 橙5YR6/6	石英・長石・チャート(灰)、灰黒色の粗砂を含む。	外表面ナデ。外底ナデ。	
289	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	7.0	7.4	4.4	外) 明赤褐5YR5/6 内) 明赤褐5YR5/6	石英・長石・雲母、灰白色の粗砂を含む。	外表面ユビオサエ・ナデ。外底強いユビオサエ。内面と底面にT字による回転方向のナデ。	
290	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	7.0	7.3	4.4	外) 橙5YR6/6 内) 橙5YR6/6	石英・長石の粗砂。灰白色の円礫を含む。	内外面ナデ。内底ナデ、外底ユビオサエ。	
291	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	8.0	7.3	4.6	外) 橙5YR6/6 内) 橙5YR6/6	石英・長石・チャート(灰)の粗砂を含む。	外面上凹。外底ユビオサエ・ユビナデ。内面と底面に工具による回転力のナデ。	
292	瓦瀬4	土器質 土器	燒塙壺	徑	6.8	7.5	4.2	外) 橙5YR7/6 内) 橙5YR7/6	石英・長石・雲母、チャート(灰)の粗砂を含む。	外表面剥離し調査不明。外底ユビオサエ・ユビナデ。内面と底面に工具による回転方向のナデ。	
293	瓦瀬4	土器質 土器	燒壺	徑	30.0	4.7	—	外) に赤い模7.5YR7/3 内) に赤い模7.5YR7/3	石英・長石、灰色の粗砂を含む。	外外面回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 外底に薄い塗、内底に焦げ。
294	瓦瀬4	土器質 土器	燒壺	徑	31.0	4.2	—	外) に赤い模7.5YR7/4 内) に赤い模7.5YR7/4	石英・長石・金雲母の粗砂を含む。	外外面回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 19世紀内底に漆みと焦げ。
295	瓦瀬4	土器質 土器	燒壺	徑	32.0	—	—	外) に赤い模7.5YR7/4 内) に赤い模7.5YR7/4	石英・長石、灰黒色の粗砂を含む。	口縁部外表面回転ナデ。外底チザレ目。内面回転ナデ。	関西系
296	瓦瀬4	土器質 土器	不明	—	26	—	—	外) 灰白25Y8/1 内) 灰白25Y8/1	石英・長石の粗砂を含む。	把手手。クロコ成形。外面上ロクロ目。縁部附近に径4mmの麻孔あり。	
297	瓦瀬4	瓦質 土器	燒壺	—	19.4	—	—	外) 灰5Y4/1 内) 灰5Y6/1	石英・長石の粗砂を含む。	外面上凸。内面回転ナデ。	
298	瓦瀬4	瓦質 土器	燒壺	—	19.2	—	—	外) 灰75Y4/ 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・チャート(灰)の粗砂を含む。	外面チザレ目・ナデ。内面回転ナデ。	
299	瓦瀬4	土器質 土器	羽釜	—	—	5.0	—	外) 灰白10YR8/2 内) 灰白10YR8/2	石英・長石、金雲母の粗砂を含む。	厚手の底部。外面上半と外底回転ケズ。内面ナデ。	外底に強い塗。
300	瓦瀬4	土器質 土器	火清し鍋	—	11.6	—	—	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	粘土粒積み上げ成形。内面周縁	外底に波を設け、ヘラで縫を描く。外側面イタナデ。外底ユビナデ。内面チザレ目・強いユビナデ。	
301	瓦瀬4	土器質 土器	不明土器 の部品	全長	11.3	全厚 2.5	全幅 6.5	外) に赤い模7.5YR6/4 内) に赤い模7.5YR6/4	石英・長石・金雲母の粗砂を含む。	内面に波ねによる突起を附む。外面ナデ・ミガキ、内面回転ナデ。外面上位に漆み。	
302	瓦瀬4	土器質 土器	焼炉	—	19.0	—	—	外) に赤い模7.5YR7/4 内) に赤い模7.5YR7/4	石英・長石・金雲母の粗砂を含む。		

Tab.12 遺物観察表(陶磁器・土器)

同番 番号	出土 地点	種類	器形	法算(cm)			色調	文様・施釉・胎土	特徴(底形・調整・釉等)	備考(生産代・名、 使用歴・他)	
				口径	器高	底径					
303	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	19.4	—	外) にい黄橙 10YR7/3 断) にい黄橙 10YR7/3	石美・長石・灰黒 色・赤褐色の粗砂 を含む。	前方に円孔の窓。体部外側ナ ダ、内面ヨコナダ。高台を貼付し 山外側回転ナダ。高台前方に円 孔数穴。	
304	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	18.0	—	—	—	外) 檻7SYR6/6 断) 檻7SYR6/6	石美・長石・灰色 の粗砂を含む。	窓は不明。外側ナダ・ミガキ、内 面回転ナダ。側面に径7mmの円 孔数穴。	
305	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	19.0	—	外) にい櫻7SYR6/4 断) にい櫻7SYR6/4	石美・長石・灰黒 色の粗砂・赤色風 化鉄を含む。	側面に円孔あり。体部内外面回 転ナダ。外底に凹凸。高台を貼付 し内面側面回転ナダ。高台に實 造はないけれど。	
306	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	21.0	—	外) にい黄橙 10YR7/3 断) にい黄橙 10YR7/3	石美・長石・青母・ チャート(灰色) の粗砂を含む。	輪高台を貼付。高台前方に径 7mmの穿孔。高台の一部に浅い アーチ状の抉り。高台外側回転 ナダ。外底に凹凸。内底回転 方向のナダ。	
307	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	28.0	—	外) 檻7SYR6/6 断) 檻7SYR6/6	石美・長石・灰黒 色の粗砂を含む。	窓は不明。体部内外面ヨコナダ。 高台を貼付し内面回転ナダ。 高台前方に円孔。	
308	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	20.2	—	外) 明赤褐2SYR5/6 断) にい櫻7SYR7/4	外) 赤彩 石美・長石・青母・ 金星雲母の粗砂、赤 色風化鉄を含む。	体部前方に窓。窓の一部に受け 貼付。高台前方に穿孔に貫通 しない幅5mmの円孔。内面回転 ナダ。	
309	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉 簡形	—	—	—	—	外) 檻5YR6/6 断) 檻5YR6/6	石美・長石・灰色 色・赤色系の粗 砂・小繊維を含む。	側面に断面三角形の窓を貼付 して窓を設ける。外側ナダ・内面 ヨコナダ・整型とともに窓。	
310	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	—	—	外) にい黄橙 10YR7/4 断) にい黄橙 10YR7/4	石美・長石・青母 の粗砂を含む。	断面三角形の窓を内面に貼付。 後合板に回転方向のナダ。外面 チリ目。内面ハケ。	○縫隙付近に焼 跡。
311	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉	—	—	12.0	—	外) 浅櫻7SYR8/4 断) 浅黄櫻7SYR8/4	棘突込み手。 石美・長石の粗 砂・黑色斑を含む。	内面回転ナダ。窓の有無は不 明。復色土と白色土を混ぜ 合わせる。	
312	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉 さな	厚さ 1.3	—	—	—	外) にい黄橙 10YR5/4 断) にい黄橙 10YR5/4	石美・長石・灰黒 色の粗砂を含む。	円孔径1.5cm。下面に凹凸とチデ レ目。側面回転ナダ。	
313	瓦瀬4	土師質 土器	焜炉 さな	厚さ 1.3	—	—	—	外) にい櫻10YR6/3 断) にい黄橙 10YR6/3	石美・長石・灰黒 色の粗砂を含む。	円孔径1.5cm。下面に凹凸とチデ レ目。側面回転ナダ。	
314	瓦瀬4	瓦質 土器	焜炉 箱形	—	—	—	—	外) オーバーフル5Y3/1 断) にい黄橙 10YR6/3	右 美・長石・ チャート(灰色) の粗砂を含む。	前面に四角形の窓をもつ。窓枠 を貼付。底部の4隅に脚を貼付。 外側ナダ・内面ユビオサエ・ハッタ 。	
315	瓦瀬4	瓦質 土器	焜炉 箱形	—	—	—	—	外) オーバーフル5Y3/1 断) にい黄橙 10YR7/3	石 美・長 石・ チャート(灰色) の粗砂を含む。	前面に四角形の窓をもつ。窓枠 を貼付。外側ナダ・内面ユビオサエ・ ハッタ。	
316	瓦瀬4	瓦質 土器	火鉢	28.0	—	—	—	外) 京7SY4/1 断) 京7SY4/1	石美・長石の粗 砂を含む。	外側ミガキ、内面回転ナダ。	
317	瓦瀬4	瓦質 土器	火鉢	30.0	—	—	—	外) 京7SY7/2 断) 京7SY7/2	石美・長石・灰 色の粗砂を含む。	外側ミガキ、内面回転ナダ。	
318	瓦瀬4	土師質 土器	盤 松笠	全長 8.1	全厚 2.3	全幅 4.4	—	外) 浅櫻7SYR8/3 断) 浅黄櫻7SYR8/3	前面に状の松笠様式。前面チデ レ目。外側面取り。		
319	瓦瀬4	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にい黄橙 10YR7/4 断) にい黄橙 10YR7/4	鳥か	製作より下貼り合わせ。中空。 外側ナダ・内面ユビオサエ・ナダ。	
320	瓦瀬4	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にい櫻7SYR7/4 断) にい櫻7SYR7/4	鳥	製作より貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナダ。外側にキララ。	
321	瓦瀬4	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にい黄橙 7SYR7/4 断) にい櫻7SYR7/4	魚	製作より貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナダ。	
322	瓦瀬4	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にい黄橙 10YR7/4 断) にい黄橙 10YR7/4	魚・人物	製作より貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナダ。	
333	TPS 包含層 Ⅱ層	粘器 染付	且	15.6	—	—	—	外) 明緑灰7GY8/1 断) 白	内) 不明 口縁内) 滴	透明釉は明緑灰色を帯びる。 肥前産 17世紀前半	
334	SK1 1層	磁器 染付	中碗 半筒形	—	—	—	—	外) 白灰5GY8/1 断) 白灰NB/	外) 山水文か・二 重巻頭	吳須は暗青灰色	
335	SK1 1層	磁器 染付	中碗	—	—	3.8	—	外) 白灰2SY8/1 断) 白	高台外) 二重巻頭 高台内) 膨腹	焼成不良で透明釉は白濁。	
336	SK1 2層	磁器 染付	碗	—	—	6.4	—	外) 白灰10GY8/1 断) 白灰NB/	内) 寿字 高台外) 二重巻頭 高台内) 膨腹	明緑灰色の釉。	
337	SK1 1層	青磁 又は猪口	碗	10.4	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	青釉地	明緑灰色の釉。	

Tab.13 遺物観察表(陶磁器・土器)

団版 番号	出土 地点	種類	器種 型形	法量(cm)				色調	文様・釉面・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	備考(底塗地、 生産年代・地、 使用歴・他)
				口径	器高	底径	最大 径				
338	SX1 1層	青磁	碗	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 内) 白	青磁釉	明緑灰色の釉。	肥前產
339	SX1 2-2層	青磁	碗口 又は碗	11.4	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 内) 白	明緑灰色の釉。	肥前產	
340	SX1 1層	磁器 束付	直 変形形	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 密文 内) 不明	明緑灰色の釉。	肥前產
341	SX1 1層	磁器 束付	小豆 丸形	12.8	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 内) 白	外) 密草文 内) 番	薄手。	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
342	SX1 1層	磁器 束付	直 又は鉢	15.0	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 草文	—	肥前產
343	SX1 1層	磁器 束付	中直 丸形	16.8	2.7	10.3	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 内) 花・草・水 高台外) 二重圓錐 高台内) 茶・深緑	高台内にハリ文支痕。	肥前產 17世紀後葉～18 世紀前半 二次被熱により 釉は変質。
344	SX1 2-2層	青磁	直 変形形	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 織文	織型打ち成形。内面に明緑灰色の釉、外面に透明の釉。	肥前產
345	SX1 2-2層	青磁	鉢又は直 変形形	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 内) 白	—	明緑灰色の釉。	肥前產
346	SX1 1層	磁器 束付	不明	—	—	6.0	—	外) 白 内) 白	高台外) 二重圓錐	内面無釉。	肥前產
347	SX1 1層	磁器 束付	鉢か —	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 内) 白	外) 織文	内面施釉	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
348	SX1 1層	青磁	不明	9.2	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 内) 白	青磁釉	口縁部内面施釉。明緑灰色の釉。	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
349	TP9 包含層 II層	青磁	直	4.2	—	—	—	外) 緑6.5GY6/1 内) 白	青磁釉	内面クロ目。内面無釉。口縁部に砂が付着。	肥前產
350	SX1 1層	青磁	不明	—	—	—	9.5	外) 明緑灰10GY7/1 内) 白	青磁釉	内面無釉。明緑灰色の釉。	肥前產
351	SX1 1層	磁器 束付	壺	—	—	—	18.7	外) 白 内) 白	壺部外) 織・青文 部内) 織文	内面無釉。口縫部内面まで施釉。	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
352	TP9 包含層 II層	磁器 束付	壺	9.2	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 壺・二重圓錐	内面無釉。口縫部内面まで施釉。 口縫部無釉。	肥前產
353	SX1 2-2層	陶器	純 丸形	10.8	7.1	5.0	—	外) 塗褐10YR3/3 内) ないし黄褐 10YR7/3	褐釉	臺付外側に削り。高台無釉。脚輪は褐色～黒褐色に発色。	肥前產 17世紀前半
354	SX1 2-2層	陶器	純	11.5	—	—	—	外) 黒褐10YR2/3 内) ないし黄褐 10YR7/2	褐釉	底部無釉。黒褐色の釉。	肥前產 17世紀前半
355	SX1 2-2層	陶器	中純	12.0	—	—	—	外) 浅黄25Y7/3 内) 浅黄25Y7/3	灰釉	浅黄色を帯びる半透明の釉。	肥前產 17世紀後葉半～ 18世紀前半
356	SX1 2-2層	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外) にせい実質 10YR6/3 内) にせい實質 10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内兜巾状。 臺付外側に削り。高台無釉。	肥前產 1610～1630年代
357	SX1 2-2層	陶器	小皿	13.6	2.9	4.2	—	外) オリーブ黄SY6/3 内) 灰黄25Y7/2	灰釉	外) 唐津系灰釉陶器。口縫部済溝状。 内底に削。高台内兜巾状。下干無釉。底輪はオリーブ黄色を帯びる。内底と高台に砂目。	肥前產 1610～1630年代
358	SX1 2-2層	陶器	捲体	—	—	—	—	外) 白 内) 黃75YR4/3	—	外) ユビコサエ・附輪ナギ。内面 に削。	産不明
359	SX1 III層	陶器	小瓶	—	—	3.4	—	外) 黒10YR2/1 内) 灰黄25Y7/1	铁釉	内底に裂状のロロ目。外底回転 糸切り。内面未釉。鐵釉は黒色で厚く剥がれる部分は灰白色に発色。	二次被熱により 釉は変質。
360	SX1 2-2層	土器質 土器	小皿	8.6	—	—	—	外) 浅黄25Y8/4 内) 浅黄25Y8/4	—	右美・良石の細 砂、赤色風化粒を 含む。	内外面回転ナギ。
361	SX1 2-2層	土器質 土器	小皿	—	—	—	—	外) にせい黄75YR7/4 内) にせい黄75YR7/4	—	器面は焼純し調整不規。	—

Tab.14 遺物観察表(石製品・金属製品・ガラス製品)

固版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			重量(g) [ ]は残存分	色調	特徴
				全長	全厚	全幅			
33	TP6 瓦瀬1	石製品	箱形	15.1	2.5	6.0	[400.2]	外) 黒オリーブ7SY6/2 内) 黒オリーブ7SY6/2	船板岩製。平面形は長方形。画面に長方形の窓みあり。底部の縫を欠損する。底石に転用し、断面に縞状の擦痕が多数残る。
57	SK6	鉄製品	釘	残存長 3.6	全厚 0.5	全幅 0.7	[1.6]	—	断面四角形。
119	瓦瀬3	鉄製品	釘か	残存長 11.0	全厚 0.6	全幅 0.7	[12.9]	—	頭部を欠損する。断面四角形。
120	瓦瀬3	鉄製品	釘	全長 5.9	全厚 0.9	全幅 0.9	8.2	—	頭部をもつ。断面四角形。
121	瓦瀬3	鉄製品	釘	全長 5.0	全厚 0.5	全幅 0.6	2.8	—	頭部をもつ。断面四角形。
122	瓦瀬3	鉄製品	釘	全長 4.1	全厚 0.6	全幅 0.7	2.0	—	頭部をもつ。断面四角形。
323	瓦瀬4	石製品	範形	残存長 8.4	全厚2.6	全幅 6.7	[244.6]	外) にい黄10YR7/2 内) 黄白25Y8/1	底部を欠損する。底部は使用により錆む。厚が薄く付着する。
324	瓦瀬4	銅製品	煙管 瓶口	全長 9.8	ラウンド合部 径 0.4	吸口 径 1.0	10.5	—	颈部は長く、口付部に向かって鍍やかに細くなる。ラウドが残存する。
325	瓦瀬4	銅製品	不明	残存長 6.5	全厚 0.08	全幅 4.2	[7.3]	—	薄い板状。両側に穿孔あり。
326	瓦瀬4	ガラス 製品	管	全長 6.0	全厚 0.2	全幅 0.4	[1.0]	外) 無色透明 内) 無色透明	断面は扁平な構造。先端部は丸みをもつ。
327	瓦瀬4	ガラス 製品	管か	残存長 3.6	全厚 0.3	全幅 0.6	[1.7]	外) 明緑灰75GY8/1	淡緑色を帯びる透明のガラス。断面は扁平な円形。

Tab.15 遺物観察表(瓦)

固版番号	出土地点	種類	法量(cm)			色調・胎土	特徴	備考(生産地・焼)
			瓦当高	文様区高	平汎厚			
25	瓦瀬1	軒平瓦	4.5	2.8	1.5	外) 黄灰25Y5/1 内) 黄灰25Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキヤ印あり。	高知県吾南市夜須町手林「手結柱」銘印あり。
26	瓦瀬1	軒平瓦	4.1	2.5	1.5	外) 黒N4/ 内) 黄灰25Y5/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキヤ印あり。	
27	瓦瀬1	軒平瓦	4.8	3.3	1.5	外) 黒S2Y2/ 内) 黄白S2Y7/1	中心飾りは丁子。両側に均整唐草文。	
28	瓦瀬1	軒平瓦	—	—	1.5	外) 黒S2Y2/ 内) 黄白S2Y7/1	中心飾りは丁子。両側に均整唐草文。	高知県吾南市土佐山田町片地「片口」銘印あり。
29	瓦瀬1	平瓦	—	—	1.5	外) 黒S2Y2/ 内) 黄灰25Y5/1		高知県吾南市土佐山田町片地「片口」銘印あり。
30	瓦瀬1	平瓦	—	—	1.5	外) 黒N4/ 内) 黄白25Y7/1		高知県安芸市 角津内「口木葉」銘印あり。
31	瓦瀬1	平瓦	—	—	1.5	外) 黒S2Y2/ 内) 黄灰25Y5/1		小判形杵内「中己」銘印あり。
32	瓦瀬1	平瓦	—	—	1.5	外) 黒S2Y2/ 内) 黄灰25Y5/1		角津内「中友」銘印あり。
40	瓦瀬2	軒平瓦 左端瓦	—	—	1.6	外) 黒25Y2/ 内) 黄灰25Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
41	瓦瀬2	軒平瓦	4.6	2.2	1.5	外) 黒灰25Y5/1 内) 黄灰25Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	
42	瓦瀬2	軒平瓦 左端瓦	4.5	3.0	1.5	外) 黒25Y2/ 内) 黄白25Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。	
43	瓦瀬2	軒平瓦	—	2.7	1.6	外) 黒25Y2/ 内) 黄灰25Y6/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。	
44	瓦瀬2	軒平瓦	—	—	1.5	外) 黒N4/ 内) 黄灰25Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	
45	瓦瀬2	軒平瓦	—	—	1.6	外) 黒灰N4/ 内) 黄N6/	中心飾りは不明。両側に均整唐草文。	高知県高知市布御田「中直」銘印あり。
46	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.6	外) 黒25Y2/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
47	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.6	外) 黄灰25Y4/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
48	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.8	外) 黒S2Y2/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
49	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.5	外) 黒25Y2/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
50	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.8	外) 黒N4/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。
51	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.8	外) 黒N4/ 内) 黄灰25Y6/1		高知県高知市布御田「布直」銘印あり。

Tab.16 遺物観察表(瓦)

器皿 番号	出土 地名	種類	法量(cm)			色調・胎土	特徴	備考(生産地・鉢)
			瓦当高	文様区画	平瓦厚			
52	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.6	外) 黄灰25Y4/1 内) 灰白3Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片池「片池」鉢印あり。
53	瓦瀬2	平瓦	—	—	1.5	外) 黑5Y2/1 内) 黄灰25Y6/1		高知県香美市土佐山田町 片池「片池」鉢印あり。
123	瓦瀬3	軒丸瓦	—	—	—	外) 灰24N/ 内) 灰	巴文。珠。瓦当にキラ粉。	
124	瓦瀬3	軒丸瓦	—	—	—	外) 灰24N/ 内) 灰25Y6/1	巴文。珠。	
125	瓦瀬3	軒平瓦 左丸瓦	45	29	1.5	外) 黑25Y2/1 内) 灰5Y5/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキラ粉。	
126	瓦瀬3	軒平瓦 右丸瓦	46	26	1.6	外) 黑25Y2/1 内) 灰5Y5/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキラ粉。「右直」鉢印あり。	高知県高知市布師田 「右直」鉢印あり。
127	瓦瀬3	軒平瓦 右丸瓦	—	—	1.5	外) 灰24N/ 内) 灰白3Y7/1	中心飾りは不明。両側に均整唐草文。	
128	瓦瀬3	平瓦	—	—	1.3	外) 灰24N/ 内) 灰白3Y8/1		高知県香美市香北町喜多 野
328	瓦瀬4	軒平瓦 右丸瓦	48	3.0	—	外) 喜灰3N/ 内) 灰白25Y8/1	中心文様は不明。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 舟仲内「喜生口」鉢印あり。
329	瓦瀬4	軒丸瓦	—	—	—	外) 喜灰3N/ 内) 灰白3Y5/1	三ツ巴文と連珠14個。	舟仲内「アキ董」鉢印あり。
330	瓦瀬4	平瓦	—	—	1.2	外) 灰5Y4/1 内) 灰白3Y7/1		鉢印あり。
331	瓦瀬4	平瓦	—	—	1.5	外) 喜灰3N/ 内) 黄灰25Y6/1		小判形枠内「中己」鉢印 あり。
332	瓦瀬4	平瓦	—	—	1.6	外) 喜灰3N/ 内) 黄灰25Y4/1		高知県安芸市 「朝五郎」鉢印あり。
365	SX1 2-2層	軒平瓦 右丸瓦	45	3.1	—	外) 黄灰25Y5/1 内) 黄灰25Y4/1	中心文様は不明。両側に均整唐草文。	
362	SX1 2-2層	軒丸瓦	18.0	14.0	—	外) 黑5Y2/1 内) 灰白3Y7/1	三ツ巴文・連珠16個。瓦当に長い砂が付着。	
363	SX1 2-2層	軒丸瓦	—	—	—	外) 黄灰25Y5/1 内) 灰白3Y7/1	三ツ巴文・連珠。瓦当に長い砂が付着。	
364	SX1 2-2層	軒丸瓦	16.1	11.7	—	外) 黄灰25Y5/1 内) 灰白3Y7/1	三ツ巴文・連珠16個。瓦当に長い砂が付着。	

## 【遺物観察表凡例】

○ 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。

○ 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

## 第V章 考察

### 第1節 史料にみる高知城跡西堀地区の性格と変遷

#### はじめに

高知城西堀の周辺地域は城郭の西側に接するという立地環境にあり、江戸前期には侍屋敷、その後は堀端の緑地と広小路へと転じ、幕末頃には馬場が設けられるなど、近世を通じて、情勢の変化に応じながらその景観を変えた一帯である。

平成19年度に確認調査を行った高知地方裁判所北側の地点は、この西堀の南角付近にあり、高知城伝下屋敷跡<sup>(注1)</sup>の北側に隣接している。学術目的の試掘確認調査であったため、調査面積は対象区全体の一部にすぎないが、各所に設けた試掘坑内からは内堀跡及び近世前期から後期の遺構と遺物が検出されており、高知城西堀とその周辺の土地利用の在り方を知る貴重な情報が得られている。

これらの検出遺構の性格を知る手掛かりとして、ここではまず、関連の絵図、文献史料などを取り上げながら、その歴史的背景と変遷をみていくこととする。

#### 1. 江戸前期

##### 17世紀の景観と居住者

高知城の西堀に接する一帯には、西大門から西に向かう「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる筋があり、南北筋の両側に侍屋敷が並んでいた。

寛永元年(1624)から万治2年(1659)間の作成と推察されている『侍町小割帳』<sup>(注2)</sup>(史料1-B)によると、堀西側の侍屋敷は、南北筋の東に面して北から「岡村平次」「安藤宇右衛門」「沼津玄達」の武家名が記されている。位置関係からみて、今次調査区は「沼津玄達」の屋敷が該当すると考えられ、同史料には「沼津玄達」の項に「弐拾六間五尺」「南面拾九間半」と屋敷地の間口も記入されている。また同史料では、城の南側を東西に延びる「御屋敷筋」の西端に「御屋敷下やしき」の記載があり(史料1-A)、前後の屋敷との位置関係から、堀の南西角外側の一角、すなわち「沼津玄達」屋敷の南側に接する地点が、「御屋敷下やしき」にあたると考えられる。<sup>(注3)</sup> 同屋敷については、間口「四拾間半」とその規模が記されており、「沼津玄達」屋敷の南側には、倍程の広さをもつ藩主関連の屋敷が存在したことが分かる。

次に、寛文9年(1669)とされる『寛文己酉高知絵図』<sup>(注4)</sup>(Fig.47-図1)には、西大門に至る南北筋の東に面して北から「桑山伊左衛門」、その隣地は空白、南端に「福岡内丞」の侍屋敷がみえ、今次調査区は「福岡内丞」の屋敷となっている。また「福岡内丞」屋敷の南側に接して、堀の南西角外側の一角には、堀を伴った屋敷の絵が描かれており、『侍町小割帳』に記された「御屋敷下やしき」と同一のものと推察される。

統いて、『皆山集』に収められた『元禄二、三年間之図』(1689~1690)<sup>(注5)</sup>(Fig.47-図2)では、福岡氏の屋敷は元の堀西側南端に無く、同地点には「長屋」の武家名がある。先の寛文9年絵図では、元の長屋氏屋敷は升形にあったが、長屋氏が堀西側へ移るとともに福岡氏が升形に移っており、丁度

両氏の屋敷位置が入れ替わる形となっている。なお、元禄2・3年間絵図でも、堀の南西角外側の一角は「御下屋敷」となっている。

この様に、17世紀中葉～後葉にかけて、該当地点では「沼津」「福岡」「長屋」の武家屋敷が比較的短期間に内に入れ替わっていることが分かる。該当地は城内堀の西岸に接するとともに、藩主に関わる屋敷の北側に隣接するなど、城下でも重要な位置にあたっている。そこで、ここに屋敷を与えられた「沼津」「福岡」「長屋」各氏がどういった性格をもつものであったのか、みておきたい。

#### 沼津氏について

沼津氏については、「侍町小割帳」にある「沼津玄達」の他は、絵図、系図、その他の史料に名が見えず、手掛かりが得られていない。なお、「侍町小割帳」については、他の武家の家督相続期間等も考慮すると、同資料の成立時期を正保2年（1645）以前に繰り上げることが可能で<sup>(註6)</sup>、沼津氏が堀西側に屋敷を構えた時期も17世紀前半に推定することができよう。

#### 福岡氏について

福岡氏は、初代から藩の要職につき、3代藩主忠豊の代から明治維新まで家老職を勤めた武家である。寺石正路「土佐名家系譜」<sup>(註7)</sup>によると、福岡氏はもと大和国添上郡狭河の城主であったもので、初代の福岡丹波千孝が江州長浜で山内一豊に仕え、遠州掛川では500石仕置役となっている。一豊の土佐入国後には、福岡丹波千孝は1000石の中老職、仕置役を勤め、2代藩主忠義の代には、国内を巡回して境界を調査し年貢を決めるなどの功績を残した。寛文10年（1670）には3代の福岡宮内孝序が家老となって、以後明治維新まで福岡氏が家老職を勤めている。

「御侍中先祖書系図譜」<sup>(註8)</sup>に収められた初代から3代までの跡目相続の期間と、各代の役職は次の通りである。

初代	丹波千孝	寛永9年（1632）没 中老 1000石
2代	圖書孝政	寛永9年（1632）相続 万治3年（1660）没 中老 知行1500石
3代	宮内孝序	寛文10年（1670）より家老 宝永3年（1706）没 知行2000石
4代	宮内孝紀	家老 奉行職
5代	縦殿孝幹	天明元年（1781）奉行職 知行2800石
6代	内記孝誼	天明8年（1788）奉行職
7代	孫十郎孝則	近習御用
8代	縦殿孝安	近習御用
9代	宮内孝茂	家老 奉行職 知行3000石

ところで、正保年間（1644～1648）の城絵図、及び慶安4年（1651）の絵図には、城内南東隅の堀内側の平場は「侍屋敷」とされているが、この箇所について、「皆山集」に収められた絵図では「福岡丹波屋敷」との記述が認められている。また、先の「侍町小割帳」の末尾にも、「城中」との書き付け<sup>(註9)</sup>を付して「野中主計」「福岡圖書」他数名の要職の武家名が記されている。（史料1-C）これらのことにより、初代から2代目まで、福岡氏が堀内に屋敷を賜り、藩の重鎮として重用されたことが窺われる。また3代目の福岡宮内以降は、深尾家とともに城南正面の南北筋に面して屋敷を置いており、以後幕末まで、福岡家屋敷は本町に置かれている。

さて、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』で堀西側に屋敷を構える「福岡内丞」は福岡氏の支家にあたり、中老、福岡圓書孝政（福岡氏2代目）の二男であった福岡左近右衛門孝章を初代として、代々御馬廻を勤めた上級武士である。8代福岡兵三孝和が藩に差し出した系図<sup>〔註10〕</sup>によると、初代の左近右衛門孝章は慶安2年（1649）に登用されて御小姓組<sup>〔註11〕</sup>となるが、その後、万治元年（1658）に知行200石、寛文元年（1661）と寛文12年（1672）にそれぞれ100石を加増して、天和2年（1682）に御馬廻<sup>〔註12〕</sup>となっている。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた初代以降の跡目相続の期間と役職は、次の通りである。

初代 左近右衛門孝章	慶安2年（1649）登用 天和2年（1682）御馬廻 元禄11年（1698）没
2代 平馬孝輝	元禄12年（1699）相続 享保17年（1732）没 御馬廻
3代 内之丞孝周	享保18年（1733）相続 宝曆7年（1757）没 御馬廻
4代 内之丞孝惟	宝曆7年（1757）相続 安永8年（1779）没 御馬廻
5代 助之進孝時	安永8年（1779）相続 文政5年（1822）没 御馬廻
6代 平馬孝行	文政6年（1823）相続 嘉永4年（1851）没 御馬廻
7代 左門孝壽	嘉永4年（1851）相続 安政6年（1859）没 御馬廻
8代 兵三孝和（貞吉三兵衛）	安政6年（1859）相続 御馬廻

各々の家督相続の期間からすると、寛文9年（1669）絵図に見える「福岡内丞」は初代の福岡左近右衛門孝章（前名は、□□右衛門内丞）（当時、300石か）が該当するとみられる。その後の絵図では、福岡氏は升形へ移っており、以後幕末まで升形に屋敷を置いている。<sup>〔註13〕</sup>

#### 長屋氏について

長屋氏は、初代の長屋喜内重之が慶長7年に知行300石を与えられ山内一豊に仕えて以降、幕末まで御馬廻を勤めた上級武士で、山内資料に収められた『寛永五年諸士分限帳』<sup>〔註14〕</sup>では初代の長屋喜内が御馬廻、知行500石となっている。

8代の長屋数衛重次が藩に差し出した系図<sup>〔註15〕</sup>に記された、長屋氏の跡目相続の期間は次の通りである。

初代 喜内重之	慶長7年（1602）
2代 喜内重吉	寛永19年（1642）相続 延宝3年（1675）没
3代 右内重孝	延宝3年（1675）相続 元禄7年（1694）没
4代 彦太夫茂良	元禄8年（1695）相続 宝曆6年（1756）没 知行300石
5代 慈四郎茂通	宝曆6年（1756）相続 寛政3年（1791）没 知行200石
6代 源内繁嗣	寛政3年（1791）相続 文化4年（1807）没
7代 彦太夫重直	文化4年（1807）相続 廉応2年（1866）没
8代 数衛重次	廉応2年（1866）相続 世禄80石、知行150石

このうち、寛文9年（1669）の絵図で升形に屋敷を構えている「長屋内」は、2代目の長屋喜内重吉にあたると考えられ、元禄2・3年間（1689～1690）の絵図（Fig.47-図2）で堀西側に屋敷を移している「長屋」は3代目、元禄10～12年の絵図（Fig.47-図3）で同位置に見える「長屋彦太夫」は4代目（当時、300石）にあたる。堀西側の屋敷群が撤去となって以降は、長屋氏の屋敷は本町に移り、幕

末まで留まったことが以後の絵図から分かる。<sup>(註16)</sup>

この様に、17世紀代において該当地には、藩の重鎮の家系となる武家や、山内家初代より御馬廻を勤め知行300石以上を給された上級武士の屋敷が置かれた。3氏のうちで居住が最も早い沼津氏については、『侍町小割帳』の年代観等から、正保2年(1645)以前には居住を開始していることが推察できるが、17世紀初め以来の状況は詳細がつかめていない。しかし、今回の試掘調査では、景徳鎮窯の古赤絵皿、志野焼など16世紀～17世紀初頭の遺物を含む落ち込み状の遺構が検出され、江戸初期より高い経済力をもつ武家の屋敷が存在していたことが窺われる。

## 2. 江戸中期以降

### 18世紀の景観

さて、その後の内堀西側の動向を知るものとして、延享3年(1746)の絵図(Fig.47-図4)と、それ以降の近世絵図(Fig.47・48・図5～11)を参考としたい。(Tab.17)

延享3年『高知城郭内図絵』、及び『延享三年之図』(Fig.47-図4)では、堀西岸に接する一帯には侍屋敷は無く、黒色の帶で表記されており、堀端の土手や緑地を表したものと思われる。また、緑地の西側は南北の広小路となっており、「西大門廣小路」と記されている。堀南西角外側の空間については空白で、かつての藩主関連の屋敷は無くなっている。

17世紀末以降の景観の変化については、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年(1698)の大火灾以後、堀西側の侍屋敷が撤去され、前面の筋が広小路になったとされる。これについて「皆山集」には「貽謀記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸戸門前より南不破氏の辺迄両輪侍屋敷ニテ第十某など云侍居けると也火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」とある。<sup>(註17)</sup> また、享保12年(1727)の大火灾では、追手門他の数棟を除いて城内の大部分が焼失しており、この後、延享4年(1747)9月27日に城門の呼称が変更される<sup>(註18)</sup>とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」に改められたという。

### 元禄、享保の大火灾と堀西側の被害

この様に、元禄11年と享保12年の大火は、内堀西側の景観にも大きな変化をもたらした。これらの火災に関連する焼土層や火災に伴う廃棄土坑は、今次調査区と南側の高知城伝下屋敷跡、北側の高知城跡(平成17年度旧宮林局跡地点の調査)の発掘調査<sup>(註19)</sup>でも確認されており、堀西側の地区一帯が被害を受けた痕跡が残っている。そこで、元禄11年及び享保12年の大火に関わる幾つかの記事のうち、特に内堀西側周辺での被害の状況が分かるものを挙げておく。

まず元禄11年の大火について、『南路志』に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」<sup>(註20)</sup>には、焼失した北奉公人町、内堀、帝屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷176軒が列挙されているが、ここでは「内堤」の焼失した侍屋敷の中に「内堤... (中略)... 岡田又兵衛 飯沼太右衛門 安藤藤十郎 長屋彦太夫」とあり、長屋氏4代目の「長屋彦太夫」屋敷が焼失したこと分かる。また、「皆山集」の「元禄二、三年間之図」(Fig.47-図2)で北隣にあった「安藤藤十郎」、南北筋の西側に対面する「岡田又兵衛」「飯沼太右衛門」の名も見え、一帯の屋敷が焼失している。

また同資料では、城内堀の南側を東西に延びる帝屋町筋について「帝屋町筋 御下屋敷 御屋敷 新

馬場御亭 同御厩 太口(鼓力)丸 山内勘兵衛 桑山貞右衛門... (以下略)と記しており、屋敷の位置関係等からみて、内堀南西角外側の一角にあった「下屋敷」とされる屋敷も焼失に至ったことが分かる。<sup>(註20)</sup>

次に享保12年の大火について、「南路志」<sup>(註22)</sup>に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失附公義御差出」の記事には、城郭は、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門が焼け残るが、天守、本丸、二の丸、三の丸をはじめとする殆どが焼失し、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したことが記されている。この中で、郭中の侍屋敷については「郭内残家帯屋町北側山田多門屋敷より下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅より今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北蔵際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋戸之内北小笠原又右衛門外輪より南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傳十郎より合而八軒。鷹匠町南側西より八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷲見市壹軒。合四拾九軒残。」と、焼け残った侍屋敷の範囲が示されており、これからみて、堀西側一帯の侍屋敷は「西大門北蔵際、佐藤五郎左衛門」の屋敷1軒を除いて残らず焼失したことが窺われる。

#### 大火以降の景観と変遷

これ以降の景観について、先の延享3年(1746)絵図以降、寛延年間(1748~1751)頃の『寛延年間頃高知城下郭中之図』(Fig.47-図5)、天明年間(1781~1789)頃の『天明年前後高知絵図』(Fig.48-図6)でも堀西岸外側は帯表記で縁地。享和元年(1801)の『高知御家中等施図』(Fig.48-図7)では堀の西岸は記載が無く、西側の南北筋に「西弘小路」。天保元年(1830)の『天保元年高知之図』(Fig.48-図8)では堀西岸に森林が描かれてその西は記載が無いが広小路となっている。また、天保12年(1841)『土佐国高知城下町絵図』でも西岸に帯表記、南北筋に「廣小路」の表記がなされている。これら一連の絵図に見えるように、18世紀には堀西側の堀端は縁地、その西は「西大門廣小路」「西弘小路」「廣小路」と呼称される南北の大道となり、18世紀初めから19世紀前葉にかけてほぼ変化が無い。

次に堀西側に変化が見えるのは、弘化年間(1844~1848)の『弘化年間旧郭中絵図』(Fig.48-図9)で、ここではもとの広小路の一部が「新御馬場」となっている。また、天保2年(1831)以降とされている『天保二年後古図』、安政5年(1858)の郭中図でも「新馬場」が見え、『皆山集』に収められた文久3年(1863)の絵図(Fig.48-図10)では、堀西岸に「御留杉」、その西が「新馬場」となる。また、幕末頃とされる『高知郭中図』(Fig.48-図11)でも堀西側が「新馬場」とされている。この「新馬場」新設の時期については、「皆山集」に、「嘉永二四年五月初テ馬場トナル東西八間南北九十六間」とあり、嘉永2年(1849)に設けられたとされている。<sup>(註23)</sup>

一方、周辺での変化については、享和元年(1801)の絵図(Fig.48-図7)で広小路の南の詰めに「御厩」が現れている。以降の絵図でも、該当地には「御厩馬場」「御馬屋」などと表記されて、幕末まで継続する。

また、堀南西角外側の一角の敷地は、天保元年(1830)絵図(Fig.48-図8)では、周囲を堀で囲み南東に小さな建物を伴った施設の絵が描かれており、建物の脇に「御番所」の文字が記されている。

天保12年（1841）の絵図でも、表現が略化されるものの、やはり南東に建物を伴った施設が描かれる。続いて、弘化年間（1844～1848）の絵図（Fig.48-図9）では建物はみられないが堀で囲んだ施設が描かれており、先の天保元年、天保12年絵図に描かれる番所と同様のものかと思われる。また、天保2年（1831）以降とされる『天保二年後古図』、安政5年（1858）の絵図においては、同地点に「新番所跡」の文字が記されており、この時点では番所はその機能を失っていることが窺われる。この後、『皆山集』に収められた文久3年（1863）の絵図（Fig.48-図10）では、該当部分の西半分に「薬園」、東半分に「住吉宮」とあり、幕末の『高知城中図』（Fig.48-図11）では堀南東角外側に「住吉神社」とされている。

## おわりに

以上、史料から、内堀西側とその周辺の景観変化をみてきた。堀西側の一带は、内堀や藩主の屋敷に隣接するなどの立地条件をもち、17世紀までは、老中の縁戚など藩の重鎮に關係の深い武家、山内家初代より御馬廻を勤め知行300石から500石を給された上級武士などが、屋敷を与えられた。その後、元禄11年の大火を契機に緑地と広小路へと転じるが、19世紀前葉以降は周囲に城、番所などの施設が現れるとともに、19世紀中頃には堀西岸へも馬場が設けられ、藩の施設としての機能が拡大していく。

こうした変化をみていくと、その景観変遷の画期は、大火を契機に居住地から緑地、広小路へと転じる17世紀末～18世紀初頭と、藩の施設が増設されその機能が変化し始める19世紀前半にあつたといえよう。史料上にみえるこれらの画期や、空間の機能の変化が、遺跡での遺構の発見状況や遺物の在り方などどのように関わり合い反映されているのかについては、次節にて検討することしたい。

## 謝辞

今回の報告にあたっては、絵図資料の調査について吉松靖峯氏、筒井秀一氏より、多くのご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

## 【註】

- 1)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡載元倉敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 2)『土佐国史料集成土佐國書類第八卷』高知県立図書館2006より引用。『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名を列記している。寛政3年（1791）と文政9年（1826）の2回書写されている。史料の成立年代は不詳であるが、書寫した人物が史料末尾に付記した内容によると、寛永元年（1624）に山内家に召し抱えられた仙石忠右衛門と、万治2年（1659）に他国へ出た間宮九左衛門の屋敷が記されていることから、寛永から万治2年の間に成立したものと推測されている。ただし、『御侍中先祖書系図帳』と人名との照合など今後の研究によって、成立時期をさらに絞り込むことが可能であろうとされる。なお、『侍町小割帳』に表れる「金子源左衛門宅明」が

正保2年(1645)に没していることなどから、史料の下限を正保2年以前まで繰り上げることも可能であろう。

- 3) 池澤俊幸「高知城伝下屋敷跡の調査成果と文献史料」『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター－2002年
- 4) 「寛文己酉高知絵図」(高知市立市民図書館所蔵)は作成者や年時を示す奥書きは欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文9年頃の図と判定したと推測されている。また、同絵図は内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されており、藩内用に著がれ成したものと推測されている。大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001
- 5)『土佐之国史料類纂皆山集』第九巻
- 6) 浜田恵子「金子橋遺跡、居住者の性格と動向」『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008
- 7) 寺石正路「土佐名家系譜」歴史図書社昭和51年
- 8)『御侍中先祖書系図譜』土佐山内家宝物資料館
- 9)『侍町小割帳』は寛政3年(1791)と文政9年(1826)の2回書写されており、伝世する文政9年の書写は市民層登なる人物が行ったものである。同史料末尾の注記には、氏名の肩書きは本書の付札にあたるとある。
- 10)『御侍中先祖書系図譜』土佐山内家宝物資料館
- 11) 御小姓組は藩主に従って戦場や参勤交代に行くという意味が身分名となった中級武士で、30石～300石。
- 12) 御馬廻は藩主の周辺を固めるという意味が身分名になった上級武士で、150石～600石。
- 13) 延享3年(1746)絵図には、升形に「福岡内之丞」(3代内之丞孝周か)が見える。享和元年(1801)に見える「福岡助之進」は5代の福岡助之進孝時、また、天保元年(1830)絵図には、同地点に「福岡平馬」の記述があり、6代の平馬孝行に該当する。幕末絵図にみえる「福岡貞吉」は8代の福岡兵三孝和(前名は貞吉三兵衛)に該当するとみられる。各絵図に表れるように、福岡左近右衛門孝章から繁がる福岡家は、西広小路改修の後は、里敷を南に移しその後幕末まで居住したことが分かる。
- 14)『山内家史料第二代忠義公記』第二編土佐山内家宝物資料館
- 15)『御侍中先祖書系図譜』土佐山内家宝物資料館
- 16) 享和元年(1801)『高知御家中等龜図』では、6代目の長屋源内の名が本町筋の南側に見える。また、天保元年(1830)『天保元年高知之図』、弘化年間(1844～1848)『弘化年間旧郭中絵図』、幕末頃の『高知郭中図』では本町の同位置に7代目「長屋彦太夫」の名が見える。
- 17)『高知市街誌稿』『皆山集』巻9高知県立図書館より引用。
- 18)『皆山集』
- 19)『高知城跡旧營局跡地発掘調査現地説明会資料』高知市教育委員会2006
- 20)「巻七十、豊昌公御代七付録」「土佐国史料集成南路志」第七巻高知県立図書館平成6年より引用
- 21)『皆山集』に収められた「元禄十一年寅ノ十月六日家焼失覚」(『土佐之国史料類纂皆山集』第6巻高知県立図書館)の内容もほぼ同様である。
- 22)『南路志』巻七十五、豊敷公御代一より引用。